

海
に
舞
う
蝶

Kとは江の島で知り合った。海岸の駐車場でバイクをとめてタバコをフカしていると、後ろから

「今日の海は穏やかですね。ボクはこういう海が好きだな」

と声がした。それがKだった。メットを片腕に通してバイクを押しながら近づいて来た。バイクはスズキのGSX400だった。見知らぬ人間に声をかけられるとそれだけでも緊張してしまう僕なのだが、Kの笑顔にはどこか僕の警戒心を解きほぐすものがあった。

二人ともバイク好きだった。一人で走るのが好きだった。暴走族は嫌いだった。バイクのメカはそれほど強くなかった。ツーリング好きのライダーだったのだ。そして二人とも高校を留年^{ダブ}っていた。もっとも僕は昼の学校でKは定時制に通っていたのだが。

Kと知り合ったのが去年の夏だった。夏といっても八月の下旬で、湘南海岸の海の家は解体作業が始まり、鉄骨の骨組みだけになっている方が多かった。それでも去り行く夏を惜しむ人たちがたくさん浜辺で波とたわむれていた、そんな日曜日だった。

それから二人でよくツーリングに出かけるようになった。二人とも山よりは海の方が好きだった。日帰りで湘南、伊豆、遠くは浜名湖まで、東は房総、九十九里、大洗海岸まで出かけた。僕はできれば泊まりがけでも行きたかったのだが、Kの仕事のつごうでいつも日帰りだった。それに日曜日しかKは空いてなかった。月に二、三度僕の方から電話する

こともあれば、Kから電話がかかってくることもあった。Kは東京の下町のY区に、僕はそれと川をはさんで対岸のA県に住んでいた。二人でツーリングに出かける時はいつも、湘南方面は第三京浜で、房総方面は湾岸道路で待ち合わせをした。

Kも僕も口数は少なかった。ドライブインで休憩をとる時や、向こうに着いて海岸で寝そべったり近くの食堂に入って昼メシを食べている時も、ほとんど言葉をかわさなかった。僕は高校に入ってから覚えたタバコを吸い、タバコを吸わないKはいつも遠くを見ているようだった。Kは細面で肩までかかる長髪をしていたので、ラーメンの汁を飲む時などいちいち髪を耳の後ろまで持つて行かなければならなかった。僕が何かKにしゃべると、Kは長い顔でゆっくりうなずいてから二言、三言話すのだった。

あれは知り合ってから二回目か三回目にツーリングに行った時のことだろうか。肩を切る風にも秋の涼しさが感じられるようになったところだ。内房の小さな入り江に行つてそこでバイクをとめた。誰もいない海岸で二人で砂浜の上に仰向けになった。沖合に松の木が五、六本生えている小さな島が浮かんでいた。抜けるような青空を見ているうちに、僕は衝動的に自分の留年のことをKに話したくなつた。それが僕にとつて一番の心の重荷になつてきたことなのだ。だからこそKには知つておいて欲しかった。Kは上を向いたまま黙つて僕の話聞いていた。時々僕が話を区切つてKの方に頭を傾けると、Kは、分かつ

たよ、というようにゆっくりうなずいてくれた。

僕は中学までは優等生だったのだ。勉強しなくてもテストの点数はとれた。成績は良かった。A県のトップ校と言われる〇〇高校には間違いなく合格できると思っていた。先生もそう言っていたのだ。それが忘れもしない合格発表の日、友人と連れ立って見に行つた掲示板に僕の名前はのつてなかった。僕はガクゼンとしてしまった。友だちも驚いていた。不合格者は十数人だけだったのだが、その中に僕も入っていたのだ。目の前がまっ暗になってしまった。高校に入つたらアレもやろう、コレもやりたい——そんな夢がいっぺんに吹き飛んでしまったのだ。〇〇高校はA県でも自由な校風として知られていた。イロイロ規制の厳しかった中学ともオサラバして、僕の前には広々とした海が開けてくるはずだった……。

親もさぞ驚いたことだろう。何しろ中学の担任の教師からは「オタクのお子さんはダイジョウブ、間違いなく合格します」と父母面接で何度も言われていたのだから。合格発表の日、校門を出てすぐ近くの公衆電話から家に電話を入れた。動揺していたので電話番号をド忘れしてしまった。震える指でダイヤルを回すと、オフクロの陽気な声が聞こえてきた。「ダメだったよ」と言うのと、電話口でボーゼンと立ちつくしているオフクロの姿が目に見えなかった。僕は涙声になっていた。

私立の併願はしてなかった。翌日オヤジが会社を休んでオフクロと二人で学校に行った。

僕は行きたくなかった。実際熱を出して家で寝ていたのだ。何とかK高校の二次募集が受けられることになった。オヤジのコネが裏から働いたのかもしれない。K高校は私立の男子校だった。昔は優秀な生徒が集まっていたそうだが、今では学区内の底辺校に落ちている。オヤジはそれを知っていたのだろうか？正直言つて僕はそんな高校へ行きたくなかったが、ほかにどうしようもないように思えた。中学浪人だけはしたくなかったのだ。みんなが高校へ通つてるのに一人だけ予備校や家で入試勉強なんかしてるのはイヤだった。そんな宙ブラリンの状態になりたくなかった。K高校の試験は面接と小論文だけで、あっさりと通つてしまった。試験場でも僕は、どうして〇〇高校の入試に落ちたのか、そればかり考えていた。

試験のデキは自分でも悪くないと思った。体調もバンゼンだった。翌日の新聞にのった解答速報と照らし合わせてみても、そんなにミスはしていなかった。成績は通知票として手もとにある。いつもクラスで一、二番だった。あと考えられることはただ一つ、内申書だった。

あのヤロー

僕は教師にとっては手を焼く存在だったに違いない。いつも担任を困らせていたのだ。決してワルだったわけではないが、教師が嫌がる典型的な生徒だったのだ。たとえばロングホームルームの時間にクラスで話し合いをしている。ナカナカまとまらない。担任が時

間を気にして一つの結論のようなものを出してくる。するとクラス委員の僕が、担任の尻馬に乗るどころか逆に「先生、それはいつも先生の言ってることと違うと思います。生徒の話し合いに教師が口を出すのは民主的ではないと思います」とアジるのだった。それでロングはメチャメチャになった。そうやって担任のメンツをつぶしたことが何度もあった。僕が高校入試に落ちた理由はただ一つ、教師が僕への報復として内申書に不利なことを書いたに違いないのだ。

「この生徒は教師に反抗的などころがあり、扱いに注意を要します」ウンヌンと。

それしか考えられなかった。父母会の席でオフクロに「絶対ダイジョウブですよ」と笑いながら言った担任のジャガイモ頭が目につかんだ。ハンマーで頭をたたき割ってやりたかったが、できなかった。重い足を引きずるようにしてK高校の入学式に行った。門のところまでバツタリ、中二の時に同級だったBに会ってしまった。Bはマジマジと僕の顔を見つめると

「へえー、こりやタマげたぜ。あんなアタマのいい大久保がこんなバカ高校に来るとはねえー」と、あざけるように言った。僕は中学の時はこのBなど目もくれていなかった。まったく影の薄い存在で、勉強は全然できなかった。ただ体だけは大きく、柔道部に入っていて確か市の柔道大会で優勝していたはずだ。その程度の影響しかBには持っていなかった。

悪いことに、そのBがK高校では僕と同じクラスになっていた。僕の中学からはほかに四、五名がK高校に入学していたが、名前も聞いたことのないような連中ばかりだった。

高校は中学以上にヒドイところだった。教師は教科書を読んで黒板に書くだけの退屈な授業しかしなかった。情熱も何も持ち合わせていなかった。授業はただひたすら時間が過ぎるのを待っていた。校則だけは厳しかった。週に一度、頭髪検査と服装検査があり、パーマをかけていると床屋に切りに行かされ、制服以外の服を着ていると家まで脱ぎにやらされた。それが三回重なると退学処分になるのだった。バイクの免許は校則で取得が禁止されていた。無気力な教師たちの口ぐせは「昔は良かった」だった。何でも卒業生の中には大学教授や県会議員になった人もいるらしい。今では考えられないことだった。授業中に教師がそのことを口にするたびに、生徒は黙ってうつむいたままそれに耐えていた。

クラスメート 同級生たちも何のために高校へ来てるのか分からないような連中ばかりだった。授業中は皆静かにしていて教師にも反抗的な態度はとらないが、休み時間になるとトイレでタバコを吸ったり、教室でバカ話をしていた。金、オンナ、バイク、マージャン、そんな話題ばかりだった。僕にはクラスで話せる友だちができなかった。僕のレベルに合う生徒は一人もいないように見えた。予想していた以上にヒドイ高校生活に失望して、僕はともすれば大学進学というバクゼンとした夢への自分なりの勉強をおこたりがちになってしまっ

た。テストは、チヨコット勉強すれば点がとれた。僕は目標を見失って、ダンダンと高校生活に流されていった。そんな時だった。僕へのイジメが始まったのは。

クラスには留年生が二人いた。二人とも小柄でそんなにワルには見えなかったが、自分の劣等感の裏返しが必要以上にワルぶっていた。その二人を中心にしてクラスで十名弱のワルグループが形成されていった。その中にBもいた。そして僕がヤツラの標的になってしまったのだ。

クラスには僕から見ても柳の枝のように弱々しい生徒が何人かいた。はじめ僕は彼らが何でこんなガサツな高校に入学したのか分からなかったが、彼らとて望んで入ってきたのではないだろう。単に成績でふり分けられただけなのだ。僕と同じように、ほかに行くところがなかったのだろう。ひよつとしたら〇〇高校を受験して落ちた同類もいたかもしれない。そういう虚弱な生徒たちは、ワルの食欲をそそらなかった。むしろ僕のような弱いのだが人一倍負けん気の強い人間がイジメのターゲットに選ばれるのだった。

最初は「坊っちゃん」と呼ばれることから始まった。授業中僕が教師から指名されて立ちたりすると、どこからか「坊っちゃん」という小声がしてクスクス笑いが起きるのだった。出どころはBだった。Bが僕のことを「大銀行の支店長の息子」と言いふらしていたのだ。実際は僕のオヤジは支店長代理にすぎなかったのだが。それから次にイタズラ書きが

始まった。教科書にデカデカとオマンコマークや「私、好きよ」などとマジックで書かれて、授業中開けなくなつた。パシリと言つて、昼休み売店へジュースを買いに行かされた。留年生の分を僕が買つてくるのだ。それでも一学期はその程度ですんでいた。僕も耐えていた。ヤツラにとつて僕は利用価値があつたのだ。よくテスト前になると、「大久保、チョット、ノート貸してくれないか」と言つてノートを借りに来た。ふだんワルたちはロクにノートもとつていなかったのだ。イジメのことは担任には言わなかつた。そんなことをすれば必ずホーフクされるのは分かりきつていたし、無気力な担任にはハナから見切りをつけていたのだ。

そんなこんなで一学期も終わり、夏休みはボンヤリと家で過ごしていることが多かつた。そう、あれは忘れもしない九月に入つて最初の体育の時間だつた。まだ水泳の授業だつたので、休み時間に教室で海パンにはきかえていた。どうも雰囲気が始めからおかしかつた。何人かの生徒が僕の方を向いてニヤニヤ笑うのだ。僕がズボンを脱いでバスタオルを腰に巻こうとした時だつた。留年生の一人が机の上に飛び乗つて「皆の者、かかれえ」と芝居がかつた声を上げた。すると、それを合図に十数人がワツと集まつてきて僕のパンツを脱がせ始めたのだ。まっさきにやつて来たのがBだつた。Bは留年生の一の子分になつていた。大柄なBにはがいじめにされて、僕はなすすべもなく虚しく抵抗していた。足をバタ

つかせたがすぐに僕のブリーフは脱がされ、遠くに放り投げられた。十いくつの顔がまるく輪になって見下ろしていた。その中心に留年生がいた。

「何でえ、こいつ、デケエつらしてるわりにはカワイイチンポしてんでやんの」

あざけるようにそう言うと、留年生は僕の急所にペツ、とツバを吐いた……。

それからだった、僕が体育の授業のある日を休むようになったのは。実際朝になると、僕は頭痛がしたり腹が痛くなって学校へ行けるような状態ではなかったのだ。僕が休み始めるのと並行して、ヤツラのイジメもエスカレートしてきた。昼休み、弁当を取り上げられて食われてしまった。売店でパンを買おうと思つて金を持って行くと、それもせびられてまきあげられてしまった。仕方ないので昼は水をガブガブ飲んでヒモジイのをガマンした。もう僕はヤツラにとつて利用価値がなくなつてしまつたのだ。実際僕のノートは、休んでいたのどトビトビになつて使い物にならなくなつていた。二学期の後半からはまったく学校に行かなくなつた。家で一人TVゲームをして遊んでいた。三学期も同様だった。当然の話ながら、出席日数不足で留年してしまつた。

二年目の一年は、心を入れかえてイチから出直すつもりだったが、結局行つたのは始業式の日だけだった。あとはバイトをしてバイクを乗り回していた。今年も間違いなく留年だろう。そうしたら高校を辞めなければならない。K高校には、同じ学年を二度留年し

たら退学処分にする、という内規があるのだ。それはオフクロと行った二度日の始業式の日、新しい担任からイヤというほど聞かされていたことだった――

話し終えた僕の目尻には涙が浮かんでいた。僕はそつと指でぬぐってから、Kの方に顔を傾けてみた。Kはあい変わらず空を見上げたまま、大きく二、三度うなずいただけだった。そんなKの反応が僕にとって物足りなく思う半面、正直言っつうれしかったのだ。たとえKが

「大久保、そんなことに負けるなよ！」

と言っつてくれたとしても、そんなものはその場限りのコトバのオアソビだった。僕が欲しかったのはそんな薄っぺらい同情などではなかった。僕の苦しさを分かち合っつて欲しかったのだ。だからなおのことKの無言の励ましが僕には身にしてみた。Kだけは僕のことを分かっつてくれている、そう思っつた。何しろ同じ留年生ダブリの身の上なのだから……。

それからKもポツリ、ポツリ自分のことを話してくるようになった。何しろ口数の少ない男だっつたから、いつも断片的なことだっつたが。

KはY島出身だっつた。九州の南、太平洋に浮かぶ小島だ。Kはそこで生まれたのではなかつた。Kが生まれる直前に一家で東京へ出て来たのだっつた。だからKにとっつてY島は、お母さんの腹の中で見た故郷だっつたのだ。Kの家は向こうでは農業をしていたのだが、狭い土地で生活が苦しく、オヤジさんが東京から来た「パイン作りのプロ」と自称する男の話に

つい乗ってしまった。要するに悪徳サギ師のブローカーだった。あとには多額の借金だけが残った。Kの一家は先祖伝来の家も土地も処分して、夜逃げ同然でこっちへ出て来たそうだ。それでもまだ借金の返済が残ってるという話だった。そんなことをKは言いにくそうに話してくれた。今こちらでKのオヤジさんはビルの清掃関係の仕事をし、オフクロさんもパートで働きに出ているらしい。Kが長男で、下には二、三人弟や妹がいるということだった。KはY島には一度も行ったことがなかった。

Kの話聞きながら、僕は自分の家のことを思い浮かべていた。何から何まで対照的だった。世間的に言えば恵まれた家庭なのだろう。オヤジは四十代で大手銀行の支店長代理だった。A県でも高級住宅地と言われるD市の高台にすでにマイホームを建てていた。大学時代テニス同好会で知り合ったオフクロとは、学生結婚だった。オフクロは今も専業主婦で、子どもにも手がかからなくなったので空いた時間はテニスや生け花のカルチャー教室に通っている。僕が長男で、下には弟が一人いた。弟は僕を見て育ったためだろうか、何から何まで僕と反対で親の前ではイイ子ぶっていた。今中学二年生で成績も悪くなく、野球部で副主将キャプテンとして活躍していた。

そんなはた目に見て「幸福な」家に、突然僕の登校拒否が襲いかかったのだ。二学期に入って僕は学校を休み始めた。朝になると「頭が痛い」、「腹がゲリだ」と言って部屋から

出なかった。そのたびにオフクロが学校へ欠席の連絡を入れていた。それがたびたび続いたので、オフクロが「シゲオちゃん、一度病院でみてもらったら」と言った。僕もゲリが続くしオヤジのこともあったので、精密検査を受けることにした。オヤジは胃弱でいつも胃薬が離せないのだった。私大の附属病院で胃の検査を受けた。バリウムを飲んでレントゲンをとったりして調べたが、どこも悪くなかった。

「精神的なものではないですか」

診察にあたった若い医者がオフクロに向かって言っていた。

それで僕の“病氣”が治るはずもなかった。二学期後半になると僕は続けて休むようになり、そのままズルズルと学校に行かなくなってしまった。はじめオフクロは朝二階まで上がってきて「シゲオちゃん、シゲオちゃん、学校へ行く時間でしょ」と言っていてドアをノックしていたが、僕はフトンをかぶって寝ていた。部屋にはカギをかけておいた。そのうちオフクロは朝呼びにこなくなつたが、昼前僕がノコノコ起き出して遅い朝食兼昼食を食べに下へ降りて行くと、食堂で一人ポツンと座りこんでいたオフクロが

「シゲオちゃん、お願い。お母さんに話して。何か学校であつたの？シゲオちゃん何も言ってくれないと、お母さん、本当にどうしたらいいのかわからないのよ」

と涙声で訴えてくるのだった。僕は黙ってメシを口に運んでいた。学校でイジメられてる

なんて、口が裂けても言えなかった。なおもオフクロがすぎるように迫ってくると、僕は

「ウルセエナー、おまえには関係ねえだろー」

と悪態をつけてイスをけって食堂から出てくるのだった。

僕の生活は昼と夜が逆転していた。昼前に起き出してメシを食べ、それから夕方まではTVゲームに熱中する。夕方になるとまた寝て夜中に起き出し夜食を一人で食べる。それから明け方まで深夜放送を聴きながらマンガを読んだり、ステレオをかけたりにしていた。弟やオヤジとはまったく顔を合わさなくなつた。もつともオヤジとは以前からそういうスレ違いの生活が続いていたのだが・・・。

中学時代、僕は友だちがゲームセンターに入りびたっているのを見ると、「あんな子どもじみたものに」とバカにしていた。それが学校をサボルようになって一人になってみると、TVゲームの魅力にとりつかれてしまったのだ。それは一口で言えば運・不運に左右されないということだった。僕はパチンコはやったことがないからよく分からないが、パチンコのような偶然性はTVゲームにはなかった。こちらが研究しソフトを解読していけば、それは点数になって客観的に表された。そこに人間の悪意が入りこむスキはなかった。デパートで買ってきたファミコンを自分の部屋のテレビにつないで、僕は一日中TVゲームに熱中していた。一つのソフトを攻略してしまうと、また別のソフトを買ってきた。金

は小づかいをあてていた。

テレビ画面を見つめたままキーボタンを押しながら、僕の頭の片隅にはいつも入試に落ちたことがこびりついていた。あれがケチのつき始めだったのだ。あそこからボタンのかけ違いが起こってしまった。あのジャガイモヤローが内申書にあんなことを書かなければ、オレはクズの集まるK高校へ行つて、おまけにクズ連中からイジメられなくてすんだのに……。

チクシヨウ！

チクシヨウ！

ゲームオーバーになるたびに、僕は画面に向かって叫んでいた。

二学期の終業式前、担任から電話がかかってきた。それまで担任は一度も家庭訪問に来たこともなければ、電話をよこしたこともなかったのだ。オフクロが電話に出た。

「このまま休み続けると出席日数不足で留年してしまいますから、お子さんにはよく言うておいて下さい」

オフクロはあとで泣いていた。よつぼど「留年」という言葉がショックだったようだ。通知票は学校から郵送されてきた。むろん二学期の成績の欄は空白だった。

その年の正月は暗く、憂鬱な年始めになった。正月休みで家について久しぶりに顔を合わせたオヤジは

「シゲオも三学期から立ち直ってくれば・・・」

とひとこと言っただけだった。それ以上オヤジに何が言えただろう。オヤジも自分のスネに古傷を持つ身だったのだから・・・。

三学期に入っても僕は学校へ行かなかつた。あい変わらずTVゲームに熱中し、昼と夜が逆転した生活を送っていた。人いちばい世間ていを気にするオフクロが手をこまねいていたわけではない。戦術を変えて新たな手を打ってきたのだ。

三学期も始まって一週間ばかりたったある日、いつものように僕が昼前に起き出して食堂へ降りて行くと、待ちかまえていたようにオフクロがテーブルに座っていた。

「シゲオちゃん、今日お客さんが来るからあなたも会ってね。お母さん、あなたの話を聞いてくれる人を呼んだのよ」

僕は黙ってハシを運んでいた。どうせまた親戚のダレカレだろう。オヤジの時の二番せんになのだ。手の内は分かっていた。僕は会うつもりなどなかった。

昼過ぎ、その人間がやって来た。しばらく下で二人で話していた。ドアをそつと開けて聞き耳を立てると、男の声だった。思いあたるフシがなかった。やがてオフクロが階段を上ってきた。僕はドアをロックしておいた。

「シゲオちゃん、お願いだから下に降りて来て。会うだけ、ね。何もこわがることはないのよ」

哀願するような声でオフクロが言った。僕はテコでも動くものかと思っていたが、結局ドアを開けて降りて行った。家の醜態を他人に見せたくなかったのだ。居間のソファに座っていたのは親戚の人間でも何でもなかった。灰色の背広を着た年配の男だった。市の青少年相談員だと名のつた……。

結局僕はその男に何もしゃべらなかつた。ソファに座って固く殻を閉ざしたままだった。男は何の成果も上げられずに虚しく帰って行った。男が母に挨拶して後ろ手に玄関のドアを閉めた時、僕は弟の部屋へとんで行って金属バットを握りしめていた。この女は赤の他人にオレのことをしゃべったんだ！オレに何のことわりもなしに勝手にやりやがって！

僕は腹ワタが煮えくり返るようだった。バットを持つ手をブルブル、ブルブル震わせながら、僕はオフクロの前に仁王立ちになっていた。オフクロは部屋の間で子ネズミのようにうずくまっていた。恐怖で声もなく、顔は青ざめていた。僕は自分の中のドス黒いものに突き動かされて、我を失いそうになった。僕をとらえていたもの、それは誰に向けたらいいのか分からないヤリ場のない怒りだったのだ……。

その日を境にしてオフクロはもう僕に何も言わなくなつた。まるでハレものにさわるように僕を扱っていた。僕の方もTVゲームをやめてしまった。かわりにバイクに熱中し始めたのだ。

家にはオフクロが買物やカルチャー教室の行き帰りなどに使う50CCのバイクが一台あった。それを持ち出して家の周りを乗ってみた。爽快だった。自分の足で歩くのではなく、自分の力よりも大きな力を操作すること。その快感に僕は酔った。誕生日は過ぎていたのですねに免許を取ろうと思った。本屋でバイク試験の問題集を買ってきて家で勉強し、一週間後に試験を受けに行ったら一発で受かってしまった。オフクロの乗ってる買物バイクではやはりサマにならないので、自分のバイクを買おうと決めた。バイク雑誌を買って研究したり、近所のバイク屋のオヤジに相談に乗ってもらったりして、ホンダのMBX50にした。小づかいではとても足りなかつたのでローンを組んだ。ローンの返済のためにバイトを始めた。

はじめは駅前のファーストフード店で売り子をしていたが、中学時代の同級の人間と顔を合わせるのがイヤですぐにやめてしまった。それから新聞の折り込み広告に入っていた隣町（川をはさんで対岸の東京のY区）にあるプリント製版工場へ働きに行った。工場といつても住宅密集地にプレハブ小屋があるだけで、三十人近いオバチャン達がこまかい手作業をしていた。単純な作業のくり返しだったが、その頃の僕にはそういう方が合っていた。何も考えずにただ目の前の複雑な配線をハンダづけしていた。

バイトは土日を除いて毎日行つたので、バイクにはそれほど乗れなかつた。バイトの

行き帰りに使うのと、バイトがない日に一人で湘南や房総方面にツーリングに行った。やはり原付ではそんなに遠くまで行けなかった。

三学期はどうとう一日も学校へ行かなかったので、当然のことながら進級できなかった。三月の成績会議のあと、担任が電話でそのことを伝えてきた。そしてできるだけ早く家で話し合いを持って、身振り方”を決めて下さい、とも。

僕はやめようかな、と思った。だが学校をやめてもどうしたらいいか分からなかった。自分で何をしたいのか、ハッキリつかめていなかったのだ。本当に宙ブラリンな状態だった。担任からの電話をとったオフクロは

「シゲオちゃん、高校だけは何とか出てちょうだい」と泣きついてきた。

担任からの連絡があった翌日、珍しくオヤジが早く家に帰ってきてメシも食べずに二階へ上がって来た。

「シゲオ」

ドアをノックしてオヤジが声をかけた。

「おまえ、どうするんだ」

その日僕は夕方になっても寝ていなかった。アレコレとボンヤリ考えこんでいた。

「もう一年やってみるよ」

くぐもった声で僕は答えていた。

「そうか」

それだけ言うとオヤジは階段を降りて行った。僕はもう一年やるつもりになっていた。たとえあのK高校でも自分さえシツカリ保てればそれでいいんだ。それにあのワルたちからも離れてイジメもなくなるだろう……。僕はそう考えていた。オフクロが翌日学校へ電話していた。

二年目の一年を迎えていた。新しい担任から電話で連絡があつて、始業式の日に来てほしいということだった。僕はイチから出直すつもりでオフクロと出かけた。担任に言われたように教室に入らず職員室へ行った。やせて神経質そうな若い男だった。その男の言った心ない一言が、僕に冷水を浴びせて意欲をなえさせてしまったのだった……。

結局僕は始業式の日だけ学校に行っただけだった。また前の製版工場へバイトに行き始めた。やはり原付では物足りなくなつて自動二輪が欲しくなったのだ。バイトに行きながら教習所に通い始めた。夏前に免許がとれた。バイクは、MBXを買った近所のバイク屋で、カワサキのGPX250Rをまたローンを組んで買った。このバイク屋のオヤジは本当にいいオヤジだった。もう五十は過ぎていたが、根っからのバイク好きだった。若い時分にはバイ

クで日本一周をしたこともあるらしい。イロイロ親身になって相談に乗ってくれた。そして僕が引き起こしてしまった事故の時も、このオヤジの世話になっていたのだ……。

自動二輪はやはり原付とはスケールが違っていた。股ぐらではさんだエンジンが、ドゥドゥドゥドゥ、と唸りを上げるのがたまらなかった。これならオレの中のドス黒いものと十分対抗できるな、と思った。実際そうだったのだ。僕は愛車を運転している時は自分の中のモヤモヤを何もかも忘れられた。前よりは遠くへツーリングに行き始めた。夏になっていた。Kと知り合った。

初秋の房総の誰もいない海岸でKに打ち明けていたように、案の定僕は留年して退学処分になった。三月の終業式の数日前に担任がそのことを電話で伝えてきた。四月いらい一年ぶりで聞く担任の声だった。僕が電話に出た。オフクロに僕につないでくれるように言っておいたのだ。

「事務処理のつごうがあるからなるべく早く退学届を持って来てくれないか」

乾いた声でそう言うと言った。僕は来るべきものが来たと思った。感傷は何もなかった。僕のモラトリアムは終わったのだ。受話器を置くと無性にY島へ行きたくなっていた。Kの生まれ故郷、そして「一度でいいから会ってみいな」と何度もKが言っていた「聖なる樹」が生えている島。僕は何をおいてもそこへ行きたくなった。四月から

のことはボンヤリと、働くしかないなど思っていた。今のバイトを続けようとも考えていた。それぐらいで、何の展望も持てなかった。

オフクロには、二十四日に退学届を学校に持って行く、と言った。そのあと、少し自分の身の振り方も考えてみたいので一週聞くらい九州へ旅行してくる、とも付け加えておいた。オフクロは何も言わなかった。

退学届を出しに行く前日の晩、僕が弟とオフクロと三人で夕食を食べていると珍しく父が早く家に帰って来た。着がえてテーブルについたオヤジは、母が冷蔵庫から出したビールを僕の方に向けて

「どうだ、シゲオも一杯飲むか」

と言った。そんなことは初めてだった。僕は首を横にふった。実際アルコールは飲めなかったのだ。

「そっか」

オヤジは残念そうに言うと言分のグラスにビールをついだ。少し寂しそうな顔だった。食事が終わって僕が黙って立ち上がった時、赤い顔をしたオヤジが少しセキこんだようにして僕に向かって言った。

「自分だけは大切にしろよ」

あらかじめ用意しておいた言葉のようだった。

三月二十四日の終業式の日、僕は受けとっていた用紙にオフクロにハンをつけてもらって学校へ持って行った。職員室で碁をさしていた担任は、僕から退学届を受け取るとザッと目を通してから事務的な口調で僕に言った。

「大久保、これからどうするんだ？」

僕はまだ決まってる、と答えた。

「そうか、まあガンバレよ」

碁盤の方にまた目をやりながら担任が言った。

クソツタレ！分かったようなことをヌカスな！

僕は心の中で叫んで職員室を飛び出した。家に帰ると用意してあったスポーツバックを取り出した。親には、東京ディズニーランドへ寄ってから夜行の寝台特急で行くと言っておいたが、それはウソだった。僕の足は近所の行きつけのバイク屋に向かっていた。そこに僕の車を預けておいたのだ。

GPXを目にするのは一月いらいだった。愛車はワックスでピカピカに磨かれていた。オヤジがやっておいてくれたのだ。僕はうれしくなった。修理も終わっていた。一月の事故の時に壊したクラッチレバーの修理が。

あの時・・・

Kは一月に「事故」で死んでいたのだ。

あれは正月も明けた最初の日曜日だった。夜Kから電話がかかってきて、これからチョット走らないか、と言う。正直言つて僕は気が進まなかった。第一に夜走るのは昼とくらべて爽快感が少ないし、それに暴走族と見られるのもイヤだったのだ。でも結局はOKした。十二月にKの家で会つて以来だったので、久しぶりにKといっしょに走りたくなつたのだ。

湾岸道路で待ち合わせて千葉方面へ向かった。海沿いに走つて富津岬まで行き、また折り返してくるコースにした。家を出る時から気になつていたのだが、交差点に警官の姿がヤタラ多かつた。それも交通警官ではなく制服を着た一般の警察官だった。そして僕とKもアタマにきてしまったことに、赤信号で停止線で止まると、そこに立っている警官が何の理由もなく免許証の提示を求めてくるのだつた。僕もKもトラブルを恐れて素直に応じていたが、なかには

「オイ、ウルサイから、早く家に帰つて寝ろ！」

と説教をタシるポリもいたのだ。それが一度や二度ではなかつた。まだ夜の九時前だったが、交通量はふだんにくらべて少ないようだった。僕とKはイラ立ってきた。荒川を越えて千葉に入った時、そのウサを晴らすかのようにスピードを上げた。そこでネズミ捕り

にかかってしまったのだ。

日本の道路は車の流れに乗らないと走れない。そして流れに乗って走ると制限速度オーバーになってしまふ。そういう時バイクは必ずエジキになってしまふのだ。僕は決して暴走行為をするような人間ではなかった。ツーリング好きのライダーを自称していたのだが、それでも夏前に免許をとってからスピードオーバーをくり返して違反点数をかせいでいた。Kは僕より慎重な運転をしていてテクニクもうまかったが、僕より乗っている期間が長いぶん減点の点数は同じようなものだった。スピードメーターを見ると二十キロ近くオーバーしていた。これなら間違いなく免停だ。

遠くに警官の振るオレンジ色の誘導棒が見えてきた。道路にブロックが置かれて一車線に規制されていた。止まっている車は二、三台だった。あの時僕の心を支配していたのは何だったのだろうか？その日のイラ立ちだろうか？それもあつただろう。でもそれだけではなかった。新しい年を迎えてもメデタクも何ともなかった。僕の執行猶予が切れる時がクイツコクと迫っていたのだ。何の展望も持てなかった。KはKで僕と同じような心のモヤモヤを抱えていたのだろうか。それは分からない。でもKの境遇に自分を置いてみれば、僕も必ずガラスを石でたたき割りたくなるような衝動をいつも抱えていただろう……。もちろんそんなことを検問の手前で考え続けていたわけではない。一瞬だった。抜けよ

う、と思った。斜め後ろを走っていたKの方を振り向いた。Kもうなずいてみせた。それだけで心が通じたのだ。アトサキのことは考えなかった。後で冷静になつて考えてみればよくあんな大胆なことができたなと思ったが、あの時はここを抜ければ何とかなる、その気持ちだけだったのだ。胸が高鳴ってきた。生まれて初めて感じる生の躍動だった。道路の中央に立つ警官とブロックの間へ二台のオートバイは突っこんで行った……。

「止まれ！」

警官がそう叫んだように聞こえた。誘導棒をグルグル振り回していた。

ヤッタ！抜けた！

と思った瞬間、後ろを走っていたKのバイクが横転して横すべりに僕のバイクに衝突した。僕もハンドルをとられて横転し、体は道路の上に投げ出されていた。幸いなことに、僕はバイクの下じきにならずに道路の上をスケートのようにスーッと滑って行った。死ぬ時はこんなもんかな、と感じた。何メートルそうやって運ばれたのだろうか。僕はコンクリート支柱に思いつき背中からぶつかっていた。左腕が体の下でねじれたままだった。意識は失わなかったが、頭の中は黒板を消したようにボンヤリしてしまった。夢を見ていたようだった。救急車のサイレンが響き、赤い点滅灯が見え、僕は担架にのせられて病院へ運ばれた。警官の一人が救急隊員に

「一人の方はダメかもな」

と言ってるのが聞こえた。僕はバクゼンと、オレのことか？と思った。死の恐怖は湧いてこなかった。ただ、そうなるんだろうな、と思っていた。後で分かったことなのだが、「一人」というのはKのことだったのだ。Kは中央分離帯のコンクリート壁に激突し、首の骨を折って即死だった・・・。

病院に着くと、たくさんの人が僕の周りを動きまわっていた。僕はそれを映画でも観るようにボンヤリとながめていた。あわててかけつけて来た当直医が僕の体のアチコチを打診しながら

「痛くないか」

ときいてきた。その時になって僕は左腕が痛み始めていた。そのことを言って、頭もチョットふらつく、と付け加えた。僕はすぐにレントゲンをとられて左腕を石こうで固められた。自分でも外傷がないのは始めから分かっていた。そのあと移動ベッドで病室へ運ばれた。二人部屋で、もう一つのベッドは空いていた。

「さあ、これを飲んでグッスリ休むのよ」

紺のカーディガンを着た若い看護婦さんがそう言って、僕にカプセル錠剤と水をくれた。それを飲んだとたん、僕は本当にグッスリと寝こんでしまった。

目を覚ますと明るかった。もう朝になっているようだった。枕もとにオフクロが座って僕の右手をさすっていた。目に涙を浮かべていた。オフクロの後ろに弟とオヤジが立っていた。二人ともこれから会社や学校に行く出がけに寄ったのだろう。背広姿と学ランを着ていた。僕が気づくとオフクロはさすっている両手をひっこめようとしたが、僕はチョツトうなずいてみせて、そのまましてもいい、というソブリを見せた。

「お医者さんがね、骨折だけではないことはないだろうって。イチオウ、頭の検査はしてみるっておっしゃってたけど、シゲオちゃん、心配することはないのでよ」

とオフクロが言うのと、オヤジも

「心配するな、シゲオ、たいしたことないようだから。帰りにまた寄るからな」

と言って片手を上げて病室から出て行った。弟もチョツトうなずいてから父の後に続いた。二人が出て行った後で、僕は昨夜のことをもう一度思い返してみた。急にKの笑顔が浮かんできた。ヘルメットをかぶらずに、いつものはにかんだような笑いを浮かべていた。

「Kは？Kはブジか？」

僕はベッドの上にとび起きてオフクロにたずねた。オフクロは一瞬言葉をつまらせたあと、病室が違うからよく分からない、と震える声で答えた。僕はオフクロの表情から全てを読みとっていた。グツタリとベッドに体を投げ出した。

Kは死んだのだ。現実感はまったくなかった。きのういっしょに走っていたKが……。僕が睡眠薬を飲んでグッスリ眠っていた時には、Kはもう死んでいたのだ……。

不思議と涙は流れてこなかった。ただ深い虚脱感に包まれていた。結局僕は一過間で病院を退院した。脳波などの精密検査を受けたが、どこにも異常はなかった。あとは左腕の骨折した箇所が固まるのを待つだけだった。それは通院で十分だった。僕は病院にいた間、ずっと一つのことを考え続けていた。それは僕自身のことではなく、Kの死のことだった。Kがなぜ死んだのか、ということだった……。

病院を退院して家に戻ってきてから一週間、ようやく気持ちの整理ができた僕は、一月下旬にKの家へ菓子折りを持って線香を上げに行った。Kの家へ行くのは二度目だった。東京の下町の住宅密集地にあるKのアパートを初めて訪ねたのは十二月だった。Kが死ぬ前最後に会った時だ――

夜Kから電話がかかってきた。あした家に遊びに来ないか、と言う。翌日は平日だったが、なんでも会社の創業記念日ということで工場が休みだったのだ。僕はバイトを休んでよろこんで出かけた。

その日はバイクではなく電車で行った。初めての所で不案内だったからだ。僕のバイト先もKの家も同じ区内にあったが、国鉄の線路をはさんで反対側に別れていた。Kの家は

県境の河べりの住宅密集地にあった。驚くほど分かりにくい場所だった。何しろ傾きかけた木造アパートが何十軒も軒を連ねていたのだから。バイクで来なくてよかったと思った。路地は暗く、側溝から下水の水があふれ出していた。

Kの一家はそんな木造アパートの二階に住んでいた。さびてきしむ階段を上り、ベニヤ板のはがれたドアをノックすると、Kが出てきて開けてくれた。僕が行ったのは昼過ぎだったが、オフクロさんはパートに行ったのか姿は見えぬK一人だった。二間と台所ふたましかない狭いアパートだった。台所には食べ残した食器が山積みのようになっていた。Kの部屋に通された。六畳間だったが、弟や妹たちと共有しているのだろう。壁には習字や絵がはられ、勉強机とコタツが置いてあった。どう見てもここで三人か四人で寝るのは窮屈だった。こう狭くてはおちおちオナニーもできないな、と僕は冗談を言いかけてやめた。そんなことが言える雰囲気ではなかったのだ。Kの持ち物といえば、ミニステレオとバイクの雑誌、それからマンガがあるだけだった。ステレオの置いてある壁ぎわには、鈴鹿耐久レースのポスターが貼ってあった。ガタピシいう木の窓を開けると、向かいのアパートの洗たく物が目の前に干してあった。灰色の空が路地の上にのぞいていた。

Kの部屋で僕たちは、二人の好きなブルース・スプリングスティーンのカセットをかけ、本を読んでいた。本といっても、Kは僕を買ってきたその日に出たばかりのバイク雑誌をめ

くり、僕は部屋の隅に乱雑に積み重ねてあったマンガ週刊誌や『万歳ハイウェイ』を読んでいた。『クッキングパパ』も冊かあったのには驚いてしまった。Kは冷蔵庫からコーラを出してきてコップについでくれた。僕は来る途中で買ったスナック菓子の袋を開けた。

いつものように二人ともほとんどしゃべらなかつた。時々Kがバイク雑誌を開いたまま僕に見せながら「今度ここへツーリングに行かないか」と言ったり、マンガを読んで僕がゲラゲラ笑うと、Kもどれどれといった顔でのぞきこみ、二人で声を上げて笑うのだった。そうして時が経っていったが、三時過ぎに弟と妹が学校から帰ってきた。二人とも小学校低学年のようだった。玄関に脱いである僕の靴を見て客が来ていることを知ったのだろう。二人とも部屋の中には入って来ないで、唐紙一つへだてた台所で息をひそめて何かしていた。僕は少し窮屈に感じてきた。「入ってきなよ」と言おうと思ったが、やめておいた。二人のヒソヒソ言っている声から判断すると、本当に人見知りをして尻ごみしてしまう子どもたちのようだったからだ。

四時前になっていた。Kもそろそろ学校へ行く時間だろう。僕はマンガを元のところへ戻すと、腰を浮かせながら言った。

「K、そろそろ学校へ行く時間だろ。オレ、もう帰るよ」
畳に寝ころがって雑誌を読んでいたKは、体を起こしてコタツの上の時計を見ると

「お、もうこんな時間か」

と言って、またコタツにもぐりこんでしまった。僕が何か言いたそうにしているのに気づいたKは、顔を上げて笑いながら

「大久保、ゴメン。オレおまえにウソついてたよ。オレ、本当は高校なんか行っていないんだ」と言った。悪びれたようすもなくアツケラカンとしていた。僕は拍子ぬけしてしまった。Kの話によるとこういうことだった。

中学を卒業して今の自動車部品会社に就職した時、試験の面接のさいに「夜は定時制に行きたい」と希望を言っておいたそうだと。ところがフタを開けてみるとそこは昼夜二交代制で、とても定時制には通えなかった。ガツカリしていると職場の先輩に通信制高校に通っている人がいて、いろいろKにアドバイスをしてくれたそうだ。週に一度のスクーリングだけであとは家で勉強する通信なら行けるかもしれないと思ってKが学校に問い合わせたところ、残念ながら募集期間は終わってしまった。二年目の四月、通信のことはチラと頭に浮かんだが結局行かなかった。

「体がどうしようもなく疲れちゃってね。それにダンダン勉強しようなんて気がなくなってきたちゃったんだよ。ダメなんだよな、オレは、流されちゃって」

そう言うくとKは弱々しく笑った。

僕はKと自分をくらべてみた。僕はアルバイトの経験はあったが正規に雇われて働いたことはなかった。それに僕は自分の小づかいかせぎでバイトをしていたのだ。Kは違っていた。下にはまだ弟や妹たちがいた。家は貧しく、それに多額の借金もかかえているようだった。Kは自分のためではなく家のために働いていたのだ。けっしてガンジヨウとは言えないやせてヒヨロヒヨロした体で一家を支えて……。

聞いているうちに僕は胸苦しくなってきた。そんなシンドイ生活をしているKにとって、唯一の気晴らしがバイクに乗ることだったのだろう。そんなKの目に、高校へ行ける機会がありながらバイクを乗り回してプラプラしている僕はどんな姿に映っていたのだろうか……。夕方、オフクロさんが仕事から帰って来たのを潮に僕はKのアパートを辞した。台所の隅で、下の弟と妹が電気もつけずに遊んでいた。オフクロさんも疲れ切った表情をしていた。手にスーパールのビニール袋を下げていた。僕は黙って頭を下げて、きしむ階段を降りて行った――

あの時とくらべて、ドアを開けてくれたKのオフクロさんの髪には目立って白いものが増えていた。本当にここ二月ほどで、十歳も年老いてしまったかのようだった。Kの部屋に通された。不釣り合いなほど大きくて立派な仏壇が置かれていた。中学の時に撮った写真だろうか。ツメエリ服姿のKが、はにかんだような微笑を浮かべて写っていた。僕は手

を合わせてKの冥福を祈った。

「本当にあの子は、やさしくて、親思いだったのに……こんなことになってしまつて……あの子だけを支えに、ここまでやってきたのに……好きなバイクで死んだのが、せめてもの救いで……」

僕の後ろでひざをついたオフクロさんが、目がしらを押しさえながら涙声で言った。

Kは死んだ……

いや、違う。

Kは殺されたんだ！

僕はあの時見たのだった。一瞬の光の中で――

僕とKが道路の中央に立っている警官とブロックの間をすり抜けようとした時だった。警官の一人がオレンジ色に光る誘導棒を投げつけたのだ。僕はそれをハッキリとこの目で見た。次の瞬間、Kのバイクは横転していた。あの運転の上手なKがハンドル操作を誤ったとは信じられなかった。どう考えてみてもあのライトがKを直撃したとは思えなかった。

「事故」のあと、病院に運ばれる救急車に警官が同乗した。その警官は、病院に着くまでのべつ幕なしに僕とKが運転をミスしてケガをした、と救急隊員にしゃべっていた。僕は意識を失ってなかったから、そのオシャベリを聞いていた。警官も僕の意識があること

は分かっていたはずだ。彼は救急隊員にではなく、本当は僕に向かって語っていたのだ。僕をドーカツしていたのだった。

ポリ公よ、オレを見くびるんじゃないやネエ！アンタらの薄汚ねえ取り引きに、おれが感づいてないとも言うんですかい？

僕は自問自答をくり返していた。一週間の入院生活でも、それから家に帰ってからも。はたしてKの死の本当の原因を言い出すべきか、それとも胸にしまっておくべきか……。

結局、僕は妥協してしまった。薄汚い警察の取り引きに応じてしまったのだ。Kの顔面に誘導棒がブチ当たるところを見てなかった、ということもある。あくまで僕の状況証拠による推定でしかなかった。でも本当の理由は、僕は恐れたのだ。僕は「失うこと」がこわかったのだ。

もし僕がKの死のことを言い出せば、警察もそれに対抗して僕のケースを単なるスピード違反ではなく、暴走行為として扱うだろう。いや、職務の執行をさまたげた「公務執行妨害」なのだ。僕は免停どころか家裁に送られて、悪くすると少年鑑別所に入れられてしまうかもしれない。実際僕は、K高校で初めての一年だった時、夜中暴走行為をしていてパトカーに追いかけられ、赤信号無視をくり返しながら逃げたがとうとう捕まり、少年院に一ヶ月間入れられたという二年生のウワサを聞いていたのだ。もちろん学校は退学処分

だった。「少年院帰り」になった自分を想像してみた。そのレッテルは一生ついて回るだろう。それは僕だけにではない。家族にも重くのしかかるのだ。人いちばい世間ていを気にするオフクロは、発狂してしまうかもしれない。カタイ商売のオヤジの仕事にもサシサワリがあるだろう。それに弟がいる。弟はまだ中二でこれから高校受験をひかえているのだ……。

「結局、オレが何をしたって死んだKはもう戻ってこないんだ」

僕はそう自分に言い聞かせて、無理にでも納得しようとした。案の定、僕は六カ月の免停だけで済んだ。「事故」のあと、警察からは何も言っただけだった。僕は警察との取り引きに応じてしまった。そして僕の魂を売り渡し、代わりに激しい虚脱感を手に入れたのだ……。

「お母さん、Kは死んだんじゃない、殺されたんです！」

仏壇の前で僕は叫び出しそうになったが、できなかつた。買ってきた菓子折りを差し出すと、黙って帰ってきた――

「事故」のあと、バイクは病院から行きつけのバイク屋のオヤジに電話して引き取りに行ってもらった。奇跡的にクラッチレバーが壊れただけだった。その修理も済みワックスでピカピカに磨かれて、僕の愛車が今日の前にある。親には、「もうバイクはやめる。知り合いのバイク屋に処分してもらった」と言っただけだった。僕がバイクをやめたくなったの

は本当だ。でも処分までは踏み切れなかった。病院から戻ってもうバイクには乗らなかったが、ズルズルと三月まで引き延ばしてしまった。そして担任から「退学処分」の連絡があった。受話器を置いた時、僕は無性にバイクでY島へ行ってみたいくなったのだ。恐らくこれが僕にとってバイクに乗る最後の旅になるだろう、という予感のようなものを抱いて……。家から持ってきたスポーツバックをリアにゆわえつけてエンジンをかけた。ドドツ、ドドツと、腹に響く答えを返してよこした。二ヶ月半ぶりに聞く愛車の吠え声だった。

「遠くへ行くんだろ。そんな気がするよ」

店の奥から油で汚れた手をぞうきんでふきながら、オヤジが出てきた。僕の顔をシゲシゲと見てからポン、と肩をたたくと

「今度は気をつけて運転しろよ。子どもが先に逝くと親が悲しむからな」

と真顔で言った。僕は大きくうなずいてみせると、バイクを発進させた。オヤジに手を振って別れた。

Kとツーリングに出かけていた時のように第三京浜には向かわず、直接東名に入った。その日は浜松まで走って泊まった。僕もここまでは来たことがあったのだ。浜松からは高速ではなく一般国道を走り継いだ。二日目は大阪、三日目は博多に泊まった。どちらも駅に近いビジネスホテルに宿をとった。メシは宿の近くですませた。

こうして僕は前に行く大型トラックの噴き上げる排気ガスやロコツな幅寄せにもメゲずに、ひたすら走り続けた。こんなに長い距離を走るのは初めての体験だったので正直言つてグツタリとなったが、それでも南に行くにしたがつてあたりの景色がダンダン春めいてくるのを見るのは楽しかった。東京では見られないレンゲの花がいちめん田んぼに咲いていた。モンシロ蝶がその上を舞っていた。九州ではもう桜の花が散り始めていた。

「K、おまえがあんなに会いたがつてた『聖なる樹』に向かつて、今オレはバイクを走らせてるよ。おまえの魂の故郷、Y島めぎして……」

心の中でKに語り続けながら僕はバイクを走らせていった。もつとも制限速度だけは越えないように気をつけてはいたが。

こうやって僕は九州の南端、県庁所在地のK市までやって来た。そこからY島まではフェリーで渡るのがだった。朝早く博多を出たので昼まえにK港に着くことができた。Y島へのフェリーは便数が少なく、その日の午後の便をのがすとあしたの朝まで待たなければならなかったのだ。受付で免許証の提示を求められるかな、と思っていたが、だいじょうぶだっ

た。もしそうだったら、バイクはK港に置いていくつもりだった。

フェリーは四時間の船旅だった。僕はバイクを船倉に入れて二等船室の畳の上に横になるとすぐに寝こんでしまった。四日間の長旅の疲れがたまっていたのだろう。心配していた船酔いにも悩まされずにグッスリ眠ることができた。

目を覚ましてみると、もう一時間弱でY島に着く時間になっていた。僕は起き上がって甲板に出てみた。どこまでも濃紺の太平洋が広がっていた。そして船の行く手に黒々とY島が見えていた。ガイドブックに書いてあったように、本当にオムスビ型をした島だ。上の方は厚い雲に隠れて見えなかった。僕はデッキの手すりにもたれて、だんだん近づいてくるY島をボンヤリとながめていた。とうとうここまでやって来た、という実感が湧いてきた。

港に着いて上陸すると、駐車場のアチコチに水たまりができていた。けさ博多を出てからK市まで雨に降られることはなかったのだが、Y島は聞いていたとおり雨の多いところなのだろう。宿は島の南側にある宿舎を予約しておいた。港は北側にあるので、島を一周する県道をグルッと東海岸沿いに回って行かなければならなかった。道路には車も少なく快適なツーリングだった。ツツジの花がもう咲いていた。ところどころに田んぼがあって、もう代かきが始まっていた。東京とくらべて季節が一月早いなと思った。そんな光景に目を奪われて、ツイツイ制限速度をオーバーしてしまった。ここではよもやネズミ捕りはやっ

てまい、そう思うと何だかおかしくなつた。時々バス停や商店が二、三軒ある所でバイクを停めて、持ってきたガイドブックで地名を照らし合わせながら進んだ。会う人も少なく、万事ノンビリとして穏やかな島なのだろうと思つた。

宿舎は百数十名収容の大きなところで、海沿いに建っているはずだから、遠くからでもすぐ分かるだろうと思つていた。もうそろそろ宿舎が見えてくるだろう、と思つて右に大きなカーブを切つた時、突然目の前に奇怪な岩山が現れた。それまでも道路の右手はずつと山が続いていたが、杉の植林がされた何のヘンテツもない山々だった。それがこの山だけは違つていた。ふもとから頂上まで自然林でおおわれ、おまけに頂上付近は、切り立つた岩がむき出しになつていたので。海をへいげいするかのように見下ろしているその岩の面は、なぜか人間の顔のように思えた。岩は無表情に立つていた。

宿舎はその岩山のふもと、道路をはさんで海側にあつた。もう夕方になつていた。フロントでチェックインをしている時、受付の女性にフロに入れるかどうかきいてみた。

「ええ、ウチではいつでもお入りになれます」

僕が紙に書いた住所・氏名を宿泊名簿に書き写しながら、係の女性が答えた。僕は温泉かどうかきいてみた。確かガイドブックには、Y島には二、三温泉が湧いていると書いてあつたはずだが。

「ええ、温泉ですけど、近くに元湯があつてそこから引いてるんです」

僕はその共同浴場になつていいるという元湯に行つてみたくなつた。一度そういうフロに入つてみたかつたのと、旅の間に出た汚れ物を宿舎のフロ場で洗たくするのは何となく気が引けたのだ。

下着や洗面用具をつつこんだビニール袋を下げて、僕はフロントの女性に教えられた道を元湯の方に歩いて行つた。県道を横切り、山に向かつて民家を抜けるとすぐに元湯に出た。ひなびた平屋の建物で、観光客向けというよりも地元の人が入りに来る雰囲気だつた。受付のおばあちゃんに百円渡して中に入った。男湯には誰もいなかった。僕は広い浴槽に飛びこんで、プーッと息を吐いた。底には大きな玉石がゴロゴロしていた。湯舟から出て持ってきた洗たく物をゴシゴシ洗っていると、ガラガラツと勢いよくガラス戸を開けて体格のいい若い男が入つてきた。男は洗面器で湯舟のお湯をくんで頭からかぶると、風呂に入つて平泳ぎを始めた。

「ここは女湯から湯が回つてきて、エエなあ」

男が湯舟から声をかけた。風呂の中で足を伸ばして爪先で壁をさしていた。僕が立つて近づいてみると、女湯との境の壁にパイプが通つていて、そこから湯が流れこんでくるようだった。僕はアイマイな微笑を浮かべた。

「山登りに来たんか」

男がザバツ、と両手で顔をゆすぎながらブツキラボーにきいた。僕は頭を横に振って

「山登りじゃなくて、聖なる樹に会いに……」

と答えた。

「聖なる樹か……。オレは地元の間人だけどもまだ行ったことねえなあ……。東京から来たんか」

「ハイ」

僕は素直に答えていた。この男はブツキラボーだったけれどウラオモテがないようで、僕は好感が持てた。僕は自分から男に声をかけてみる気になった。宿舎の前にそびえるあの岩山のことをきいてみたくなったのだ。

「あの……。あそこに見えるヘンナ形をした山は何て言うんですか？頂上が岩でゴツゴツしたやつ」

「あ？モッチョムのことか？」

男は湯舟から上がってきた。

「あそこは登れるんですか？」

「小学生が遠足で行くような山だべ」

男はそう言つて笑うと、体をゴシゴシ洗い始めた。

元湯から帰る道々、僕はモツチョム、モツチョムと唱えながら何べんも振り返つてあの岩山を見上げた。モツチョムの頂の人面岩は、夕陽を浴びて輝いているように見えた。

夕食時間になつて食堂へ行くと、僕の席はテーブルの隅、どこかの団体にくつつく形で作つてあつた。ほかの家族連れやグループ客は、それぞれ海の見える窓側に一つずつテーブルを占めていた。僕は少しハラが立つたが、この行楽シーズンに三人部屋を一人で使っているんだからシヨীগナイか、と思つてあきらめて席についた。期待していた郷土料理の皿は何もなく、修学旅行で行つた旅館で出すようなアリキタリの料理が並んでいた。なおのことガツカリしてしまつた。

それでもメシを口に運んでいると、何か僕の手が僕の膝に触れた。顔を向けると、小さな子どもが僕のイスの脇に立つて手をつけていたのだ。一歳半か二歳ぐらいだろうか。まだ歩き始めたばかりのようで、立っている姿もどうにもアブナカシそうだった。顔から判断すると女の子だろうか。澄んだ瞳でジッと見つめられて、思わず僕はドギマギしてしまつた。その時少し離れた席から

「ミドリ、いけませんよ」

という声がかして、女の子が立ち上がった。お母さんらしかった。

「スイマセン、じゃましちゃって。ミドリ、さあ、あつちで食べましょう」

女の人は僕に謝って子どもを抱き上げると、席に戻って行った。僕から二人置いた席だった。左隣りにダンナさんらしい若い男の人が座っていた。

僕はあの子が気になって、口をモグモグさせながら見るともなしに子どもの方を見ていた。お母さんは膝に抱き上げてごはんを食べさせていたのだが、子どもはもうおなかがいっぱいになったのかムズガリ始め、とうとう泣き出してしまった。お母さんは自分のごはんも食べられないので困ってしまったのか、またその子を床に下ろした。すると子どもはまたヨチヨチとイスにつかまりながら僕のところまで歩いて来たのだ。子どもからまた見つめられて、僕は自分でも意外なことにベロベロバーとおどけた仕草をしてみせた。子どもはニコリと笑った。頭をなでてやると、薄い髪の毛はサラサラとして絹糸のようだった。イスの端をつかんだ小さな手にさわってみると、フックラとして暖かった。

「ミドリちゃん、キミに気があるようだねえ」

僕のとおりで食事をしていた人が笑いながら言った。どうやらミドリちゃんはこの団体の中で人気者のようだった。何人かがつられて笑った。僕も思わずニコツ、としてみました。

「たびたびすみません」

お母さんがまた走り寄って来てミドリちゃんを抱き上げた。ミドリちゃんは火がついた

ように泣き出した。するとお父さんらしい男の人が席を立てて女の人からミドリちゃんを抱きとると

「ミドリちゃん、さあ、お部屋へ帰って父ちゃんとオネンネしようね」

とミドリちゃんの頬に口づけしながら言うと、食堂から出て行った。僕は何となく物足りない気持ちが残った。

「あなたもワークショップの参加者？」

席に戻って食事が続いていたお母さんが、二人の頭越しに僕にきいてきた。僕はワークショップという英語の意味は分からなかったが、ともかく違うと思って首を横に振った。

「そっ……」

女の人はそれだけ言うともた食事を続けた。僕も黙って夕食を済ませた。

食堂から戻る時、ロビーにY島の観光案内が置いてあった。地図やバスの時刻表もっていた。僕は一冊取って部屋に戻ると、フトンの上にゴロンと横になって広げてみた。一週間くらいはここに居るつもりだった。まず「聖なる樹」の下見に行つて、それから実際に登つてこようと思つていた。「聖なる樹」はバス道路から車で一時間奥に入り、そこからさらに四、五時間歩いた山の中にあつたのだ。いきなりではチョット体力に自信がなかった。あしたあたりさっそく下見に行こうと思つた。天気の良いうちに、「聖なる樹」ツアー

は済ませておきたかった。それが終わったら、あとは温泉にでもつかってノンビリしようと思った。何しろ考えることはイロイロあったのだから。家へは夜、電話を入れておいた。三日前に着いていたけど、ヒマがなくて電話がかけれなかった、と言っておいた。

翌朝は旅の疲れからか、寝坊してしまった。もう九時前だった。あわてて食堂へかけつけると、もう片づけが始まっていた。食事をしている人は二、三人しかいなかった。広いテールの端に座って、僕も急いで朝食をつめこみ始めた。窓から外を見ると、今日も穏やかな天気だった。海はないでいて、空には雲一つなかった。これなら「聖なる樹」への下見もだいじょうぶだろう。下見といっても車の入れるダムサイトまで行って戻ってくるだけだから、昼前には宿に帰れるだろう。そんな計算を頭の中で立てながら口をモグモグ動かしていた。

部屋に戻って着がえた。暖かいのでジャケットは着ないでトレーナーだけにした。下はいつものようにジーンズだ。ヘルメットを持って部屋を出た。玄関を出るとあのモッチョムが目の前にそびえていた。今日は僕はそのモッチョムよりも、玄関前の駐車場でうごめいている二、三十人の男女の群れに目が行ってしまった。皆ジャージを着てはだした。そばに昨夜のミドリちゃんとお母さんが立っていたので、あの集団がワークショップの団体なのだろうと思った。バイクは玄関わきにとめてあったのですぐにも出発できたが、僕は

ワークショップの人たちがやっていることに興味をわいてきて少しそっちへ行ってみようと思った。それにミドリちゃんともチョット顔を合わせたかったのだ。

僕が駐車場の方へ歩いて行くと、すぐにミドリちゃんが気づいてヨチヨチと僕の方に歩いて来た。女の人も僕を見て「きのうはどうも」というように軽くエシヤクしたが、今日はミドリちゃんを追いかけてこなかった。立ったままワークショップの人たちの方を見ていた。僕も女の人にチョコンと頭を下げると、三、四メートル離れた所で立ち止まった。ミドリちゃんが足にしがみついていたのでヘルメットを下に置いてしゃがみこむと、ミドリちゃんは僕の背中に回ってオンブのようなことをしてきた。女の人は時おり僕の方を見て笑っていた。

それにしても奇妙なことをやっていた。みんなゾロゾロ広い駐車場の中を歩き回って、人と人が向き合いになるとジツと見つめたまま立っていたり、オジギをしてまた歩き出すのだった。

「それでは今度は、目をつぶって下さい。相手を傷つけないようにしながら、手と手でほかの人と触れ合ってみて下さい」

リーダーらしい中年の男性が声をかけた。するとみんな目を閉じて、手を前に突き出して触角のようにさぐりながら、ソロリソロリと歩き始めたのだ。そしてほかの人とぶつかる

手と手をさわりあったり髪の毛に触れたり、はては抱き合っているカップルもいた。本当にこの人たちは何をしているんだろう？そんな疑問が僕の中に湧き上がった。というのも、きのうフロントでチェックインをした時、係の女性が開いていた宿泊名簿に「心と体のワークシヨップ・団体様」と書いてあるのがチラッと目に入ったのだ。『心』という字を読みとったとたん、僕は急に不快なものを感じていた。そしてこの団体が、心理学のカウンセリングか何かを研修しにここへ来ているのではないかという先入観を持つてしまったのだ。カウンセリング、それは僕にとって口の中がニガニガしくなる思い出だった――

去年の一月、オフクロが家に連れてきた市の「青少年相談員」と名のる男がカウンセラ―だったのだ。オフクロの哀願に耐え切れず、イヤイヤ下に降りて行くと、居間のソファ―に背広を着た初老の男が座っていた。僕は男の向かい側の席にワザと音を立てて腰を下ろした。男は円ぶちメガネをかけていて、頭ははげ上がっていた。僕の方にチラッと目をやってからうなずくと

「お母さん、お母さんはしばらく席をはずしていてくれますか」

とバカでいいいな口調で母に言った。オフクロはテーブルの端の席に座ろうとしていたのだが、僕の方に訴えかけるような目を送ると頭を下げて黙って居間から出て行った。男は僕の方に向き直るとやさしそうな声で語り始めた。まず自己紹介をした。男は市内の小・

中学校で勤めたあと、最後は教頭で退職し、それからは市の青少年相談センターでカウンセリングのボランティアをしていると言った。

「おじさんは長い間学校で教えてきた経験からね——この男は自分のことを『おじさん』と呼んでいた——イロンナ子どもたちに会ってきた。誰だって心に苦しいものを持つてるもんだよ。おじさんだってそうさ。でもね、キミのように特に問題をかかえた——」

と言いかけて、あわてて「キミのようなナイーブな心の」と言い直した。きつと「問題」と聞いて僕の左頬がピクツとしたのに気づいたのだろう。

「子どもたちにもたくさん会ってきたよ。でもね、シゲオ君。自分の中の苦しいことを人に話してみると、それだけでもうずいぶんラクになるもんだよ。お母さんからキミのことを聞かせてもらって、おじさんは本当にキミの力になってやりたいんだよ。さあ、シゲオ君、話してごらん。学校のことなのかな、それとも家のことなのかな、キミの心を苦しめているのは。おじさん、キミから聞いたことは絶対ほかの人にもらさないから安心していいんだよ。それだけは固く約束するから」

クソツタレ！と僕は思った。この男は目は笑っていたが、顔は笑っていないかった。猫なで声のような甘ったるい声でしゃべっていたが、顔だけ前につき出して体は後ろに引いていた。僕は、このウスノロジジイ！と思った。こんなヤツに胸の内を明かすくらいなら、

へドでも吐いた方がましだ。

アンタ、人の心の扉を開けようってんなら、まず自分の心をオープンにするのがスジつてもんじゃないですカイ。とつととうせやがれ、このドブネズミヤロー！

僕は何もしゃべらなかつた。シビレを切らしたこのドブネズミが僕にイロイロきいてきても、チャランポランに答えてはぐらかしてばかりいた。結局この男は何も成果を上げられず、スゴスゴと退散するよりほかなかつた。男が玄関のドアを閉めて二、三步歩き出し、それから振り返ってうらめしげに二階の方を見上げたあとまた歩き出したのを階段の小窓から確認した僕は、弟の部屋に入って金属バットを手にしたのだった――

そんな体験があつたから、僕はこの「心と体のワークシヨップ」にも何となくウサンクサイものを感じていたのだ。しかし今僕が実際に目にしてゐるものは、僕の抱いた先入見とはずいぶん違つていた。今は二人ずつペアに分かれて「背中対話」というものを行つていた。二人ずつ背中をくつつけてしゃがみこみ、言葉を使わないで背中をグリグリ動かしながら気持ちを伝えるのだった。僕もおもしろそうになって、ナントナクやってみみたいような気持ちになつていた。

「ゴメンナサイネ、出かけるんでしょ」

ワークシヨップに見とれてゐた僕に、女の人が近づいて来て声をかけた。

「ミドリ、お兄ちゃんは今からお出かけだから、さあ、もう行きましょ」

女の人はミドリちゃんの手をとって立ち上がらせようとした。ミドリちゃんは僕のアライのヘルメットにベタベタ手をついたり、ほおずりしたりして遊んでいたのだ。お母さんに強く手をつかまれたミドリちゃんは、激しく泣き出した。僕は何だか胸がキュツとなっていたたまれなくなった。

「ア、いいんです。オレ、ひまだから」

実際僕はヒマだった。時間は十分あったのだ。『聖なる樹』への下見は今日の午後でもいいだろう……。

「アラ、ホント？助かるわ。そうしたら、チョットの間ミドリを見ていてくれるかしら。これからブラインド・ウオークっていうのをやるんだけど、私もやりたくってウズウズしてたの。じゃあ、悪いけど、お願いね」

アツケにとられている僕を尻目に、お母さんはミドリちゃんに手を振るとスキップを踏んで向こうへ行ってしまった。アツケラカンとしたその態度に、僕はハラも立たなかった。むしろミドリちゃんをまかされて、内心うれしかったのだ。

ブラインド・ウオークというのも奇妙なやつだった。二人ずつペアに分かれて一人が目をつぶる。もう一人が手をつないだり少し離れた所から手をたたいて相手を誘導して行く。

目をつぶった方は、手や足でそれこそあらゆるものに触れるのだった。始まってすぐ駐車場のアスファルトの上に大の字になったり、一、二、三台とまっている車にほおずりを始めた人もいたが、ほとんどのカップルは「亜熱帯植物園」の方へ歩いて行った。植物園といっても大きなものではない。駐車場と海へ降りる林との間のわずかばかりの土地に、僕が知っているのではバナナやヤシの木などの樹木が十数本植えられているのだった。そこまでパートナーに導かれて行くと、ヤシの木に抱きついたり四つんばいになって地面の匂いをかいだり、あげくのはては土をほじくり返して自分の上にまき上げている女性もいた。知らない人が見たら、気が違ってる人たちだと思われるしまうだろう。

ミドリちゃんはその間、近くの花壇から土をすくい上げてはヨチヨチ運んできて、一生けんめいヘルメットの上にかぶせていた。小さな手なのでナカナカことがはかどらない。ミドリちゃんは指の間から土を落とすと、パン、パン、と手をたたいてニコツとうれしそうな顔を向けるのだった。そのたびに僕は「オリコウさん、よくできたねえ」と言って頭をなでてやった。するとまたヨチヨチと花壇の方に歩いて行くのだ。

そんなミドリちゃんの後ろ姿を見ながら僕はボンヤリと考えていた。あのワークシヨップの参加者たちも、必死になってミドリちゃんのような子どもに戻ろうとしているのではないだろうか、と。ワークシヨップの人たちは三、四十代の人が多いようだった。みんな

社会人で働いている人ばかりだろう。さしずめ僕はあの人たちとミドリちゃんとの中間だな、と思った。もう子どもではないが、さりとて一人前になって社会で働いてるわけでもなかった。その入口のところでつまずいて、宙ブラリンになってブラ下がっているのだ……。結局僕はそこに座って昼までミドリちゃんのベビーカーをしながら、ブライント・ウォークでペアになって散っていた人たちがまた駐車場に戻ってきた。皆まるく輪になってすわると、リーダーの人が二言、三言言って午前の部は終わったようだ。それぞれ立ち上がって宿舎の方に戻り始めた。その輪の中からミドリちゃんのお父さんとお母さんが僕の方に向かって歩いて来た。二人で熱心に話していた。

「どうもありがとう。助かつちやったわ。ミドリ、おとなしくしてた？」
女の人がそう言っただけがみこむとミドリちゃんを抱き上げた。

「アラアラ、こんなにヘルメット汚しちゃって。ゴメンナサイ」

僕のヘルメットの上には富士山のような土の山ができていたのだ。

「いいんです。もともと汚れてたから」

実際それはキズだらけだった。一月のあの「事故」の時にかぶっていたメットなのだから……。

「キミはホント、子ども好きなんだねえ」

お父さんが感心したように言ってきた。

「それほどでもないツスけど」

「いっそ、ミドリの子守り役になってもらおうか……。ナンチャッテ」
冗談とも本気ともつかない口調で男の人が笑いながら言った。

「実は、ボクラこのワークシヨップで保育室がなくて困ってたところなんだ」
そう言うと、男の人は片目をつぶってウインクしてみせた。

「アラ、ダメよ、そんなこと言って。カレにだってつごうがあるでしょ」

ミドリちゃんをあやししながら女の人が出た。僕はどう答えたらいいいのか分からなかった。ヒマがあるといえはあるし、かといってやることがないわけでもない。ミドリちゃんといえるのは楽しいが……。結局僕は

「ずっとはムリですけど、チョットなら」

とアイマイに答えておいた。この二人から信頼されているのはうれしくてムゲに断れなかったのだ。

「エ、ホント?! 悪いナア。さっそくだけど、今日の午後もダブル・ヘッダーでお願い
していいカナ?」

男の人は満面に笑みを浮かべてきいてきた。この人はよろこびを素直に表せる人だな、
と思った。

「いいッスよ。ヒマだから」

「どこか出かけるんじゃないの？」

女の人がまた同じことをきいてきた。下見はあしたでいいだろう、と僕は思っていた。このぶんならあすも天気は良さそうだし……。

「あしたにします」

「ワア、アリガトウ。ミドリ、よかったわねえ」

女の人がミドリちゃんを抱いたままクルクルと回った。ミドリちゃんもうれしそうにパチパチと手をたたいた。

「助かつちゃうなあ……。ところで、キミ、名前は何ていうの？」

「大久保です」

「じゃあ、これからは、Oちゃん、と呼んでいいね」

僕はうなずいた。

「ボクはK」

「私はY」

「よろしくね」

二人声をそろえて言うのとピョコンと頭を下げた。僕は何だかオカシクなってしまった。

あらためて二人をよく見てみた。二人ともモンペをはいていた。Yさんは髪を肩まで垂らし、Kさんもどちらかという長髪だった。そして二人とも細長い同じような顔つきをしていたので、夫婦というよりは兄弟に見えた。

「あら、ミドリおしっこしたみたい」

Yさんがミドリちゃんのお尻に手をあてて言った。僕は急に不安になってしまった。

「あの、オレ、オシメの替え方知らないんツスけど」

「ダイジョーブ、ヘイキ、ヘイキ。ボクが教えてやるから」

Kさんが僕の肩を軽くたたいてウインクした。この人は流し目を送るクセがあるようだ。

「アア、何言ってるのよ。私がいつも替えてるくせに」

Yさんがおこったように言うと、Kさんは僕に肩をすぼめてみせて

「そんなことより、さあ、メシだ、メシだ。腹がへったゾォー」

と大きな声を出して宿舎の方にスタスタ歩き始めた。僕もヘルメットを取り上げて、土を払い落としながらあとについた。

昼メシの時、ミドリちゃんは僕の膝の上に乗って食べた。もともと隣に座っていたYさんがスプーンでごはんを口に入れていたのだが。

「Oチャン、Y島へは何をしに来たの？ ツーリング？」

タマゴ焼きをミドリちゃんのためにハシでこまかくほぐしながら、Yさんが僕にきいた。「それもあるけど、“聖なる樹”に会いに行こうと思つて」

「オオ、何という偶然！ボクラもワークショップで行くんだよ。何日だったっけ」

Kさんがハシを口に入れたままYさんの方に顔を向けた。

「三十日か三十一日じゃなかったかしら。ワークショップの進行状況と天気のごあいびをみて」
Yさんがほぐしたタマゴ焼きをスプーンですくいながら言つた。あした下見に行くとする、僕もそのあたりになるかな、と頭の中で考えながら昼メシを食べ終わった。

ワークショップの午後の部は、宿舎の近くの公民館で行われるということだった。そこには広いホールがあつて、踊つたり跳ねたりぞんぶんにできるのでさうだ。何でも午後は、一人一人がY島の樹になつたり獣や鳥になつたりして、イメージでY島の世界を表現することをやるらしかった。もつとも僕はKさんの説明を聞いていても、何が何だかよく分かんかったのだが。

宿舎の玄関前で僕はYさんからオムツの替え方の手ほどきを受けた。手ほどきといつても「オムツカバのここにボタンがあるから、ここをはずせばカバはとれるわ。そうしたらオムツをはずして新しいのを前のおりにつけといて。見れば分かると思うわ。それから汚れた方はこの中にビニール袋があるからそこにに入れておいてね」

と、小さな手提袋を渡されただけだったのだが。

「男もこれからはオムツも替えられないとね」

Kさんがそう言うとういんくした。

「じゃあ、お願いネ」

Yさんがそれに取り合わずに行こうとした時、僕は

「あの、どこらあたりで遊ばしたらいいんすか？」

とせきこんでたずねていた。ミドリちゃんはもう僕の手をしつかり握っていた。

「そうねえ……この子、海を見るのが好きだから、宿舎の裏の海岸にでも連れて行って。」

波打ち際にほっぽつとけば、この子、一日中でも砂遊びしているから」

「確か、宿舎の横から海へ降りる道があったハズだよ、林の中を通って」

Kさんが横から口をはさんだ。

僕は二人と別れると、ミドリちゃんの手を引いてKさんから指さされた建物の脇へ回って行った。確かに小道が雑草の中に続いていて、向こうの林の中に消えていた。林の方からはウグイスの鳴き声が聞こえていた。自慢ではないが、僕は鳥の鳴き声はウグイスとカラス、それにスズメぐらいしか分からないのだ。

林の入口の大きな木に、*「アコウ」*と書かれたプラスチックのプレートがゆわえつげら

れていた。林の中に入ると、うっそうとしていて薄暗かった。さっきの入口にあった木と同じような木ばかり生えていたので、ここはアコウの森なのだろう。落ち葉をカサカサ踏みながら、僕はミドリちゃんの手を引いて行った。こんなに長い間、他人の肌と触れ合っているのは初めてだった。ミドリちゃんは僕にすべてをゆだねきったようで、僕はうれしかった。

林を抜けるとそこは断崖になっていた。目もくらむような数十メートルの崖が海に落ちこんでいるのだ。下にはノコギリの歯のようにギザギザになった岩場が続いていた。暗いネズミ色をした岩だ。僕は迷ってしまった。砂浜などどこにもなさそうなのだ。宿舎の食堂や部屋の窓から海の方を見て、あるていどは予想がついていた。遠く左右に見える岬から宿舎の裏まで断崖が続いていたのだ。右手の岬には灯台があつて、夜になるとチカチカ光を送っていた。でもこれほどとは思わなかった。宿舎の裏の海岸はアコウの林にかくれていて建物からは見えなかったのだ。小さな砂浜と言わないまでも、せめて波打ち際まで降りられる場所があつてもいいと思つたが、下の岩場から海まではゴツゴツした岩が続いていて、とても降りられそうになかった。僕は引き返そうかなと思つたが、ミドリちゃんが僕の手を引いたように感じて、下まで降りることにした。まあ、ナント力なるだろう。足もとから下の岩場へ、断崖にへばりつくようにして狭くて急な階段が続いていた。特

に急な場所には鉄の鎖もついていた。その階段を、僕はミドリちゃんの手を引いてゆっくりゆっくり降りて行った。下に着くと、案の定とても歩きにくい岩場だったが、少し平らな所があつて僕はそこでミドリちゃんの手を離してやった。

それにしてもイイながめだった。目の前には太平洋が広がっていた。穏やかな海で、波が静かに打ち寄せていた。空には雲一つなかった。ここで一日潮騒を聞きながらボンヤリとしていたくなるようなところだった。岩場には誰もいなかった。見渡す限りの海辺に、僕とミドリちゃんしかいなかったのだ。僕は歌が歌いたくなっていた。そんな気持ちになるのも久しぶりだった。もう一度あたりに人がいないのを確かめてから歌い始めた。Kも好きだったブルース・スプリングスティーンの『リバー』という曲だ。はじめはおずおずと歌っていたが、そのうち腹の底から大きな声を出して海に向かって吠えていた。もつと大胆なことに、エレキギターを持ってマネをして岩場の上を跳び回るパフォーマンスまでやってしまったのだ。二回、三回とくり返し歌った。汗が出てきた。気持ちよかった。少し疲れたので岩場の上に立っていたミドリちゃんの方に戻ると、ミドリちゃんが小声で何か言っている。しゃがみこんで聞いてみると、「シーシー」と言ってるのだった。ヤバイ！これはYさんから教えられたオシッコかウンチの合図だった。僕はミドリちゃんの股ぐらに手をやってみた。どうもウンチではなくオシッコらしかった。ミドリちゃんを抱

き上げて平たい岩の上に持つて行き、そこに寝かせた。石段の下にほっぽってあった手提袋を急いで取りに行つた。Yさんに教えられたとおりにまずオムツカバーをはずした。そうしたらオムツもいっしょにとれてしまった。オシッコの臭いがムツとした。ミドリちゃんの両足首をつかんで持ち上げようとした時、僕の目は意識せずにミドリちゃんのアソコに吸いつけられたようになってしまった。エロ本なんかでボカしてあるのを見たことはあるが、女のアソコをまぢかで見るのは初めてだったのだ。どのくらいそうしていたのだろう。一二秒くらいだろうか。突然

「アラ、オシメを替えるの？手伝つてあげようか」

と声がして、ホンノ一、二メートルしか離れていない岩かげから女が現れた。僕はフイをつかれた驚きと恥かしさで顔がマッカになつてしまった。ミドリちゃんのアソコをシゲシゲと見ていたのをこの女に見られたにちがいない……。

女はそんな僕の気持ちなどトンチャクせずにテキパキとオシメをはずすと

「オシメはどこにあるの？」

ときいてきた。僕はあわてて手提から新しいオシメを取り出して女に渡すと、代わりに汚れたオシメを受け取つてビニール袋に入れた。僕はオムツ替えの助手だった。ホンノ数秒しかかからなかった。その間ミドリちゃんはずっとおとなしくしていた。

「さあ、ミドリちゃん、終わりましたよ」

女はそう言うと、ミドリちゃんを抱き上げて岩の上に立たせた。ミドリちゃんの名前を知っているとこからみて、この女もワークショッパの参加者なのだろうか？僕がそんなことを考えていると、女はだしぬけに

「いい歌ね。アタシもブルース・スプリングステインが好きよ」

と僕の方を見ないで言った。僕は二重に恥かしさで赤くなってしまった。というのも、『リバー』というのは十七歳の「ボク」がハイスクールの時にガールフレンドを妊娠させて、その晩二人で車を運転して河に行き、河の中で裸で抱き合うという内容なのだが、同じ十七歳でも僕は女の子とキスをするどころか手を握ったこともなかったのだ。そんな僕の内に秘められたものを、この女に見られてしまったにちがいない……。

僕はあらためて女を観察した。三十代後半から四十代だろうか。年齢に似合わず不相応なかつこうをしていた。何しろ上は黄色の地に燃えるような太陽の図柄を配したトレーナーを着、下はピンクのスリムジーンズをはいていたのだから。センスも何もなかった。

女はミドリちゃんを立たせると、手を引いて歩き始めた。僕も手提をつかむとあわてて後を追った。近くの岩のくぼみに小さな水たまりがあった。女はそこまで来るとしゃがみこんだ。ミドリちゃんの腰に両手を置いて下からのぞきこむように

「ミドリちゃん、オバサンにもね、ミドリちゃんぐらいの子どもがいたの……。交通事故で死んじゃったのよ……」

と言うと、水たまりの中に指を入れて岩の上に数字を書き始めた。

198 × . × . × . ×

その数字は僕の脳裏に焼きついた。恐らく子どもが死んだ日なのだろう、と僕は思った。ミドリちゃんは黙ってその指文字を見つめたまま立っていた。女は最後の数字を書き終わると、僕の方を横目で見ながら

「アタシたちみんな、モッチョムの膝の上に抱かれているのね」

と言うと、クルツと頭をモッチョムの方へ向けた。女が振り向いた時、メタルフレームのメガネの枠が太陽の光にキラツ、と光った。断崖の上のアコウの林の向こうに、モッチョムはあい変わらず無表情に立っていた。頂上の切り立った岩肌は午後の陽を浴びて光っていた。正直言つて僕はその女といるのが息苦しくなってきた。母と雰囲気が似ていたのだ。そんな僕の気持ちを知つてか知らずか、女は

「やあ、どうぞ？」

と言つてミドリちゃんの手を僕に預けてくれた。僕は内心ホツとして女に礼を言うのと、ミドリちゃんの手を引いてその場から離れた。前方に、ダンゴのような大きな岩がデンと

かまえて行く手をふさいでいた。一人ならまだしも、ミドリちゃんを連れてはチョット登れそうになかった。かといつてまた引き返してあの女と会うのもイヤだった。アレコレ思案していると、その岩と断崖の間に人ひとり通り抜けられるだけのスキ間が空いているのに気づいた。近づいてみると、そこは小道になっていた。

大岩のすそを回って向こう側に出ると、男が一人岩場の上に海を向いて座っていた。上も下も黒のジャージで黒ずくめだった。男はあぐらをかいて坐禅でもしてるようだった。僕はその後ろをミドリちゃんの手を引いてソツと通り過ぎようとした。するといきなり男が振り向くと、ミドリちゃんに向かつてベロベロパーをしてみせたのだ。目をむいたり、舌を出したり手を頭につけてバタバタやってみたり、男はイロイロ試してみたがミドリちゃんはニコリともしなかった。

「ウーン、ミドリちゃんにも嫌われちゃったかなア」

男は腕組みをしてオドケた調子で言った。小柄な男だったが太って腹が出ていた。さっきの女と同じぐらいのトシだろう。

「キミもワークショッポの参加者？」

男は初めて僕の方を見るときいてきた。

「いえ、違います」

「フーン、じゃあK&Yさんに子守りを押しつけられちゃったんだな」

男はそう言うと、何がおかしいのか一人で笑っていた。KさんとYさんを知っているようだった。この男もワークショッパの参加者なのだろうか。

「そういうわけじゃないっすけど……」

僕はアイマイに答えた。

「キミ、高校生？」

僕は一瞬どう答えたらいいか迷ったが、自分でも正直な返事をしていった。

「中退です」

「フーン、そう、やめちゃったの……。僕も高校の教師だけどね、ナカナカやめられないんだよ……。今もここに座って海に飛び降りようかどうか迷ってたんだ。フンギリがつかなくてね」

男は冗談とも本気ともつかないことを言うとアハハ、と笑った。僕は何となくこの男に好感が持てた。おおよそ教師らしくなかったのだ。今まで僕の出会った教師とはまったく違っていった。

「あの、ワークショッパっていうのは、先生が多いんすか？」

男の笑いにつられて僕はきいてみた。チョットそのことが気になっていたのだ。

「さあ、どうかな。僕も初めてでよく分からないや。でもK&Yさんのように百姓をし

てる人もいるからなあ・・・」

僕はあの二人がいつもモンペをはいている理由が飲みこめた。

「ミドリちゃん、オジサンの方に来てごらん」

男は両手を差し出してミドリちゃんに向かってポーズを作った。ミドリちゃんは僕の手を握ったまま、不思議そうに男を見つめていた。

「アーア、脈なしだね。どうもキミに取られちゃったかな」

男はそう言って肩をすぼめると、僕たちに背をむけて海の方を向いた。

「きれいな夕陽だねえ・・・」

今までのオドケたようすとは全然違うシンミリとした声で男がつぶやいた。本当にほれぼれするような美しい夕陽だった。西の空を太陽が染めていた。あと一、二時間もすれば海に沈むだろう。穏やかな空だった。

あしたも天気だろうな、と僕は思った。その時ファイに、あしたはモッチョムに登ってみようと思った。さっきの女の言った言葉が気にかかっていたのだ。それにあの高さぐらいの山だったら、*“聖なる樹”* ツアーへのいいウォーミングアップにもなるだろう・・・。

夕食の時、僕はまたミドリちゃんを股の間にはさんでメシを食っていた。食堂でK&Yさんと会った時、Yさんから「どう、ミドリ、オシッコした？」ときかれて、「オシッコ

をしたけど、知らない女の人がおムツを替えてくれた」とアイマイに答えておいた。Yさんは「フーン、誰かしら」と言っただきりで、それ以上センサクしようとしなかった。

「ホント、誰の子か分からなくなっちゃったねえ」

Yさんのとなりでメシを食べているKさんが僕の方を見ながら言った。

「そうよネ、ミドリ、あなたのお父さんは誰でしょう」

Yさんが冗談っぽく言っただきりでミドリちゃんの口にスプーンを運んだ。僕は言おうか言うまいか迷ったが、思い切っただきりで言った。

「あの、あしたはチョット、モツチョムに登ろうと思っただき、ミドリちゃんの子守りができないうスけど」

「アラ、私達ちも登ろうと思っただきだよ」

Yさんがスットンキョウな声を上げた。

「Oチャンもいっしょにどうだい」

Kさんがウインクしてみせた。

「エエ・・・」

僕は言葉につまっただきってしまった。僕が一人でミドリちゃんを背負っただき登っただき行く姿を想像してしまっただきだ。

「アラ、心配しないで。この人がキャリアバックでミドリを背負って行くから」

Yさんが僕の心を見すかしたように言った。正直言って、僕は同行者ができてホッとしていたのだ。いうのも、タメシ前フロントの女の人にモッチョムに登れるかどうか念を押してみた時

「ハア、私も子どもの時学校の遠足で行った覚えがありますけど」

と女の人が答えていたが、僕が

「一人でもだいじょうぶ？」

ときくと、あわてて

「一人では止めといた方がいいです。危ないですから。去年も大阪から来た年配の御夫婦が二人で登って、ダンナさんの方が崖から落ちて足を折って、それはもう大変なサワギだったんですから」

と言われていたのだ。

「Oチャン、偶然ね、ワークシヨップの二人の人から別々に、あしたモッチョムに登らないかってさそわれていたの。だからまとめてみんなで行くことにしたのよ。Oチャンも気がねなんかしないで、どお？」

僕はうなずいていた。何となく午後海岸で会ったあの二人ではないかという胸騒ぎがした。

案の定、僕の予感当たってしまった。翌日、朝食を食べてK&Yさんに言われたとおりに九時前に玄関で待っている、きのうのあの二人が現れたのだ。Yさんが二人を僕に紹介してくれた。

「Oチャン、こちらがナムさん——南牟礼みなみむれさん。前からの知り合いなの」

男の方がナムさんだった。ナムさんは「やあ、また会ったね。ヨロシク」と言って手を上げた。

「それから、こちらが若月さん。ダンナの方の知り合いでネ」

若月さんはチョット僕の方を横目で見ただけだった。だいたいがこの人は落ち着きがなく、視線が一定していなかった。

「こちらが大久保君。ミドリの有能なベビーシッターなの」

「父ちゃん役じゃないかな」

横からKさんが冗談を言った。僕はチョット頭を下げた。みんなでゾロゾロと県道のバス停まで歩いて行った。モッチョムは、バスで三つ四つ先のバス停から歩いて登るのだった。

それにしても奇妙な集団だった。K&Yさんはいつものようにモンペをはいて、上は二人とも薄手のセーターを着ていた。Kさんは背中にしよい子のようなものをしよって、ミドリちゃんを入れていた。ナムさんは、さすがに今日はジャージ姿ではなく、下は茶色の作業ズボン、上は黒のセーターを着ていた。この人はよっぽど黒が好きなのだろう。若月

さんはきのうと同じ服装だった。そして僕は、山へ登るのにツーリング・ブーツをはいていたのだ。靴はこれしかなかったから仕方がなかった。Kさんを除いて皆小さなリュックをしょっていた。僕もデイパックを持ってきた。

バスから降りると、最初はアスファルト道を歩いて行つた。ミカン畑や野菜畑が続いていた。畑といつてもそんなに広い畑はなかった。道々、ナムさんがK&Yさんに二人の畑のことをきいていた。

「始めたのは去年だっけ？」

「そう。一二反借りたんだけど、去年はまだ初めてで要領が分からなくて、カンタンなものしか作らなかつたの。おかげで今年はずうーっとジャガイモとかサツマイモとかタマネギとかそういうものばっかり食べてるわ」

Yさんが笑つた。

「無農薬・有機肥料でやりたいから、最初の土づくりは三、四年かかるかな」

Kさんが続けた。ナムさんはしきりにうなずきながら「オレもそんな仕事やりたいナ」とブツブツ言っていたが

「あれ、よく知らないんだけど、共同購入って言うの。野菜を作って消費者グループに卸して。ああいうので将来的にはメシを食っていかうっていうツモリ？」

と二人にたずねた。

「あんまりムリしたくないんですよ。始めから人のために作るっていうの、ナンカこう肩に力が入っちゃって不自然っていうか……。ムリしないでボチボチやってこうって思ってます」

とKさんが答えると、Yさんがつぶやいた。

「やさしく生きたいのよね」

「自然と」

「自分自身にも……」

二人の言葉を聞いてナムさんは黙りこんでしまった。若月さんは話の仲間には加わらず、道ばたで咲いている花に顔を近づけてはフンフンいわせて匂いをかいでいた。

そうやって小一時間も歩いただろうか。道はこうばい急になって、いつしか山道になっていた。下の方にモツチョムの山すそが広がってきた。そこを登りきると、大滝の展望台という所に着いた。駐車場とトイレがあり、その横に展望台があった。遠くからゴーゴーという滝の音がしていた。みんなで休憩がてら展望台に上ってみた。

さすがに大滝と言われるだけあって迫力のある滝だった。森の向こうに、高さ数十メートルの滝が勢いよく水しぶきを上げていた。滝の両側は一枚岩のように切り立った崖だっ

た。いいながめだった。Kさんは展望台に着くと、キャリーバックを肩から降ろして大の字になって寝てしまった。疲れたのだろうか。ナムさんはナムさんと、ここでも足を組んで滝に向かって瞑想していた。女二人は、展望台の手すりにもたれて、風に髪をなびかせながら言葉をかわしていた。僕は少し離れたところでミドリちゃんとふざけていた。

どのくらいそこで休んでいたのだろうか。ナムさんが腰を上げて「さあ、そろそろ行こうか」と声をかけた。それが出発の合図になって、みなゾロゾロと展望台を降りて行った。ナムさんが、この展望台は海拔二百メートルくらいだからあと七、八百メートルの登りだろう、と解説していた。車道はそこで終わり、登山道が始まっていた。ナムさんが先頭に立ち、その後ろを若月さん、それからK&Yさん、僕の順に歩いて行った。僕は何だかトシの順なのかな、と思った。

モッチョムの登山道は、観光パンフにもハイキングコースとして紹介されていたので、僕は都会の公園の遊歩道のようなイメージを持っていたのだがだいぶ違っていた。道はきつく、そんなに歩いた形跡も見られなかった。僕は、本当に小学生が登りに来るところなのだろうかと少し不安になった。登山道では誰も口をきかず、みんな黙々と歩いていた。それでも時々Kさんが道に落ちている木の実を拾っては「これ何の実だろう」と言って後ろから来るYさんに見せていた。そんな時ナムさんはすぐに立ち止まって、二人が歩き

出すのを待っていた。森は自然林でうつそうと生い茂っていたので薄暗かった。大木が倒れて道をふさいでいる所があった。その倒木の幹にKさんがサルノコシカケを見つけた。大きなキノコだった。ナムさんも応援して二人ではがそうとしたがナカナカとれなかった。結果的にそこで小休止したことになった。あと小さな沢でも一度休んだ。沢の冷たい水は本当においしかった。そうやって「聖なる樹の友」までやって来た。

「聖なる樹の友」というのは、「聖なる樹」ほどの樹齢はないが、それでもY島で五本の指に入る杉の古木こぼくだった。きっと「聖なる樹」の古くからの友人なのだろう。「友の樹」は尾根に生えていたので視界が急に開けて明るくなった。僕はその偉容にビックリしてしまった。フツウ杉の木と言えば割りばしのように植林されたまっすぐな形しか思い浮かべないが、「友の樹」の姿はまったく違っていた。渦を巻くようにクネクネとしていたのだ。全体がズングリムツクリで根元が大人が何人も手をつながなければ回れないほど太かったので、大地のエネルギーが渦を巻いて噴き出したようだった。樹齢数千年と言われているのに木肌はツヤツヤしていて、緑の葉もみずみずしかった。

K&Yさんはミドリちゃんの靴を脱がせて自分たちもはだしになると、地表に出ている「友の樹」の太い根の上を歩いたり、木の幹に抱きついたりしていた。きのこのブライインド・ウォークの続きをしているようだった。ナムさんは少し離れた所から樹を見上げながら、

足を組んでまた瞑想を始めていた。若月さんは樹の幹にほおずりしてから、ピッタリと耳を押しつけて目を閉じた。『友の樹』の鼓動を聞いているようだった。僕は『友の樹』の太い根っこに腰を下ろしてタバコを吸った。二、三本フカしたところでやめておいた。マッチがあと一本しかなかったのだ。

ときおり鳥の鳴き声があった。あとは静けさに満たされた世界だった。誰もしゃべらなかつた。どのくらいそこで休んでいたのだろうか。若月さんが樹の幹から顔を離すと

「そろそろ行かないこと」

と言った。樹皮のあとが頬についていた。みんな腰を上げた。ナムさんと僕がKさんにミドリちゃんをおぶるのを交代しようと言ったが、Kさんは「ダイジョーブ、ヘイキ、ヘイキ」と言つて首を横に振った。僕は、オヤジのイジを見せようとしているんだな、と思つて何だかおかしくなった。

今度は若月さんが先頭に立ち、その後をナムさん、K&Yさん、僕の順に歩いて行った。『友の樹』からは林の下草が少なくなり疎林状態になったのに、若月さんはまるで道をそらんじているようにヒョイ、ヒョイと歩いて行った。そうして三十分くらい進んだ時

「アフ、蛇ふんじやつたー」

と若月さんが子どものような無邪気な声を上げた。

「エ、蛇?! ハブじゃないだろうね」

Kさんが大きな声を出した。きつとミドリちゃんのことか心配になったのだろう。

「Y島にはハブはいないだろう。それにこの蛇、死んでるよ」

道の上にかがみこんでナムさんが言った。

「ア리가いっぱいたかってる」

僕は蛇と聞いただけでイヤな気がしたのに、その上アリまでたかっていると聞かれて背中がゾクゾクツツ、としてしまった。僕は蛇が大嫌いなのだ。ナムさんが木の枝で蛇を持ち上げてみんなに見えるようにした。僕は見たくなかったのだが目に入ってしまった。褐色の小さな蛇だった。

「何ていう蛇かしら」

とYさんが言った時

「もう少し早く来てたら、おまえに会えたのにね」

と若月さんが蛇に顔をくつつけるようにしてつぶやいた。若月さんはメガネをかけてても目が悪いんじゃないか、と僕は思った。ナムさんが反動をつけて蛇を林の中に放り投げた。僕はアリが右往左往していると踏まないように気をつけて登った。

そこからすぐの所で道は疎林を抜け、明るい尾根に出た。尾根道には松の木が何本か生

え、丈の低い笹が生い茂っていた。遠く数十メートル先に、モツチョムの頂上が見えていた。オムスビのような形をした大きな岩だった。

そこから先は少しナンジュウした。密生した笹が意外と手ごわかったからだ。一、三十分かけてやっと頂上にたどり着いた。見上げるような大石だった。オムスビというよりも栗まんじゅうのようにズングリムックリしていた。海とは逆、こちらの尾根道側に大きなタテの裂け目が走っていた。裂け目というより断層に近かった。

「ここから先は、チョット行けそうにないナ」

先に着いていたナムさんがみんなに向かつて言った。確かにそう見えた。左の海側は切り立った崖になっているし、右の山側も笹が迫っていて回れそうもなかった。

「ここでメシを食べようか」

「そっね」

皆リュックを降ろし始めた。でも僕は目の前の大岩の上にも立ちたかった。竹ザオが一本アンテナのように立っているのだ。誰か登った人があるにちがいない。それここは大岩の陰でどうみても狭すぎたし、展望もよくなかった。僕はディパックを降ろすと岩にしがみついた。どこにも手や足をかける所がなかった。可能性としては唯一、割れ目の断層に手についてフンバリ、アマガエルのように登って行くしかなかった。一度そう

やってみたらズリ落ちてしまった。

「アラ、Oチャン、登るの？はだしになってみたら」

Yさんが振り向いて言った。グッド・アイデアだと思った。ブーツと靴下を脱ぎ、再挑戦してみた。何度かすべり落ちそうになったがシャクトリ虫のように進んで行った。や々と大岩の頂上まで来た時は、腕がガクガクしていた。

「どおー、上の景色は？」

Yさんが下から声をかけた。

「最高ツスよ」

すばらしいながめだった。三百六十度の展望が開けていた。前には太平洋、背後にはモツチヨムより高い山々がそびえていた。海沿いに県道が走り、人家が点々と見えた。遠く宿舎の白い建物も見えた。なだらかな山すそには林が広がっていた。頂上は思ったより広く、タタミ五、六枚ほどはあった。これならみんなでいっしょに食べられるだろう。ナントカ登る道がないだろうか？山側に石を積み重ねて竹ザオがさしてあった。その裏に回ってみると、チャント登り道がついていた。これなら女の人でも登れるだろう。僕はそこから降りて岩のすそを山側にグルッと回ってみんなの所に戻った。みんなは岩の陰で弁当を広げていた。僕は少し得意げに

「向こうに登り道があるツスよ。展望がゼンゼン違うから」と説明した。

「それなら行ってみようか」

みんな腰を上げてリュックをしょった。僕も靴をはきディパックをかついで後についた。KさんだけはミドリちゃんをYさんに預けると

「オレも、ここから登りたいんだ」

と僕にウインクして、はだしになってあの割れ目を登り始めた。

「ワアー、最高」

「いいとこネ」

「来たかいがあつたよ」

みんな口々に言つて腰を下ろした。さあ、昼メシだ。僕は朝食堂で、Yさんにならつておひつのごはんで握りメシを作ってきた。ナムさんも若月さんもそうしたようだった。

「ハイ、これポンカン。宿舍の前の八百屋さんで買ったら、一袋買つて一袋オマケにくれたの」

「へえー」

若月さんがみんなの座つてる輪のまん中にビニール袋から取り出したポンカンを置いた。

「オレは、これ、黒砂糖のお菓子。疲れてる時は甘いものがうれしいんだよネ」

ナムさんがそう言って、リュックから黒砂糖のチョコレートのようなものを取り出した。確かに僕も甘いものが欲しくなっていた。

「私は、ゆで卵。朝、ゆでてもらったの」

Yさんが十いくつもゆで卵を取り出して並べた。

「朝みんな、朝食べないじゃん。だから宿の人にゆでてもらったんだよ」

大石の割れ目を登って来たKさんが、手のホコリをはたきながら言うYさんのとなりに腰を下ろした。僕はK&Yさんの子連れの知恵に感心してしまった。

「あの・・・オレ、ナンニモ持ってこなかったんすけど・・・」

僕が口ごもるとYさんが

「アラ、そんなこといいのよ、Oチャン。気にしないで、食べて」

と言ってくれた。

皆思いたいの方を向いてオムスビをパクついてた。僕は海を見ていた。今日も穏やかな天気だった。山道を登ってほてった体にはそよ風が心地よかった。海はないで鏡のように広がっていた。遠く、水平線の空と海の境はハッキリしないで溶け合っていた。ミドリちゃんは若月さんの膝の上でメシを食べていた。若月さんが自分の子どものようにごはんを少

しずつ手にとって食べさせていた。Yさんの水筒でお茶も飲ませていた。僕は何だか寂しくなった。けさからミドリちゃんが僕から離れていったようなのだ。朝の食事は、Yさんの膝に抱かれて食べていた……。

「あの時Yさんから言われたとおりだったよ」

ナムさんが出しぬけに口を開いた。Yさんに向かって言っていた。

「つつい忙しさにかまけてね、あれから一度もカレのそこには行ってやれなかった……」
「そう」

Yさんは少し沈んだ声で答えた。僕は二人だけに分かる会話だな、と思った。

「ホントにあの時、Yさんにこっぴどくやられたナア……。あの時Yさんから言われたことが僕の胸の中でタネになつてね、ダンダンと大きくなっていったんだ……。そうしたら教師として崩れ始めちゃつてね……。今では夫婦生活もうまくいかないんだ……」
そう言つてナムさんが弱々しく笑った。僕は「夫婦生活」という言葉を聞いて、オヤジとオフクロのことを思い浮かべていた。僕のものごとがついてからずっと、二人は別々の部屋で寝ていた……。

「ナムさんのおくさんも教師？」

Yさんがきいた。

「そう。職場結婚」

「子どもは？」

「まだ・・・」

沈黙が訪れた。決して気まずい雰囲気ではなかった。若月さんが「バオ、バオ」と言っ
てミドリちゃんをあやしていた。下の方から「サオヤー、サオダケ」という物売りの声が
流れてきた。目をこらしてよく見ると、軽トラが一台県道をゆっくり走っていた。のどか
な雰囲気だった。僕はこんな狭い島ではたして商売になるのだろうか、と思っってしまった。

「ミドリを産んだらね」

Yさんの声で振り向くと、Yさんは若月さんにあやされているミドリちゃんの方を向い
て言っていた。

「急に死のことを意識し始めたの——」

「オヤジとおフクロとそのまたオヤジとおフクロがいてボクがいる」

KさんがYさんの言葉を引きとって続けた。いつになくマジな口調だった。

「そのつながりの中で、ボクがミドリを産んでミドリがまたその子どもを産んで・・・
そういうことを考えると、生命っていうのは、自分が滅びて次の生命をつくっていくんだ
なって——」

「ウウン、私はもっと即物的な感じ。体の中にポツカリ穴があいちやっただっていうのかなあ……」

その時、今まで黙っていた若月さんが口を開いた。若月さんが膝の上のミドリちゃんから顔を上げた時、メガネのフレームがキラッと光ったように僕は思った。

「でもね、生まれた子どもが死んじゃったら、もっと取り返しのない思いがするものよ」
一瞬、気まずい空気が流れた。僕は、K&Yさんやナムさんが若月さんの子どもが死んでいることを知ってるのだろうかと思った。Kさんがその場をとりつくろうような感じて若月さんに質問した。

「若月さんの上の子ども、確か小学校に上がるころだったよネエ」

「四月から一年生なの。学校にはやりたくないんだけど」

若月さんはそう言うのと、皮肉な目でナムさんの方をチラッと見た。ナムさんはそれに気づいたのか気づかなかったのか

「オレも、学校行きたくないなあ」とオドケた声で言った。

「ナムさん、そんなにシンドければ、やめれば」

Yさんがさとすように言った。僕はYさんの言葉を聞いてビツクリしてしまった。そん

なにアツサリと「やめれば」と言う人があるのを知って驚いたのだ。僕の周囲にはそんな人間はいなかった。そのために僕は二年間もグズグズしてしまったのだ。いや、一人だけいた。高校二年目のあの担任が……。

「ナカナカ、フンギリがつかなくてね」

ナムさんがタメ息をついた。

「ウチのカミさんも働いてるから、このトシでヒモになるっていうのも悪くないと思うけど……」

ナムさんはいつも冗談でチャカしてしまうのだった。また沈黙が訪れようとした時、若月さんが出しぬげに

「Oちゃんは、何しにここへ来たの」

ときいてきた。僕は若月さんから「Oちゃん」と言われて、正直言つてビックリしてしまった。その動揺のためでもないだろうが、僕は正直に答えていた。

「友だちがバイク事故で死んで……その墓参りに来たんす」

「そうだったの……」

Yさんが目を大きく見開いて僕を見つめながらポツンと言った。

Kは死んだんじゃないかって殺されたんです！

僕もその共犯です！

僕は叫び出しそうになったが、できなかつた。皆だまりこんでしまった。僕はこの沈黙で心の落ち着きを取り戻した。へたななぐさめの言葉よりずっと良かった。この人たちは皆、沈黙を理解してる人たちだな、と思った。

それからまた、話題が生まれては消えた。僕が覚えているのはナムさんの語った鳥の目の話だ。何でもナムさんが一茶の俳句集を読んでいて

雀の子そこのけそこのけお馬が通る

という句にぶつかって、鳥の目には世界はどう見えるのだろうかという疑問が浮かんできた。すぐに野鳥の保護団体の事務所に電話すると、電話口に出た若い男の人は

「ムズカシイ質問ですねえ。鳥の目の水晶体を取り出してそれに光を当ててどうとらえるかという実験ならできるとは思いますけど……。結局、鳥になつてみなければ分からないんじゃないでしょうか」

と答えたそうだ。

「カンタンなようなことが、案外ムズカシイんだねえ。この、宇宙空間にスペースコロニーで住もおうつという時代に……。やっぱり、鳥にならなければ分からないんだろうねえ……」
広い太平洋の方を向いてナムさんはつぶやいた。

それからどれくらい時間がたったのだろうか。

「そろそろ降りようか」

と言ってナムさんが腰を上げた。日が少しかげってきたようだ。

「そうね。じゃ、後かたづけをして・・・」

女の人ふたりが昼食の残りを片づけ始めた。ゴミはYさんが持つてきたビニール袋に入れていた。

「Kさん、帰りは僕がミドリちゃんを背負っていくよ。疲れただろ」

ナムさんがそう言うのと、Kさんも断らなかつた。

「じゃー、お願いします」

そう言うって、しよいカゴごとミドリちゃんを渡した。僕は途中で休んだ時に、ナムさんと交代しようと思つた。

岩かげを回ってまた尾根道に出た。僕はさつきからオシッコがしたくてしようがなかつた。歩き始めてからよりも、ここで済ましておく方がいいだろう、と僕は思つた。

「あの、オレ、チョット、シヨンベンしたいUSSが・・・」

僕が言うのと、Kさんも

「オレも」

と言ってウインクした。二人は大石の割れ目の下に隠れて連れションをした。Yさんも「私もしてくるわ」と言って、ガサガサやぶを分けて行った。

「じゃあ、チョット先に行ってるから」

ナムさんが僕とKさんの背中に声をかけて歩き始めた。その後を若月さんがついて行った。Yさんがやぶから戻って来たので、Kさんが

「さあ、ボクラも行こうか」

と言った時、肩からリュックをはずして中をのぞいていたYさんが

「ア、水筒、上に忘れてきちゃったみたい。ゴメン、待ってて。すぐ取ってくるから」

と言って、石の上に登って行った。前に行くナムさんと若月さんは、もう十数メートル先を歩いていた。

「オーイ、忘れものしたって言うから、先に行つててエー」

Kさんが口には手をあてて叫んだ。ナムさんも若月さんも振り返った。Kさんの声が届いたようだ。

「友の樹」のところで、待つてるゾー」

ナムさんが大声で返してよこした。Kさんと僕は、分かった、というように両手で大きなマルの輪をつくった。ナムさんと若月さんは片手を上げて答えると、また歩き始めた。

ナムさんの背中でミドリちゃんが揺れていた。

「ネエ、チョット来て！」

上の方からYさんの声がした。

「オイ、どうした？」

Kさんが大きな声を出すと、急いで大石のすそを回って行った。Yさんのことが心配になったのだろう。僕も笛をかき分けてKさんの後に続いた。

「ホラ」

岩の上にYさんが立ちつくしていた。見ると、Yさんの目の前で蝶が舞っていた。何だ、蝶か、蝶ぐらいであんな大声を出して、と僕が思った時、僕の前で足を大岩の上にかけていたKさんが

「メビウスの輪だ」

と言った。

「メビウスの輪？」

「そう、誰にも解けない知恵の輪・・・」

Yさんがつぶやいた。言われてみると、確かに蝶はヘンな飛び方をしていた。三匹でじゃれ合うようにグルグル、グルグルと∞字形を描いて飛んでいるのだ。一匹はルリ色の蝶で、

二匹はさつき食べたポンカンのようなダイダイ色をしていた。三匹の蝶はじゃれ合うように飛んでいたかと思うと、Yさんの足もとに降りた。KさんはYさんと並んでしゃがみこんだ。僕は二人の横で立っていた。あの飛び方は、何だかいつまでも迷路から脱げ出せないでいるオレの宙ブラリンな状態を暗示してるようだな、と僕は思った。

「ジッと見てるわ・・・」

三匹の蝶は、羽根を立てたり寝かせたりしながら岩の上で休んでいた。頭はこちらを向いていた。僕はさつきナムさんの言っていた鳥の目のことを思い出していた。蝶の目は複眼だから、僕たちの姿はどう映っているのだろう。モザイク模様のようになのか、それとも一つ一つの目が全体をとらえているのだろうか・・・。

僕がそんなことを考えていた時、風がサツと強く吹きつけると、蝶は舞い上がった。と思う間もなく、空に消えてしまった。実際はどこかへ飛んで行ったのだろうか、青空の中では目がとらえられなかったのだ。三人とも無言で岩を降りた。僕はチラッと腕時計を見た。二時四十分をさしていた。時計を見たのはその時が初めてだった。水筒は、若月さんが持つて行ったようだった。

尾根道にはもうナムさんと若月さんの姿はなかった。Kさんが先頭に立ち、その後をYさんと僕が続いた。前に行く二人からはどのくらい遅れてしまったのだろうか。Kさんは

心もち早足で降りているようだった。意外に早く、友の樹に着いてしまった。しかしそこには誰もいなかった。

「アフ、どうしたのかしら?」

Yさんが言った。三人でグルッと樹の周りをまわってみた。やはり誰もいなかった。

Kさんは少し先まで降りて行った。戻って来たKさんに、Yさんが

「どうだった?」

とたずねると、Kさんは首を振るばかりだった。

「三人で声を出してみようか」

とKさんが言ったので、声を合わせてナムさんと若月さんの名前を呼んでみた。どこから何の返事も返ってこなかった。

「どうしたのかしら」

Yさんが言った。

「先に降りちゃったのかしら」

Yさんが心配そうな声でつぶやいた。僕も胸が高鳴ってきた。

「Oチャン、さつき頂上で、ナムさんは『友の樹』のところで待ってる』って言ったよネ」
Kさんが僕に念を押した。僕もうなずいた。確かにナムさんのその言葉は聞いていたのだ。

「私たちが遅いから先に降りちゃったのかしら」

Yさんが言った。

「可能性は二つしかないな」

腕組みをしながらKさんが答えた。

「先に降りたか、それともボクラが追い越しちゃったか」

「追い越すって、誰もいなかったじゃないの！」

Yさんが少し神経質になって反論した。きつとミドリちゃんのことを気にかかっていたのだろう。

「先に降りるにしても、書き置きぐらいしていくだろうしなあ・・・」

Kさんがつぶやいた。三人で樹の周りをくまなくさがしてもそんなモノは何もなかったのだ。その時僕は前にシャシャリ出て、二人に僕の考えを話していた。三人は降りる途中で道に迷ってしまったのではないかと。僕の推測には根拠があった。宿のフロントの人から聞いた、大阪の老人の転落事故の話だった。さすがにそれを聞いたK&Yさんはチョット驚いたようだった。僕は二人に、もう一度頂上まで戻ってみようと提案した。僕の頭からは、崖から落ちたナムさんと若月さんが折り重なって倒れ、そばでミドリちゃんがシクシク泣いている光景がどうしても離れなかったのだ。あの二人ならそんなドジはやりかね

ない、と僕は思った。Kさんは黙って考えこんでいたが

「Oチャン、今、何時？」

と僕の腕時計の方に目をやりながらきいた。

「ア、止まってる！」

「エ?!!」

時計は二時四十分をさして止まっていた。さつき頂上を出発した時間だ。この腕時計は、オヤジが僕の高校入学祝いに買ってくれたもので、スイス製のかんりの高級品だった。今まで一度も故障したことはなく、あの「事故」の時もチャント動いていたのだが……。

「あそこで二時四十分とすると——」

Kさんはあごに手をあててなで回しながら言った。

「今ごろは、三時過ぎじゃない？」

横からYさんがもどかしそうに言った。

「そうだね。ここからまた頂上の見える尾根まで戻って三十分……それから下山して三時間、いや、帰りは下りだから、もっと早いだろう。二時間半として、六時か……ギリギリだな」

そう言うのとKさんはYさんと僕の顔を見くらべた。

「もう一度あそこまで戻ってみようか？」

僕はうなずいた。Yさんは少し迷っているようだったが

「そうね・・・万一のこともあるし・・・」

と言って同意した。

それから三人でもと来た道を登り始めた。今度は僕が先頭に立った。その後をKさんとYさんが続いた。三人で山道を登りながら、「ナムサーン」、「わかつきサーン」と大きな声で呼びかけた。そして枝道のようなところへ来ると、Yさんがそこに残り、僕とKさんが少し奥まで入って二人の名前を呼んだ。もともと枝道といっても、「友の樹」から上は下草のまばらな疎林状態で、ウツカリするとどれが登山道か見失いがちになるのだった。ところどころの木にはつてあるビニールテープが唯一の目印だった。

そして事もあろうに、この僕が、そのへまを犯してしまったのだ。僕は心がせいでいた。額から血を流して泣き続けるミドリちゃん顔が頭にチラついていたので。

「Oチャン、そんなにアセラなくてもだいじょうぶだよ」

何回かKさんから声をかけられた。Kさんは、Yさんがどうしても遅れがちになるので時々立ち止まってYさんを待っていたのだ。

突然、道がなくなっていた。あたりを見回してみても、それらしいものはなかった。道

に迷ったのだ。

「道がない！」

僕は悲痛な叫びを上げた。

「エ?!」

二人とも驚いたようだった。

「どうしよう」

僕の声はチョット震えていた。こんなところで時間をロスすると、僕たちの下山まであやうくなってしまうのだ……。

「戻った方がいいかな」

Kさんがつぶやいた。山で道に迷ったら、もと来た所へ引き返すというのが鉄則らしいのだが、僕はそんなことは知らなかった。そしてヘマの上にさらにヘマをぬり重ねてしまったのだ。僕は二人にこう言った。

「モッチョムの見える所は尾根道だから、とにかく上へ行けば尾根に出るんじゃないツスカ」

「そうね、それがいいかもネ」

Yさんが同意してくれた。それでまた三人で道なき道を登り始めた。はじめはそれでもまだよかった。下草がまばらにしか生えていなかったので、斜面に足をとられてすべり落

ちるていどだった。そのうち笹が密生してきた。もう少しで尾根に出るのだろうが、ナンジュウをきわめた。やっと上が明るくなつてポツカリ尾根に出た。一本の松の木が立っていた。僕はさつそくその枝に足をかけて登つてみた。遠くにモツチョムの頂上の大岩が見えた。空を見て、僕はアツ、と思つてしまった。この明るさは、明らかに日没後の夕空を示していた。はたしてこれから宿舎へ戻れるのだろうか……。

「どうだい？」

下からKさんがきいてきた。二人とも見上げている。

「ウン、モツチョムは見えたけど、別の尾根に出ちゃったみたいッス」

登山道は、大岩からしばらく尾根を行き、それからもう一つ山側の尾根を巻くように下へ降りていたのだ。僕たちは海側の尾根に出ってしまった。

「ウン、そうだねえ」

木に登ってきて、僕の横の枝に腰を下ろしたKさんが言った。

「とりあえず、あそこまで戻るしかないな」

あそこというのは、モツチョム岩から数十メートル手前の、登山道が尾根から樹海の中へ折れる地点だった。そこで尾根が二股に分かれていたのだ。Kさんの言った道しかないように思えた。

三人でまたヤブこぎを始めた。今度は方向をまちがえることはなかったが、そのかわり笹が密生していてナカナカ前へ進めなかった。やはり僕が先頭になっていた。僕は登山道を示すビニールテープが木に巻きついてないかどうか、それだけを目をサラのようにしてさがしていた。どれだけ時間が過ぎたのだろうか。だんだんと暗くなってきた。

「あつた！」

思わず僕は大声で叫んでいた。もう白以外のテープは見分けがつかなかった。細い木の幹にボンヤリと白いテープが巻いてあつたのだ。

「ホントだ」

Kさんも後ろから声をかけた。

「あー、よかつた」

Yさんが本当に心の底からホツとした、という声で言った。そこは登山道が尾根から樹海へ折れる地点のすぐ下だった。かろうじて道だと分かるところを登ると、遠くにモツチヨム岩が黒々と見えていた。もう街の灯ひかりがついていた。決断の時だった。歩き続けるかどうかではなく、どこで野宿をするかの決断だった。僕たちは皆ハイキング気分に登って来たので、誰も懐中電灯など持ってなかったのだ。

「いっいで野宿するしかないな」

Kさんが言った。案外、陽気な声に聞こえた。

「雨が降ってくるといけないから、少し下へ降りて木の下に入ろう」

見上げると、空は星一つなく黒々としていた。雨が降るかもしれないと思うと、イヤな気分になった。三人でソロソロと道を降りた。少し行くと登山道に接して大きな木が生えていた。ここなら、雨宿りできそうだ。

「ここにしよう」

Kさんがそう言った時、ホンノ一瞬でもうまっくらになってしまった。まったく手もとも見えないし、つこくの闇というヤツだ。三人で体をくつつけるようにしてそこにしゃがみこんだ。黒々とした原生林の間から、街の灯が遠くポツン、ポツンと見えた。僕はさつきから黙りこんでいるYさんのことが気になって仕方がなかった。きつとミドリちゃんのことを心配しているのだろう。僕は二人に謝ろうと思った。

「スイマセン。オレがヘマをしたもんだから、こんなことになっちゃって・・・」

「アラ、いいのよ、Oチャン。気にしないで。これだけさがしていないんだから、ナムさんたちは先に下山したんだわ」

Yさんがなぐさめるようにそう言ってくれた。Kさんもとなりから

「ウン、だいじょうぶだよ。それに『聖なる樹』のような山の中ならともかく、こんな

街の灯が見える所で遭難するなんて、いいミヤゲ話じゃないか」

と言って笑った。僕はみやげ話というよりは笑い話だな、と思った。

「そんなことより、これから先のことを考えようよ……。マズ……。そうだな、火を焚いた方がいいな。体があつたまるし、気分も暗くならなくてすむだろう」

Kさんが実務的なことに話題を移した。

「Oチャン、ライター持ってたよね」

僕はいつもライターではなくマッチを使っていた。

「何本ある？」

「一本」

そう、一本しか残ってなかったのだ。来る時、友の樹のところで最後の一本を残しておいたのだ。

「ウヒャー、何だかインネンめいてるね」

Kさんがわざとオドケたように言った。

「タバコは何本あるの？」

Yさんがきいてきた。

「三、四本」

「一本でどのくらいもつの？」

「四分・・・もたして五分かな」

「すると、十五分から二十分は火種があるわけだ。最初の一すりをしくじらなければね」
Kさんがそう言った。僕はタバコを高校で留年してから覚えたのだが、いつも吸うたびにやめよう、やめようと思っていた。そのタバコがこんなところで役に立つとは・・・。

「アンタの前が平らだから、そこで火を燃やそう」

KさんがYさんに言った。三人はYさんの中にはさんで座っていたのだ。

「アンタは枯れ葉を集めてくれ。Oチャン、Oチャンは太い枝を集めてくれる？オレは小枝を集めるからさ。まず太い枝を二本、間隔をあけて並べる。そこが風の通り道なんだ。そこに新聞紙を丸めて火をつける。オイ、新聞紙あったらどう」

Kさんがそう言う

「ハイ」

とYさんが答えて、リュックをガサガサいわせて新聞紙を取り出した。

「火がついたら、用意してあった枯れ葉や小枝をのせるんだ。それに火がつけば、あとはもうシメたもんさ。まきをくべていけばいいんだからね。じゃあ、始めようか。レッツゴー」

僕はKさんの説明した設計図がよく飲みこめなかったが、それでも割り当てられた枯れ

枝を集めるために体を動かした。

それがまたタイヘンだったのだ。何しろ目の前に手をかざしても見えない闇なので、どこに何があるのかまったく分からない。それどころかヘタをすると三人がバラバラになってしまう危険性があった。それでYさんはその場にとどまって、僕とKさんが時々Yさんと声をかけ合ってお互いの位置を確認することにした。僕は四つんばいになってソロリ、ソロリと進んで行った。枯れ枝といってもナカナカ落ちてなかった。それでも細いのは何本か手にさわった。念のため、それも手もとに引き寄せておいた。とうとう一本、二の腕ぐらいの太さの枝をさがしあてた。これならマキにしても十分だ。僕は暗い中で枯れ枝の一方の端を持つと、適当に見当をつけて足を踏み下ろした。するとその枝は、アッサリと折れてしまった。向こうではカサコソという音をたてて、Yさんが落ち葉を集めていた。ポキポキというのは、Kさんが小枝を折ってる音だろう。

「Oチャン、どうだい？いいの見つかったかい」

Kさんが声をかけてきた。僕は

「ウン、手ごろなのが手に入ったツス」

と答えた。

「ラッキー」

Kさんがオドケて言った。

こんなことをするのは中学の林間キャンプの時以来だった。僕はマキにした枯れ枝を持って、またソロソロとYさんの方に戻った。Yさんに二本、特別に太いのを手渡すと、Yさんが前の地面に並べたようだった。

「これでいいかしら？」

YさんがKさんにきくと、Kさんが

「ドレドレ」

と言つて、手さぐりをして確かめているようだった。

「オツケー。じゃあ、Oチャン、点火式といこうか」

「風で吹き消されないようにネ」

とYさんが言つて、丸めた新聞紙を差し出したようだった。僕はデイパックからマッチとタバコを取り出すと、タバコを一本くわえた。マッチをすろうとしたが、失敗しないか不安だった。

「Oチャン、風に消されないように、もつと私に近づいてやったら。私が風よけになつてやるから」

Yさんがそう言つてくれたので、僕はYさんの胸に頭を押しつけるようになつた。

がみこみ、窮屈な姿勢でマッチをすろうとした。Yさんの胸からはかすかに女の匂いがした。その時

「あ、「雨だ」

Kさんが言った。僕はあわてて体を起こすと、すぐにマッチとタバコを濡れないようにディパックにしまった。ポツリ、ポツリと、雨が木の葉にあたる音がしてきた。

「Oチャン、しばらくようすを見ようか」

Kさんが言った。どうやら雨は止むけはいはなかった。そのうちサーツと雨足が激しくなり、上からポタポタしずくが落ちてきた。

「Oチャン、カッパある？」

Yさんがリュックをゴソゴソいわせながらきいてきた。僕は念のために、レインウェアの上だけは用意してあった。

「そう、良かったわねえ。私たちも、Y島は雨が多いとこだつて言うから、ビニールカッパを持ってきたの」

雨は止みそうになかった。レインウェアのフードからもしずくが落ちてきた。三人とも、念のため集めた枯れ枝や落ち葉は濡れないように足もとにたくしこんでおいた。

「雨だけはイヤねえー」

Yさんが憂うつそうにつぶやいた。本当にそうだった。雨に打たれて一晚山の中で過ごすことほど気がメイることはない。ナントカ雨よ、上がれ、上がれ、と僕は心の中で念じていた。すると僕の祈りが天に通じたのだろうか。数分で雨が止んでしまったのだ。

「あれ、止んだねえ」

Kさんが上を見ながら言ったようだった。黒々とした樹海の上には、夜空が小さくのぞいていた。

「どう、新聞紙ぬれてないかい」

「だいじょうぶ、さつきリュックに入れておいたから」

「この程度なら、枯れ葉や枯れ枝にも火がつくだろう。Oチャン、またやろうか」

Kさんにうながされて僕がタバコとマッチを取り出した時、不思議なことにまた雨が降り始めた。そして同じことがもう一度続いたのだった。

「何だか、モッチョムが火を焚たくな、って言ってるみたい」

Yさんがポツンとつぶやいた。僕もKさんもその言葉に納得してしまった。そうとしか考えられなかったのだ。そして三人が火を焚くのをあきらめてからは、雨は一滴も落ちてこなかった……。

三人で体を寄せ合ってしばらく黙っていた。樹海の方こうに遠くポツンと二つ見えるの

は、街灯の明かりらしかった。時々背後のしげみで、ガサツ、ゴソツ、と音がした。夜行性の小動物がハイカイしてるのだろう。こんなところに一人でいたらキツト気が違ってしまうにちがいない、と僕は思った。となりのYさんから体の温もりが伝わってきた。この時ほど人間の体の暖かさを感じたことはなかった。

「おなかすいたわねえー。何か、食べる？」

とYさんが言って、リュックをゴソゴソいわせた。

「昼の残り物だけど……。ゆで卵と、ナムさんの黒砂糖がまだあるわ」

僕はゆで卵を一つと黒砂糖を片手にいっぱいもらって食べた。ウマかった。

「今、何時ごろかしら」

食べながらYさんが言った。

「九時ごろじゃないかなあ」

Kさんも口をモグモグさせながら言った。僕もそんなもんだろうと思つたが、実際はもう真夜中になっていたので。そもそも僕の時計が止まったのがモッチョムから降りる時ではなく、着いたころだったのだ。そして「友の樹」から三人でナムさんたちをさがし始めた時には、すでに夕メシ時になっていたのであった……。

「みんなに心配をかけるのだけは、やねえ」

Yさんがシミジミとした口調で言った。

「そうだね」

Kさんもうなずいた。

「みんなどうしてるかナー」

僕は二人にきいてみた。

「ほかの人たちはモツチョムに来たことを知ってるんスか？」

「ああ。けきロビーでNさんに会った時—Nさんっていうのはワークシヨップの主催者の人—言っておいたよ。『今日はモツチョムに登るのでワークシヨップはサボります』って」

「みんな、私たちが戻ってないことに気づいたらどうするかナー」

「案外ノンビリかまえてんじやないの」

Kさんがチャカして答えた。

「でも子ども連れよ」

「まंनीち、ミドリたちが先に戻ってなければ・・・心配するだろうなあ。でもナムさんたちは、ダイジョウブ、きつと降りてるさ。オレ達三人だけなら放っておくんじやないの。こんな街から見える山で道に迷ったって—」

「でも待つ身にとっては、ツライものよ」

Yさんがポツンと言った。

「それはそうだね。イロイロ最悪のことを考えちゃうだろうなあ。Oチャンの聞いてきた転落事故のこともあるし……」

待つ身にとってはか、と僕は思った。これまではずっとオフクロとオヤジを待たせてきたようなものだ。でもそれは、僕にはどうにもならない自分の力を越えたものにホンロウされていたのだ……。

Kさんがその場の雰囲気盛り上げようとするかのように

「オレ達のショーベンがいけなかったのかなあ。モツチョムの割れ目のとこでオレとOチャンが連れションやつて……。それでモツチョムの怒りにふれたんじゃないかなあ」と冗談めかして言った。正直なところ、僕もそのことは気になっていたのだ。子どものころ、ミミズに小便をひっかけるとオチンチンの先が曲がる、と言われたことはあるが。「アラ、そんなことはないんじゃないの。私はそれより、何だかモツチョムが、私たちに教えようとしているように思えるの」

「数えるって、何を？」

「よく分からないけど……でもできすぎてると思わない？ミドリだけ先に帰して私たち二人を残して……それにあの雨の降り方……」

「確かにね」

Kさんもタメ息をついた。僕にはよく分からなかった。ハイキングがてら登った山でもや「遭難」しようとは思ってもみなかったのだ。まだキツネにつままれたような気持ちだった。

「Oチャン、若月さんとナムさんを知ってるようだったけど、いつ二人に会ってたの？」前から気になっていたことをたずねるような口調で、Yさんがきいてきた。僕はきのうの午後、ミドリちゃんを連れて海へ降りて行った時に二人に会った、と答えた。

「二人いつしょ？」

「いや、別々ツス」

「あの二人はワークショップにゼンゼン出てこないね。何やってんのかな」横からKさんが口をはさんだ。

「Oチャン、ナムさんが高校の先生だっていうのは知ってた？」

Yさんがきいてきた。

「ウン」

と僕はうなずいた。

「それで・・・Oチャンは、高校生？」

「いや、中退ッス」

何のわだかまりもなく僕は答えていた。

「そう」

Yさんはそのまま黙りこんでしまった。何かを考えているようだった。

「Oちゃん、私も教師だったの。もっともナムさんとは違って、中学だったけど——」
明らかに僕に顔を向けてYさんがしゃべり始めた。長くなりそうな予感がした。

「おととしの三月までね、B県で勤めていたの」

B県というのは、僕が住んでるA県のとりの県だった。

「ナムさんとはそこで知り合ったのよ。今から三年前——いや、四年になるかしら。やっぱり三年前だわ。組合の教研集会でね——教研っていうのは教師たちの勉強会のこと。ホラ、テレビでよく右翼が押しかけるのを映すでしょ。あれは全国規模のものだけど、私はB県の教研集会でナムさんに会ったのよ。」

生活指導っていう分科会があつてそこに顔を出したら、ナムさんが発表者だったの。レポートターって言うんだけど。ナムさんの発表はね、彼が担任をしていたクラスの子どもを追っかけたものだったわ。その子は入学した時からすぐく荒れてたの。タバコ、シンナー、万引き、はては暴走族に入つて暴走行為で捕まったりしてね。何回も何回も家庭キンシン

を受けてたんだけど、最後に―いつだったかな、確か二年生の秋だったと思うわ。授業中に教師を殴り倒しちゃったのよ。ナムさんは退学シヨブンを覚悟したって言うけど、職員会議でナムさんたちの弁護がきいたのかしら。何とか無期テイガクですんだのよ。でもその子はそのあとやめちゃったの。もう学校に出てこなかったのよ」

僕にも身がつまされるような話だった。特に「暴走行為」という言葉を聞いた時には、体がビクッと震えた。

「ナムさんは無期テイガクの時に、もう後がないと思って、一生けんめいだったようだよ。何回も家庭訪問して本人に会ったり、夜遅くまで家の人と話しこんだりしてね。その子のお父さんっていうのが、汲み取り屋さんだったの、バキュームカーで回る。確か中学しか出てなかったと思うわ。それで自分の仕事に誇りを持ってなかったのね。いつも子どもには『高校だけは卒業してもっといい仕事につけ』って言ってたらしいの。親の立場に立ってみたら、そうかもネ。でも、それがその子にはスゴイ負担だったのよ。親の期待に負けない、負けまいとして逆に荒れていったのね。本当は心やさしい子だったと思うわ。経済的にもシンドイ家庭で、親が苦勞してるのを見て育って、子どもにだけ夢をたくして生きてきた……。それが分かるから、親の愛情がハダミにしみて分かるから、なおのこと反発したくなっただんだと思うわ……。人間って、ヘソ曲がりな生き物でしょ。愛情がない

時はいつも愛情に飢えているのに、愛情が大きすぎるとかえってそれに反発したくなるものなのね・・・」

僕は胸が苦しくなってきた。家庭の事情は違っていたが、まるで僕のことを言われているようだったのだ・・・。

「ナムさんは少しあせつてみたい。一年の時から担任を持つて、くり返しくり返しその子に語りかけても決して心を開こうとしなかったからね。無期テイガクの時も彼に『逃げるだけなら誰にもできる。でも、どうして苦労してオマエを育ててくれた親の心を分かってやれないんだ。オマエのオヤジさんの生きざまを見るんだ。オマエにはいい手本じゃないか。オマエもオヤジさんのように逃げないで自分の困難なことにブツカッテ行くんだ』って言い続けたらしいんだけど、彼は黙つてうつ向いてるだけで耳をかそうとはしなかったみたい。それでナムさんは思いあまって彼のことをクラスに話したのよね。ロングホームの時間に、『彼を支えてやれるのはオマエ達しかない。どうかみんなで力になってやってくれ』ってね。でもそれが逆効果だったみたい。クラスの仲間からそのことを聞いた彼は、ナムさんには決して反発したことがなかったのにその夜ナムさんに電話をかけてきて『テメー、なんでオレのことをクラスの連中にしゃべったんだヨ』ってどなり散らしたそうよ、涙声で。その後彼は二度と学校に姿を現さなかった・・・。ナムさんの発表はね、『私

の実践は彼を学校につなぎとめることができずに終わってしまったが、これからも一人の人間として彼とつき合っていきたい』っていう言葉で結ばれていたの」

そこまで話すとYさんは少し間まを置いた。僕はY島で会ったナムさんと、Yさんの話に出てくるナムさんとがどうしてもイメージが一致しなかった。僕の知ってるナムさんは、気弱でヘナヘナしている教師だったのだ。Kさんはひとことも口をはさまずに聞いていた。Yさんがまた話を続けた。

「ナムさんの発表があつた教研集会の夜、会場で二次会があつてね、私は酔つた勢いも手伝つてナムさんからんじゃつたの。『あなたは、これからも一人の人間として彼とつき合っていきたい』なんてカッコイイこと言ってるけど、私は誓つて言うわ。あなたはもう二度とカレとは会わないわよ。だって、あなたが求めてるのは、あなたの手のひらの上でオドる人間だけなんだもん。どんなに苦勞をかけられたってね、あなたにはメじやないわ。だって、こうやつてこういうトコで発表して、あなたの自己満足を満たすことができるんだもんね——ずいぶんヒドイことを言ったものね」

僕はモツチヨムの頂上で二人がかわしていた会話の内容を理解した。そういうことだったのか。すると、ナムさんの心の中で育つていったタネというのは……。

「私はもつとヒドイことを言つちやつたわ。今から思うと自分でも恥かしいんだけど……」

酔ってたのね。『私はあなたにヒントをあげるわ』なんてゴーマンに言ったのよ。『一度でいいから生徒から肩に手を置かれる教師になってみなさい。生徒から抱きつかれてね。あなたにとって致命的なのは、生徒があなたに心を開いてないのに気づいてないことね。どんなにあなたがコトバで言ったって、子どもたちはそんなもの聞いてやしない。あなたの体を見ているのよ。あなたの体が抱きとめてくれるかどうかを……。あなたは、オトナの私から見ても近よりがたい存在だわ。まるで体にヨロイを着てるみたい。そんな体だったら、子どもたちが背を向けて逃げて行くのもトーゼンだと思うけど』……。ナムさんはブゼンとしていたわ。だってナムさんのレポートは、教研集会でとっても評価されていたんだもの」

僕は頭痛がしてきた。何だかナムさんがとってもカワイソウになってきた。

「Oチャン、私がこんなことを言えるのもね、私自身が中学でナムさんと同じような過ちをくり返してきたからなの―あえて“過ち”と言うわ。中学は高校よりもっとシンドくてね、高校へ行けない子どもクラスに二、三人いるでしょ。その子たちが自暴自棄になってすぐく荒れるのよね……。そんな子どもたちに私は教師としての善意から、イロンナ「指導」を行ってきたわ。今から思えば、その子の心を踏みにじるようなことをね、ヘーキでやってきたの。押しつけがましい“善意”ほどイヤライシものはないわよね。」

例えば—そうねえ、さつき話したナムさんの実践報告で言えば、カレの家庭のことをクラスで話したこと。もちろんナムさんは「良かれ」と思ってたことだと思っけど、どうしてそんな人の心に土足で入るようなことができるのかしら、許されるのかしら。誰にだって人に隠しておきたいことってあるでしょう……。それに、誰だってシンドイことからは逃げたいわよね。『逃げる』っていうのが、どうしていけないことなのかしら。それもとつても人間的なことじゃないかしら。逃げずに立ち向かっていける、そんな強い人間ばかりじゃないわ……。

〇チャン、私はね、担任を持つてた一人の女の子に憎しみの目で見られたことがあんの。その子も、教師用語で言うところの「グズ」れてたわ。イロンナ「非行」に走って。私はその子に向かつてトクトクと説教してたのね。気がついたら、その子の目が怒りで燃え上がっていったのよ……。私は自分のしゃべってた言葉が、この子にとってはオアソビでしかなかったのよ……。一瞬で気づいちゃったのね……。それからよ、私が教師として崩れ始めたのは……。ナムさんに私があの時あんなに反発したのは、きつと自分の過去の姿を見てたからだと思っわ。ナムさんはビールの入ったグラスを手にしたままジツと聞いてたけれど、最後に『そんなこと言うなら、教師には何もできないじゃないですか』ってムツとした表情で言っただけれど……。そうね、本当のところ、ナンニモできないのかもネ……。ただ抱きと

める、善悪のどんな判断もしないでその子を受けとめてやる、抱きとつてやる・・・それくらいしか教師にはできないのかもネ・・・それがナムさんだけじゃなくて、私自身の課題でもあつたんだけど・・・。私にはそれができなくて、教師をやめてしまった・・・。今でもそのカゲを引きずつて、こんなとこまでやつて来てね・・・。

でも、ホント、驚いちゃつたわ。だって、三年ぶりにナムさんとこんなとこで会うんだもの。あのころのナムさんとは体つきまで変わっちゃつてね。ナムさんは中肉中背でひきしまった体をしてたのに。顔も自信に満ちあふれていて――」

「悩むと太るのかね」

それまで黙っていたKさんがジョーダンっぽく言うと、二人はおかしそうに笑つた。僕は笑わなかつた。

「よく、アンタの親がやめさせてくれたね」

笑いの余韻をただよわせながらKさんが言つた。

「教師を?・・・そうね・・・。Oチャン、私の親も教師だったの、二人とも。私は独りっ子で親の期待も強かつたわ。それがいつも重荷に感じててね・・・。父親はそれほどでもなかつたけど、女親は泣いて引き止めたわ・・・。でも、その後の方がもつとタイヘンだったのよ。だって、どこの馬の骨か分からないアナタと結婚して、百姓を始めるなんて言い

出したものだから」

「あの時はホント、おかしかったね。アンタのオヤジさんとオフクロさん、ホントに口がしまらなくなっちゃってさ。開いた口がふさがらないって」

二人は声を上げて笑った。僕は笑うどころではなかった。思わず僕は叫び声を上げていた。自分の苦しい胸の内ではなく、ナムさんの名前を口に出して……。

「ボ、ボクは、ナムさんが好きデス！」

二人は笑うのを止めて僕の方に顔を向けたようだった。僕は二人の視線を意識しながら、息せき切ってしゃべり出していた。もつとも話しながら僕の頭の中には、昼間モツチョムの頂上で握りメシを食べていたナムさんの後ろ姿が浮かんでいたのだ。座っているのではなく、おのことゴムまりのようにふくらんでいるその背中を、指でチョット押せば、コロコロと山の斜面をころげ落ちて、太平洋にトポン、と落ちてしまうような、どこか寂しげで頼りないナムさんの存在を……。

「オレは高校を留年して、二年でやめちゃったんデス。一年を二回くり返して。担任は二人ともどーしようもないヤローで、最初のヤツは、オレがイロイロあつて学校へ行かなくなつても二、三度電話をよこしただけで、家庭訪問なんか一度も来なかつたス。通知票は郵便で送ってきて。二人目のヤツもコイツに輪をかけてひでえヤローで、オレが始業式

に心を入れかえて学校に行ったのに、いきなりオレの前に退学届の用紙を出して『いつでもやめていいんだぞ』って又カシヤがったんだ。オレは、オレは、せつかくやり直す気でいたのに、あのヤローの一言で、何もかもダメにされた。そんなこと言われたら、誰だつてイヤになつてやめちゃうわないっすか？」

僕の体はあの時の屈辱を思い出してブルブル震えていた。僕は目の前の退学届の用紙をひつつかんで丸めてクシヤクシヤにしてやりたかったが、できなかつた。オフクロが黙つてハンドバックにしまった。そしてその用紙にハンをついて、僕は二十四日に学校へ持つて行つたのだった……。

「フン」

とKさんが鼻息をついた。

「そういうヤツって、殴らないとダメだね」

「殴られても分からない人が多いけど」

Yさんがタメ息まじりに言った。僕はもう一人、中学三年の時の担任の顔も思い浮かべていたが、あえてそれは言わなかつた。

「そういう時の子どもたちって、口では『センコー、ウルセーナー、コノヤロー』とか何とか言ってるけれど、本当は手をさしのべてほしいのよね。それが恥ずかしくて言葉に

出せないから、心とは反対の行動をとってしまうのよね」

僕は涙がドツとあふれてきた。Yさんの胸に顔を埋めて大声で泣き出した。衝動を必死で押さえていた。僕の体の震えが二人に伝わったのだろうか。二人とも黙ってしまった。しばらくして僕の衝動も静かになって、僕は手で涙をぬぐった。

「Oチャン、お父さん何してんの？」

Yさんがきいてきた。

「銀行員」

「どこの？」

「〇〇銀行の支店長代理」

「そう、タイヘンね」

僕はチョット、カクツときてしまった。フツ、こういう時は「そうですか。すごいです。すねえ」という言葉が返ってくるのだが。〇〇銀行は都銀の中でもトップクラスだった。そしてオヤジはその都心にある支店に勤めるいわゆる「エリート」だったのだ。僕は急にオヤジのことをしゃべりたくなかった。まるで僕の涙がまだ出きらずに体の中に残っていて、それがコトバになったように……。

「オレのオヤジも、オレと同じように『入社拒否』になったことがあるんす——」

僕は話し出していた。

あれは僕が小学校六年の時だった。三月、異動の内示があつてオヤジは支店長代理に内定した。まだ三十代後半だったから異例の昇進だったのだろう。それからだ、オヤジが会社を休み始めたのは。朝、出がけに腹が痛くなつて会社を休んだ。ムリして家を出ても、途中で帰つてきた。ゲリがひどくて何回も何回もトイレへ行くので、電車になんか乗つていられなかつたのだ。胃薬を飲んでも直らないので、病院で検査を受けた。神経性胃炎と診断された。下旬に入ると、とうとう寝こんでしまった。休みが続いた。異動は四月一日付だったが、その前に残務整理なんかもあつたはずだ。オフクロはその間ずっと父をシツタゲキレイしていた。

「アナタ、そんなことでどうするの！ 気の持ちよう一つじゃない。恥ずかしくないの、そんな弱気になつて。男として部下を持つて指示を与えていく、こんなスバラシイことはないじゃないの！」

それに対して父は、ゲリでゴロゴロいう腹を押さえて、青ざめた顔で弱々しく反論していた。「オレにはそんな力量はないんだ。人の上に立つような人間じゃないんだ。オレは与えられたことをコツコツと仕上げていくタイプなんだ。それで十分なんだ・・・」

その間、僕たち兄弟はハラハラしながら父のようすを見守っていた。それまでの父は僕

たちにとつて、休みになるといっしょに遊んでくれる明るくてやさしいパパだったのだ。僕はこんなに弱音を吐いて痛ましい姿をさらしている父を見たことがなかった。それだけにシヨックは大きかった。

四月まであと一週間という時になって、とうとう母は親戚の人間を呼び集めて父をセツトクさせた。僕も一度か二度しか会ったことのないオジやオバが家に来て、父の寝室に入つて行つた。一日中話し声が續いていた。春休みに入つていたので僕は家において、何度も寝室のドアの前に行つて聞き耳を立てていた。四月からは僕も中学生で、イロイロ中学の生活を考えると胸がワクワクするようだったが、それも父のうめき声を聞くと、いっぺんにしぼんでしまった。

翌日から父は会社に行き始めた。重い足を引きずるようにして、うつ向きかげんで玄関から出て行つた。もう会社を休むようなことはなくなった。オフクロの「説得作戦」が効をそうしたのだろうか？父の出社拒否も、一時的なハシカのようなものだったのだろうか？それは分からない。オヤジは代わりに胃薬と親しくなっていた。いつも胃薬を持ち歩いていて、三度三度の食事の時以外でも、胃が痛み出したら飲んでた。支店長代理になつてからは、前にもまして夜の帰りが遅くなつた。イロイロつき合いや接待があるのだろう。休みの日も家にいることはめつたになく、会社の用事で出かけていた。そんな生活がもう

五年も続いていたのだ――

「みんなそうやって体をボロボロにしていくのよネ」

僕の話聞き終わったYさんが、しばらく間まを置いてから言った。

「ナンボの金と引きかえにね」

Kさんもポツリと言った。

僕は、今夜も疲れた体を引きずって家に帰ってるだろうオヤジの顔を思い浮かべた。オヤジがとてもフ、ビン、に感じた。

「悩むのはとっても人間的なことだと思うけど……」

「そうだね」

Yさんが言うと、Kさんもあいづちを打った。

「そんなに苦しければ、やめればいいのにね」

「やめれば」という言葉を僕は今日Yさんから二度聞いた。初めての時はその言葉を耳にしてビクッ、としたものだが、今は、さきほどのYさんの体験談を聞いたためか、そんな感じはしなかった。オヤジもイヤならやめればいいんだ、と僕も思った。

「若月さんのダンナも、Oチャンのオヤジさんのようなモーレッツ社員だったなあ」
Kさんが思い出すように言った。

「この人は前の会社で、若月さんのダンナと同僚だったのよ」

Yさんが僕に補足説明をしてくれた。

「ボクは大学を出るとね」

「何学部だったんすか？」

胸のつかえが下りたように、僕はいつもの口調できいていた。

「経済。ゼンゼン勉強しなかったけど四年で卒業して、すぐ農機具の販売会社に勤めたんだよ。そこで机がとなりだったのが若月さん、ボクのセンパイでね。イロイロ教えてもらったんだ。経済出て農機具っていうのは、チョット結びつかないと思うけど」

Kさんは笑って続けた。

「ボクの中でも結びつかなかったんだよ。アタマ悪かったから成績も悪くて、イイところには就職できなくてね。ただ、農機具販売会社って、地方回りが多いんだよね、営業になると。ボクは木が好きだったから—そんな専門的にじゃなくて、ただ見るのが好きなんだ—地方の農村回りのついでに、その土地のいろんな木が見られるんじゃないかって、そんなカイルイ気持ちで入ったんだよ。

入ってみると、確かに希望したとおりに地方の営業所回りをやらされて、若月さんの後をくつついて農家にセールスに出かけるようになった。若月さんはホントにやり手だった

ね。販売実績でもダントツで、エネルギーのかたまりみたいな人だったよ。何しろ昼メシも車の中で食べてるんだもん、ホカ弁を。ボクに車を運転させて。それと、コトバがたくみだったね。こう、人の心をつかむっていうのかな、その気にさせちゃうんだ。ベラベラ、オベンチャラを言うような人じゃなかったけどね。若月さんはボクの「新人教育係」だったんだよ。とは言っても、ボクは一年でやめちゃったから会社のもくろみは失敗しちゃったけれど。

はじめは楽しくてね。何しろ若月さんといっしょだからよく売れて、アア、これでオレも一人前の社会人になっていくんだな、なんてエツに入ってたもんさ。でも、ダンダン、窮屈に感じてきたんだよ。半年たつころからかなあ。仕事の内容も分かってきて、会社の内実も見えてくる……。そうしたら、勤めてるのが苦しくなってきたんだよ。仕事を続けていくのが……。ボクの仕事を見る目が変わっちゃったんだ、って言うより、農業に対して本当に、目が開かされたっていうかな。

Oチャン、ボクは都会の生まれでね、子どものころは田んぼも見たことがなかったんだよ。だから小さいころから農業には、こう、何ていうかな、あこがれのようなものを持ってたんだ。子どもが土いじりに感じるようなものをね。でも勤め始めて、そんな「幻想」はモロクも崩れてしまった。もうビジネスになってるんだね、日本で農業は。いかにして

最小の投資で最大の利潤を上げるか、それしかないんだ。だから良くないと分かっても農薬や化学肥料は使うし、人手に頼るよりは機械を入れてコストダウンをはかる——本当は必要のないモノをね。ボクはそんな仕事が耐えられなくなってやめちゃったんだ。

Oチャン、ボクは農業っていうのがはたしてビジネスになるのかどうか疑問なんだ。農業っていうのは本来、土を耕し、大地から与えられる恵みを食べて生きて行く。自分で食べきれない分は人にあげてね。そんな自然の摂理に身をゆだねた営みじゃないかなって思うんだけど、今はもう経済効率だけなんだね。ゼニカネしかないから、土は農薬や化学肥料で死んで行く。百姓は体を悪くするし、できたものは農薬なんかで汚染されてるから体に良くない——食べものっていうのは本当は生命いのちの力をはぐくむものだと思うんだけど、今は逆に生きる力を奮ってしまっている……。ボクは悲しかったな、そんな現実をイヤというほど見せられて。それで自分から百姓になろうって思ったんだよ。どんなに笑われても、クワで耕して、農薬や化学肥料は使わない。土と対話しながら、自然の中で生かして生かされる、そんな自然体の暮らしができたらいいなー、って……。

Oチャン、信じられないかもしれないけど、畑の野菜も毎日心をこめて話しかけてやると、いいのができるんだよ」

「それはそうね」

Yさんもあいつちを打った。僕にはチョット信じられない話だった。それに僕は畑や農業のことをほとんど知らなかったのだ。土をいじった経験もなかった。

「この人とはね、私が教師をやめる前、ある有機農業研究会のワークショップで出会ったの」「ボクラのナレソメだね」

Kさんがチャカした。

「二泊二日で東京近郊の有機農業を実践している農家に泊まらせてもらったの。そこで話を聞いたり、畑を見学したり。私は別段それまでは農業とか畑にそんなに関心は持ってなかったの。でも、食べる物には関心があったわ。ホラ、このごろは農薬や添加物が使われているモノばかりで、オチオチ店で買って食べられないでしょう」

「やっぱり自分で作って食べるのがイチバンだね。百姓の強みはそこだな。そんなこと言っても、ボクラの畑ではまだイモ類とタマネギぐらいしか作れないけどね」

Kさんがそう言って笑った。二人の話を聞いていると、何だか畑仕事が楽しく思えてきて僕も一度クワを握ってみたくなった。

「ああ、思い出したわ。そのワークショップに行ったのは、教研集会でナムさんと会った後だったの……。あの時なんで私があんなにナムさんに食ってかかったのか、今思い返してみると、私自身も教師をやめたい、やめたいと思ってても、やめた後の展望が何も

なかったから、そんな自分にイラ立っていたのね……。有機農業研究会のワークショップでこの人と知り合って、イロイロ農業のこととか畑のこととか話してみても、ああ、これなら私にもできるかなって、初めて感じたんだもの」

「とりあえずやめてから何かをさがす、っていう人もいるよね」

Kさんが口をはさんだ。

「私、そういう人って、ホントにうらやましいわ。今までの私って、石橋をたたいて生きてきたようなものだもの。あすはどうなる、あさっては、って……。そうやって育てられてきちゃったのよね」

Yさんが寂しそうに笑った。

「畑はあしたのことは、まったくお天気まかせだな」

「今日のようにね」

Kさんが言うのとYさんが答えて、二人で笑った。僕はKさんの言葉を考えていた。やめてから展望をさがす——その言葉は僕を励ましてくれた。僕も笑って夜空を見上げた。この分ならナントカ朝までもってくれるだろう。

「さっきOチャンの話聞いてたら、急に思い出したことがあってね」

Kさんが言い出した。

「これはアンタにもまだ言っていなかったことじゃないかな」

「ナーニ」

「若月さんのダンナがね、一度だけボクに心を開いたことがあるんだよ。彼の胸の内をポロツ、とね。若月さんとは飲んででも全然プライベートなこととは言わない人だったからね。あれは秋に、東北のM県を二人で回ってた時だと思うな。いつものように夜二人で飲みに行っただ。若月さんが駅前に行きつけの飲み屋があるからって言ってね。ママが一人やってる小料理屋だった。そこで飲んでたら――いつものように仕事の話とかバカ話をしてたんだけど――若月さんが急に『女房がこのごろノイローゼ気味でね』って言い出したんだよ。ボクはビックリしちゃった。だって酒の席で若月さんがそんなことを言うのは初めてだったからね。『下のチビが重い病気にかかってね』って言うんだ。それから胸ポケットからブ厚い手帳を取り出すと、中から写真を一枚出してボクに見せてくれた。家族のスナップ写真だった。ボクは夏、会社の盆踊り大会で若月さんのオクサンと一度会って顔だけは覚えていた。子どもは二人だったね。上の子はダンナが手を引いて、下の子は若月さんが抱いてたな」

「下の子って、いくつくらいさ？」

「Yさんがぎいた。」

「ちょうどミドリくらいだったよ。でも驚いたなあ。こんなところあの若月さんと会ったから。彼女、確か主婦で、この手のことには首つつこんでなかったと思うけど」

「ホントね、ここでは思いがけない人と再会するわね」

僕は胸が高鳴ってきた。言うべきかどうか迷ったが、コトバが口をついて出ていた。

「きのう若月さんと会った時、若月さん、子どもは交通事故で死んだって言ってたスよ。ミドリちゃんくらいの時に」

「エ?!」

K & Yさんが二人同時に声を上げた。僕は若月さんが岩の上に指文字で書いた数字を二人に読み上げていた。

「198×年×月×日か・・・」

Kさんがタメ息をついた。

「ミドリが種づいたころだね」

「そうね・・・ますます不思議なめぐり合わせだわ・・・」

Yさんが声をひそめて言った。しばらく沈黙が続いた。

「さつき、モッチョムの頂上で、蝶が飛んでたわね」

Yさんが心なしか思いつめたような口調で言った。

「ウン、ボクラをジッと見てたね」

「蝶は霊って言うのよね、人の魂・・・」

Yさんの言葉を聞いて僕は蝶が三匹いたのを思い出していた。一匹がKでもう一匹が死んだ若月さんの子どもの魂だとすると、あとの一匹は・・・その時フイに僕は、登り道で若月さんが踏みつけた死んだ蛇のことを思い出した。あの場所が、今僕が尻をつけているココのような気がして、思わず僕は腰を浮かしていた。若月さんが死んだ蛇を踏んだりするからこんなことになっちゃったんだ！そんな怒りのようなものが僕の胸に湧いてきた。僕は口の中がニガニガしくなつて、ペツ、とツバを吐いた。その時、風が吹き抜けて森がザワザワいった。僕は顔を上げた。

「蝶だー！」

「エ、蝶?!夜だから、蛾じゃないかい?」

Kさんの言葉をシリメに僕は立ち上がっていた。僕は見たのだ。樹海の上を、光る蝶がモツチョムの方に飛んで行くのを。僕はかけ出していた。暗い中を、道をそらんじているように樹にもあたらず、イツキにかけ抜けて尾根に出た。光る蝶は、ちょうどモツチョムの岩の上にさしかかっていた。そして、僕とKさんがはだしでよじ登ったあの大きな割れ目の中に、吸いこまれるように消えて行った・・・。

その後の光景は、目を疑うばかりだった。岩の割れ目から、ノレンをくぐるようにして光る人間が出てきたのだ。その人間は、尾根道の笹の上を、スーッと滑るように僕の方へ向かって来た。

「アア!!」

背後でK & Yさんの声がした。今は二人にもその光る姿が見えたのだろう。それは若月さんだった！若月さんが子どもを抱きかかえていたのだ。片方の胸ははだけて、子どもに乳を与えていた。子どもの顔は見えなかったが、乳を飲む子を見つめる若月さんの顔は至福に満ちていた。その時、まるい光の輪が若月さんにあたって光る像は一瞬のうちに消えてしまった。

「オーイ」

「オーイ」

という声が聞こえて振り向くと、森の中にチラテラ懐中電灯の明かりが見えた。

「オーイ、こっちだゾー」

反射的にKさんが叫んでいた。Yさんも声を出した。僕は言葉を失ってその場に立ちつくしていた。救助されたのだった。

登山靴にヘッドランプ、ザックをしょった重装備の男が五人、僕たちの前に立っていた。

「ケガはないですか」

リーダー格の人が丁寧な口調できいてきた。

「はい、してません」

Yさんがそう答えると、「どうも御迷惑をおかけしました」と言つてフカブカと頭を下げた。僕とKさんもYさんにならつて礼を言つた。リーダー格の人が僕たち三人の名前をきいて氏名を確認した。後ろで一人、トランシーバーを持つてる人が「ただいま三名ブジ救助しました」と連絡していた。

「ケガがなくてとにかくよかつた。ここで道に迷つたんですか？」

リーダー格の人がきくと、Kさんが答えた。

「一度『聖なる樹の友』まで降りたんですけど、そこでほかの二人とはぐれちゃつて、もう一度頂上まで戻ろうとして道に迷っちゃつたんです。ナントカここまで脱け出したら、トツプリと日が暮れて動けなくなつちゃつてー」

「道に迷つたらへたに動かないのが鉄則だからナ。登山道にジツとしてて正解だったよ」別の男が言つた。

「あの、ほかの二人、子どもを入れると三人ですけど、ブジに山を下りてるでしょうか」Yさんがおすおすとたずねた。

「三人？」

リーダー格の人が首をかしげて言った。

「捜索願が出たのは、あなたたち三人のほか、女性と子どもさんだけです。二人は先ほど海岸でブジ救助されたという連絡が入っています」

「海岸で?!」

思わず三人とも声を上げていた。若月さんとミドリちゃんはどうして海岸なんかで救助されたのだろうか？そしてナムさんはなぜ一人、別行動だったのか？そんな疑問が僕の頭の中をグルグル回っていた。K & Yさんも同じようだった。救助隊から渡された懐中電灯を持って山を下り始めた。最後にもう一度振り返ると、僕たち三人が座っていた所には枯れ枝と枯れ葉が散乱していた。

一、二度小休止して大滝の展望台まで降りると、パトカーが二台とまっていた。僕たち三人は懐中電灯を返すと、救助隊の人たちにあらためて礼を言った。パトカーで宿舎まで送ってくれるということだった。僕は正直言つてパトカーに乗るのはイヤだったが、そんなことも言つてられなかった。車の中では静かにしていた。

宿に着くと、玄関から何人かの人が飛び出してきて迎えてくれた。僕が見覚えのあるワーケーションの主催者のNさんの顔もあった。あとの人たちもワーケーション関係の人なの

だろう。肩を抱き合って「よかった」「よかった」と言っていた。KさんもYさんも「ありがとう」をくり返していた。皆、僕にも暖かい言葉をかけてくれた。僕はうれしかった。警察の人がNさんに「事情をききたいので、あす署まで来てくれないか」と言ってるのが聞こえた。Nさんは「どうも御迷惑をおかけしました」と頭を下げていた。

「どうしようか迷ったんだけどー」

ヒゲづらの男の人がK&Yさんに説明していた。後で分かったのだが、この人も主催者の一人のSさんだった。僕も近寄って行った。

「ミドリちゃんもいるっていうし、このー」

Sさんは僕の方を見た。僕は「大久保です」と名前を言った。

「大久保くんもいっしょだっていうから。雨もポツポツ降ってきたし。みんなで話し合
いを持って、宿のマナージャーとも相談して搜索願を出すことにしたんだよ」

僕はロビーの掛時計を見ていた。午前二時を回っていた。もうそんな時間になっていたのだ…。

「ミドリは？」

Yさんが、涙を浮かべている女の人のに向かってきいた。

「心配しないで。ブジよ。今は、あなたの部屋で若月さんと寝てるわ」

「若月さんが海岸でころんでケガをしたけど、たいしたことないカスリ傷さ」

Sさんが言った。

「ナムさん——南牟礼みなみむれさんは？」

Kさんがきいた時、ちょうどナムさんがロビーに現れて来た。ナムさんの方に目をやりながらSさんが

「彼は山を下りたあと、ずっとここにいたよ」

と言った。ナムさんは「よかった、よかった」と言いながら、みんなの手をとって肩を抱いた。顔は涙でクシャクシャになっていた。

「さあ、もう遅いから、みんな寝ようよ。あとはあした、あした」

警察との打ち合わせを終えたNさんがロビーに入ってきて言った。そこで解散ということになった。Nさんが最後、K&Yさんにあす警察へ行く時間を知らせていた。僕が部屋へ戻ろうとすると、ナムさんが近づいてきて

「Oチャン、キミの部屋をチョット貸してくれないか。K&Yさんと四人で話したいことがあるんだ」

と言った。無論OKだった。ほかにこの時間四人で使える部屋はなかったのだ。Yさんが「チョット、ミドリ見てくる」

と言って小走りにかけて行った。僕はナムさんとKさんと僕の部屋へ行き、中に入った。

部屋の中は散らかっていたので足でけって三人の座るスペースを確保し、まん中にチャブ台を置いた。Yさんが戻ってきた。Kさんが

「どうだった？」

ときくと

「ウン、グツスリ寝てたわ。オムツも替えていてくれたし」

と笑顔を作って答えた。Yさんは座るとリュックからゆで卵と黒砂糖のお菓子をとり出して「食べない？」

と言ってチャブ台に並べた。昼の残りだった。誰も手をつけなかった。ナムさんが口を開いた。「じゃあ、先にボクの方からカンタンに説明しとこうか——」

ナムさんの話によるとこういうことらしかった。ナムさんは先に一人で下山したのだ。「友の樹」の所で若月さんと待っていた時、どうしようもなく腹が痛み始めてたまらなくなった。後から三人が来て合流した時に迷惑をかけては悪いと思って、ナムさんは若月さんにミドリちゃんを預けて一人で山を下りた。ナントカふもとのバス停まで降りてバスを待っていた。ナムさんは時計を持っていなかったのだから時間分がなかったが、運よくすぐにバスがやって来た。乗客の中学生に時間をきくと、もう六時を回っていたので驚いてしまったそうだ。ナムさんは少し不安になった。というのもナムさんの乗ったバスが、終

バスの一本前だったのだ。

宿に帰ったナムさんはフロコに入って部屋で休んでいた。腹の痛みは少しずつつ良くなっていたが、食堂へは行かなかった。夕食を終えた同室者が帰ってきたので、K&Yさんとミドリちゃんを見かけなかったかきいてみた（「何しろ三人はイチバン目立つからねえ」とナムさんは笑って言った）。答えはノーだった。

それから皆夜のセツションに行ってしまった。ナムさんは部屋で寝ていた。九時過ぎに夜の部が終わって皆戻ってきた。ナムさんはまた三人を見なかったかどうかきいてみたが、ワークショップの行われた大広間では誰も姿を見ていなかった。ナムさんは胸さわぎがしてきた。すぐに起き上がってフロントに行き、K&Yさんのルームナンバーを教えてもらって行ってみた。ドアにはカギがかかっている誰もでなかった。またフロントに戻ってきいてみると、カギはフロントに預けたままだった。ナムさんは若月さんの部屋の番号をきいてそこへかけつけた。同室の女性に若月さんのことをきいてみると、朝山へ登ったきりでもまだ戻っていないみたいだ、と言う。ナムさんはまたフロントに戻って僕のルームナンバーを確認してみた。案の定、カギはフロントに預けられていた。五人が山から戻ってないのは明らかだった。ナムさんはすぐに主催者のNさん・Sさんの部屋へ行って事情を話した。実は夕方、ナムさんが一人先に宿舎に帰ってきた時、偶然ロビーでNさんに会っていたの

だ。その日もワークシヨップは近くの公民館を借りて行われていたのだが、そこから参加者が歩いて戻ってきた時にハチ合わせになったのだった。

「モッチョム、どうでしたか？」

ナムさんの姿を見てNさんはきいてきた。

「いやあ、中年太りの僕にはチョットきつくてねえ」

ナムさんはそう答えていたそう。Nさんはその時K&Yさんたちの姿が見えなかったので少し気がかりになっていたそう。

Nさん、Sさん、ナムさん、それに何人かの主要メンバーが集まって話し合いが持たれた。宿のマネージャーという人にも事情を話して相談に乗ってもらったそう。結論として捜索願を出すことになった。やはり宿の人の言っていた、去年の転落事故のケースが決定的だったようだ。ナムさん、Nさん、Sさんの三人でタクシーに乗って警察に行った。警察署に着いた時は十時を回っていた。ナムさんが主に状況を話した。警察からすぐに役場と消防団に連絡が行き、捜索隊が組織された。三人は捜索に同行しないで宿舎に戻った。Nさん、Sさんは他の何名かのメンバーとロビーで待機していたが、ナムさんは疲れていた。部屋に戻って横になったそう。しばらくしてナムさんは寝こんでしまった。夢を見たのだが、夢からハッと目が覚めた時、海岸の方から子どもの泣き声が聞こえてきたそう。

だ。もしや、と思つてナムさんは部屋の非常用懐中電灯をつかんで海へ走つて行つた。

断崖の上から下の岩場を照らすと、そこに若月さんとミドリちゃんを発見した。若月さんは岩場に倒れていて、ミドリちゃんはその上で寝ていたようだ。下まで降りて行つたナムさんは、若月さんを起こしてミドリちゃんを抱いた。二人ともケガはしてなかった。若月さんの手を引くようにして宿舎に戻ると、ロビーで待つていた人たちに二人のブジな姿を見せた。すぐにNさんが警察へ電話を入れた。時間は午前零時を回つていた。ロビーで若月さんは「手帳を破つて書き置きをして、先に下山してきた」とボンヤリ語つたようだ。「書き置きなんてそんなもの、どこにもなかったよねえ」

Kさんが少しムツとしたように言うと、Yさんと僕の顔を見た。二人ともうなずいた。「ボクラが、友の樹」まで降りて行つた時には誰もいなかった。それで迷つたけど、ナムさんたちが道に迷つたんじゃないかと思つてもう一度頂上まで戻つたんだ。そこで道に迷つちやつたんだ」

それからはKさんが僕たちの行動をかいつまんでナムさんに話した。時々Yさんが補足した。僕は黙つていた。野宿していた時三人で話したことは二人ともハシヨつた。ただYさんが、火を焚たこうとして三度も雨が降つてきたことを話すと、ナムさんはうなずきながら聞いていた。

「救助隊が来る前にね」

Yさんが僕の顔を見ながら言った。

「Oチャンが蝶を見たのよ、光る蝶を」

僕はうなずいた。「樹の上を」と言いかけて、僕はアツ、と思っってしまった。あの蝶は、若月さんが書き置きをしていったと言う『友の樹』の方角から飛んできたのだ……。

K&Yさんが言葉少なに光る若月さんの像を語った。僕の予想外だったことに、ナムさんはそれほど驚いたそぶりを見せなかったのだ。「フン、フン」と納得するようにうなずいていた。

二人の話を聞き終ったナムさんは出しぬけに

「ボクはジヌシなんだ」

と言った。僕はなぜナムさんがこんな時に地主だなんて言い出すのか分からなかったが、Yさんがクスツと笑ったので、痔主のことだと理解した。

「実はY島へ来てからずっと便秘でね、因ってただけど、それがよりによって、『友の樹』の所でみんなを待つてる時に出ちゃったんだよ。若月さんにはハライタって言ったけど、ノグソに行つてね、出血しちゃったんだ。便秘でウンコがたまつてたからナカナカ出てくれない。立ったりしゃがんだりそれこそ汗みどろでガンバツたら、やっと出てくれた

んだけど、イボ痔が切れてピューツと血が出ちゃったんだ。ティツシユをあててもポタポタたれてくるほどね。ボクはもうまっ青になって、お尻は痛むし、それで若月さんにミドリちゃんを託してホウホウのテイで山を下りたんだ。あ、もうだいじょうぶ、少し落ち着いたから(ナムさんは、痛そうに顔をしかめたYさんに向かって笑いながら言った)。でも、出そうで出ないっていうのは、人間にとつて一番苦しいことだね・・・。

まあ、そんなこんなで宿舎に帰るとすぐにフロに入ってから座薬を入れて、フトンでうつ伏せになって休んでたんだ。夕メシは宿舎の前の食料品店で買ってきたヨーグルトとバナナを食べた。少しでも便通を良くしようと思つてね。退屈だから本を開いたんだけどナカナカ集中できない——こんなとこまで本を持つてくるんだから、一種の職業病だね——夕食には帰つてないって聞いてたから、みんなのことが気になってね。それといつものヤツ、ドードーメグリ。辞めたい、辞めたらどうする、辞められないってヤツ。そんなこんなしてるうちに九時を過ぎて同室の人が帰ってきた。あとはさつき話したとおりさ。

ただ、警察までタクシーに乗つて行つたでしょう。向こうで固いイスに座らされてね。それでボクのお・ジ・ジがまた痛み出しちゃったんだよ。十一時過ぎに宿舎に戻つて、NさんやSさんには悪いと思つたけど、またうつ伏せになっているとウトウトしてしまった。そこで夢を見たんだけど・・・夢の事はあとで話そうか。

子どもの泣き声が入り、と夢から覚めたんだ。ボクはすぐに部屋を飛び出してた。どこへ行くべきかは夢の中で教えられてたんだ。あの時は痔の痛みも忘れていたね。宿舎の裏の林を抜けて断崖の上に立つと、下の岩場を懐中電灯で照らしてみた。拡散する光の輪の中にボーツと人の姿が浮かんだ。遠くて誰だか分からなかったけれど、若月さんじゃないかって、予感があったんだ。

「オーイ、オーイ」って叫んでもその人からは何の返事もなかった。海風にボクの声も飛んでいたしね。それで、せく心を一生けんめい押さえながらあの狭くて急な階段を降りて行ったんだよ。長かったなあ、本当に長く感じた。岩場をはうようにして歩いて行って、その人から数メートルの所まで来た。やはり若月さんだった。若月さんは岩場の上にあぐらをかいて座ってた。モッチョムの方を向いてね。膝の上に子どもを抱いてた。ボクはミドリちゃんだな、と思ったよ。

「若月さん！若月さん！」って声をかけたんだけど、彼女は振り向かない。その時ボクは彼女が小声で歌を歌っているのに気づいたんだ。彼女は子守り歌を歌ってた・・・。

ねんねーん

ころりーよ

おころりよー

ボクはゾツとしてしまった。だって考えてももらん。誰もいない夜の海辺で、ひとり子守り歌を歌ってるんだからね。僕は若月さんの前に回ってみた。彼女はうつろな目をして、膝の上で寝ているミドリちゃんをあやすような手つきをしながら子守り歌を口ずさんでいた。

「若月さん！若月さん！」

そこから声をかけても若月さんは気づかなかった。ボクはミドリちゃんのことを心配になつて手をとつてみた。手は暖かくて脈を打つてたから、正直なところホツとしたよ。額に手をあててみても熱があるようには思えなかった。ボクは若月さんは気がフレちゃつたんじゃないかつて一瞬思つたんだけど、彼女の両肩に手を置いて「若月さん！若月さん！」つて言いながら激しく揺さぶつてみた。彼女の頭がグラグラ揺れた。彼女はうつろな目でボクを見上げた。

『子どもに会つてきたの。死んだ子どもに』

彼女はそう言うのと泣き出してしまった。いや、あれは泣き笑いつていうのかな、泣いてるのか笑つてるのか分からなかった。それからミドリちゃんを抱くようにつつぷしてしまつたんだ。その時ボクは頭をグイ、と後ろに引かれるような気がしてモッチョムの方を振り向いた。ボクの錯覚か、頂上あたりで何か光るものがみえたんだ」

錯覚じゃない、と僕は思った。ナムさんが見たのは、救助隊のヘッドランプの明かりだつ

たのだ・・・。

「ボクは正直なところ、若月さんが宿舎まで戻れるかどうか不安だったけど、そのあとは別にそれほどでもなかった。ボクがミドリちゃんを抱き上げると、後ろから懐中電灯でボクの足もとを照らしてくれたからね。黙ってボクの後をついてきた。宿舎のロビーに入った時も、そこで待ってたNさんやSさんに、彼女が山を下りた状況をポツリ、ポツリと話してたからね。彼女がミドリちゃんの横で寝たいって言うんで、ボクはK&Yさんの部屋にいっしょに連れて行ってフトンを敷いた。ボクがミドリちゃんを寝かしつけて掛け布団をかけてやると、彼女が天井を見ながらポツリ、ポツリと、どうして山を下りたのか、話してくれたんだよ」

「そこだ！と僕は思った。若月さんが先に降りてこなければ、僕たちが道に迷うこともなく『遭難騒ぎ』も起こらなかったのだ。だが一方で、彼女がそうしてくれたことで『出会い』が生まれたのも、また事実なのだった・・・。

「若月さんが言うにはね、ボクが先に降りたあと『友の樹』の所で待っていた時に、ミドリちゃんが耳もとで『海に沈む夕陽が見たいの』ってささやいたのだそうだ。いいかい、これはあくまでも彼女の言葉だからね、誤解しないでよ。それで彼女は書き置きをして先に降りてきた・・・」

ミドリちゃんに言葉がしゃべれないのはみんな分かっていた。彼女が言えることといえば、オシッコを知らせる「シーシー」という合図だけだったのだ。

「ボクが思うに、彼女は最終のバスで帰ってきたんだろうなあ。とにかく、宿舎へ戻ると彼女は中へ入らずにそのまま海岸へ降りて行った。だから二人の姿を見た人間が誰もいなかったんだよ。彼女は岩場の上で海に沈む夕陽を見てただけど、『あんまり夕陽がきれいだった』もんで、ミドリちゃんを下に降ろすと岩の上で踊り始めたって言うんだな。我を忘れて舞っていたら、ミドリちゃんがいらない！あわててさがすと、ミドリちゃんは波打ち際へ行つて身を乗り出すようにして下を見てたつて言うんだな。波打ち際について、あそこは海面から数メートルも上のところだけだ。危ない！と思つてかけ出したら、彼女は岩につまずいてころんでしまった。そこで頭を打つて意識がなくなっちゃったんだそう。確かに、ボクが岩場で二人を発見した時、彼女のこめかみに血のにじんだ跡があったなあ。たいしたことないカスリ傷でいどだったけど――」

「メガネは？若月さんはメガネをかけてなかったんスか？」

僕は勢いこんできいていた。メガネをしてて岩場でころべば、ガラスが割れてタイヘンなことになる……。

「メガネ？……そう言えば、あの時はかけてなかったように思うなあ……そう、そうだ。」

確かかけてなかったよ。こめかみの傷は、メガネのフレームがあたるところだったもの……」
ナムさんは何かを思い出そうとしているようだった。

「あ、そうだ。宿舎に戻ってK&Yさんの部屋に入った時にね、あの時はしてたんだなあ。だって彼女が寝る時に、『メガネ、どこに置こうかしら』ってつぶやいたのを覚えているから……」
ナムさんは何かを考えこむふうだった。メガネとこめかみの傷、それは若月さんにしか分からないことだった。あるいは本人さえも……。

「それから彼女が天井を見ながら、岩場で意識を失った時のことを話してくれたんだよ。あい変わらず、ポツリ、ポツリとね。」

彼女が言うには、気がつく、岩場の上の断崖に立って死んだわが子を抱いていたそうだ。子どもは血まみれで、まだ温かった。遠く、海に陽が沈むところだった。夕陽に赤く染められて、彼女は子どもの死体を抱きながら

『この子といっしょに死ななければ。この子といっしょに死ななければ』

と心に念じると、崖の上から飛び降りたんだそうだ。彼女の体が岩にブチ当たる瞬間、彼女の体は滝に変わっていた。彼女の滝からは、夕陽に染められて虹が上がったそうだよ。虹はY島全体にかかった。彼女はその美しさにボーゼンとなっていた。その時、名前を呼ぶ声がして、ボクに揺さぶられて意識が戻ったって言うんだ」

僕たち三人は黙っていた。何も言うべき言葉がなかった。

「実際―」

ナムさんは僕を見ながら言った。

「Oちゃんは気づいたかなあ。きのう、ボクがOちゃんと会った岩場、あそこに若月さんは倒れてたんだけど、あそこからは滝が見えるんだよね」

僕は首を横に振った。実際、気づかなかったのだ。

「右手の、灯台のある岬の方に、崖の上から小さな滝が落ちてるんだ。Oちゃんと会った時、ボクはあの滝を見てたんだよ・・・」

ナムさんが言葉を切ると沈黙が訪れた。テーブルの上に置かれたゆで卵と黒砂糖菓子には、誰も手をつけなかった。

「フー―」

Kさんが長いタメ息をついて言った。

「よくミドリがブジだったねえ・・・」

「そうね・・・私たちみんな、モツチョムに守られてるんだわ」

Yさんがそう言うのと窓の方を見た。皆つられて首を回した。窓の向こうには、モツチョムが黒々とそびえていた。空が少し明るくなっていた。

「ボクは夢を見たんだ。二人をたすけに行く前に……」

ナムさんがそこまで言うのと、一呼吸置いて皆の顔を見回した。イタズラっぽい笑みを浮かべていた。

「ボクは夢の中で蝶になって飛んだんだよ……」

はじめから順を追って話すとね、ボクは一人で「聖なる樹」に行こうと歩いてたんだ。暗い中でよくわかんなかったけど、山道のように上り下りが続いていた。そのうち、ボクのまわりを巨大な足のようなものがとり巻いてるのに気がついたんだ。巨人のスネのようなものがね。暗くてよくわかんないんだけど、その足はボクが歩くといっしょに歩く。走り出すと走る。立ち止まると止まるんだ。グルッと何十本も周囲を囲んでね。でもゼンゼン恐怖感を感じなかったよ。逆に、ナンカ、守られてるって気がしたなあ。そうやって進んで行くとね、急に目の前がパツ、と明るくなってボクは「聖なる樹」を見上げる斜面に立ってたんだ。原生林の森の中、いちめんの雪だった。周囲を見回すと、樹齢数千年という杉ろうぼくの老木たちが「聖なる樹」を守るようにして立っていた。ボクはさつきまでの巨人の足が、この杉たちだったんだなって理解したよ。

「聖なる樹」はボクの目の前に立っていた——大きなみずみずしい緑の二葉でね。もちろんボクは写真で「聖なる樹」を見たことがあったから、今自分が目にしてるものがドコ

か違うな、という意識は頭の片隅にあったよ。でも夢の中のボクは、まったくナツトクしてたんだ。“聖なる樹”は今芽吹いたばかりの緑の二葉なんだって……。ホントに大きかったなあ、葉の一枚がタタミニ、三畳分もあるんだもの。“聖なる樹”を見上げながら、ボクの胸にこみ上げてくるものがあつた。とうとうここまで来たんだな、って。ボクは白い息を吐きながらその場に立ちつくしていた。そのうちボクは“聖なる樹”のやさしそうな木肌にふれてみたくなつて、一歩前に踏み出したんだ。すると

近づくな

ってという声がどこからか聞こえた。ボクは“聖なる樹”の声だつて理解した。上からしずくがポタポタ落ちてきた。雲が切れて日が射して、二葉に積もった雪がとけ始めたんだ。ところが、その雪が蝶の死骸だったんだよ。足もとを見ると、さっきまでの雪がいちめん蝶の死骸に変わっていた。ボクはあわてて踏み出そうとした足を引き上げようとしてバランスを失った。後ろに倒れそうになった。その時、ボクはまた“聖なる樹”の声を聞いたんだ。

おまえはおまえの道を歩め

ってね。次の瞬間、ボクは蝶に変わっていた。力強くはばたくと、「聖なる樹」からY島の上空に舞い上がっていた。ボクは二枚の羽根を打ち振って飛び続けた。「聖なる樹」の声を伝えなければ。「聖なる樹」の声を伝えなければ」っていう一念でね。抜けるような青空だった。もうどこまで来たんだろう。下を見ると、日本列島が見えた。ボクは「聖なる樹」の根が海を越えて日本列島まで達しているのを見たんだよ。いや、日本だけじゃなかった。まるい地球のスミズミにまで「聖なる樹」は根をはっていったんだ。ボクは一瞬のうち、自分が今まで「聖なる樹」の毛根を踏みしだいて生きてきたことを理解したんだ。

「聖なる樹」の根をふみしだくな！ 「聖なる樹」の根をふみしだくな！」

って叫びながら、ボクは飛び続けた。でも力つきてしまった。フツ、とからだから力がぬけて海に落ちていった。ボクは、ああ、これで死ぬのかな、と思ったよ。波の上に白い二枚の羽根がただよっているのが見えた。ずいふんとおくまで飛んできたと思っていたけど、そこはY島のうみべだった。宿舎のウラの岩場の波うちぎわだったんだよ。最後に意識がなくなるまえ、岩のうえに子どもが西日をうけてひとり立っているのが見えたように思った。顔はわからなかったけれどね。

夢からさめてボクはすぐ海岸へかけて行った。どこへ行ったらいいかボクには分かっていたんだ。夢の最後でみた岩場が、ボクがいつも瞑想してた場所だったからね。ジッサイ、

若月さんとミドリちゃんはそこにいた。モッチョムの方を向いて……」

「フリー」

K & Yさんが二人いっしょにタメ息をついた。僕はもの悲しくなって、タメ息も出なかった。ナムさんがゆで卵を一つとると、テーブルの端で割った。ナムさんが力を入れすぎたために、卵がガチャツ、と割れて白身が飛び出してしまった。ナムさんは皆の顔を見て笑ったが、誰も笑わなかった。K & Yさんはナムさんの手もとを見つめていた。僕も同様だった。ナムさんはカラをていねいにむきながら言った。

「自由っていうのは、しゃべるもんじゃなくてそれを生きることなんだね。ボクは今日蝶になって飛んで、初めて分かったよ」

そう言うと、ナムさんは卵を口の中にほうりこんでモグモグと食べた。三人ともだまってナムさんの口もとを見つめていた。ナムさんは指で口のまわりをふいて言った。

「ボクは今まで生徒たちに『オマエらも自由に生きるよ』なんて言ってたけれど、どんなにそれがゴーマンなことだったか……。自分ではね、組合活動なんかも熱心にやって、イッパシの反体制活動家気どりでいたんだよ。オレだけは、体制の押しつけてくるワクから自由だってね……。でもそうじゃなかった。ボクはほんとうは自由を恐れてたんだ。ボクのモチアゲてた自由なんて、タカダカ体制の許容する自由に対するアンチテーゼ

でしかなかったんだ・・・」

ナムさんはいつものようにヘラヘラ笑いをしなかった。僕はその時初めてナムさんの真顔を見たように思った。ナムさんはきつと社会の教師なのだろう。体制とか反体制とかムズカシイ言葉を使ってるから・・・。

「あ、もうこんな時間じゃないか」

掛時計の方に目をやったナムさんが、スットンキョウな声を上げた。午前四時を回っていた。窓の外はすっかり明るくなっていった。

「あしたはみんなで、警察へハイキングだろ。それまで少し休まなくちゃ。さあ、もうひと寝入りしよう」

ナムさんがオドケて言うのと、Ｙさんもうなずいてテーブルの上を片づけ始めた。砂糖菓子の子の包みをナムさんの方に差し出すと、ナムさんは、いらぬ、というふうな手を振った。Ｙさんは僕の方を見た。僕も首を横に振った。

「そう。それならいたたくわ。ありがとう」

Ｙさんがそう言って菓子の袋とゆで卵をリュックに入れた。三人が立ち上がってドアの方に歩き始めた。ナムさんが振り返って僕に言った。

「Ｏちゃんにも近いうち、ナニカ起こりそうな気がするよ」

チャメツ気たつぷりの表情だった。Yさんが、「じゃあね、オヤスミ」と言つて出て行った。最後にKさんが僕にウインクをしてドアを閉めた。

その夜（正確に言うとその朝）、期待したことは何も起こらなかつた。僕はドアをノックする音で目が覚めた。

「Oチャン、起きてるかい。時間だよ」

Kさんの声だった。警察に行く時間になつても僕が起きてこないで、部屋まで迎えに来てくれたのだらう。あわてて起き上がると僕はドアを開けた。

「けさ、チヨット腹が痛くて・・・」

僕はウソをついた。Kさんにはすぐ見破られてしまった。

「エ、Oチャンも？まさか、オジジじゃないだらうねえ」

イタズラっぽくさぐるようなKさんの目つきに僕は思わず吹き出して、ハクジヨウしてしまった。

「今日は“聖なる樹”に登つてみたくて、警察へは行きたくないんす」

それはほんとうだった。昨晚（いや、まだけさだ）寝入る前に、僕はあすこそ“聖なる樹”に会いに行こうと決めていたのだ。それに警察でアレコレ僕のプライベートなことをきかれるのもイヤだった。Kさんはそんな気持ちの僕を深くせんさくもしないで

「ウン、分かったよ。警察じゃあ、うまく言っとくから」

と言って、疲れてクマのできた目でウインクするとドアを閉めていった。

後で夕食の時にK&Yさんから聞いたのだが、警察へはNさん、Sさん、ナムさん、K&Yさんの五人で行ったそうだ。若月さんは、頭が痛いから、と言って行かなかった。ミドリちゃんはとなりの部屋の人たちに預けていったそうだ。警察では二十分ほど、カンタンに事情をきかされただけだった。僕のことアレコレきき出さなかったそうだ。警察のあと、救助隊を出してくれた役場と消防署へ菓子折りを持ってお礼を言いに行った。結局ナンダカンダで宿舎に戻ったのは昼まえになっていたそうだ。警察回りは宿でワゴン車を借りてSさんが運転して行ったのだが、最後の消防署が終わって宿舎に戻る道で、助手席に座っていたNさんが

「ホー、やっと終わったよ。午後は、ミンナ、厄落としに温泉でも行かない？」

と言い出した。温泉といっても宿舎の近くの元湯ではなく、車で十五分ほど行ったところにある海中温泉のことだった。そこは、海岸の波打ち際に露天ブローがあつて、満潮時になると海の中に没してしまうのだ。その日はちょうど午後遅くが干潮にあたっていた。誰も異論はなかった。

宿舎に戻って昼食時に、Nさんからそのことが提案された。その日は午前のセッション

は中止でフリータイムになっていたのだが、午後もみんな近くの温泉に遊びに行かないか、と。ワークシヨップが連日続いていたこともあって、皆手をたたいて喜んだそうだ。温泉へはマイクロバスを借り切って行った。K & Yさんはもちろんミドリちゃんを連れて行った。ナムさんは、「チョット考えたいことがあるから」と言つて温泉へは行かなかつたそうだ。若月さんは一日中部屋に閉じこもつていたようだった・・・。

僕は着がえると急いで食堂へ行った。もう九時を回つていたので食べている人はほかに一人しかいなかった。朝メシを食べ終わると、僕はモツチヨムに行った時のように、おひつに残つたごはんを握りメシを作つた。窓の外を見るとドンヨリ曇つていたので、フロントの人に今日の天気をきいてみた。

「パラパラツとは来るかもしれませんが、午後からは晴れるつていう予報でしたよ」
と係の女性が言つた。僕が「聖なる樹」まで行くんだけど、と言うと、山の中では雪に変わるかもしれませんがねえ、と付け加えた。

寒くなるといけないのでジャケットを着こみ、ディパックにはメシやコーラ、レインウェアを入れて宿を出た。Y島に来てから愛車にまたがるのは今日が初めてだった。「聖なる樹」へは、来た時とは逆に東海岸を北上し、途中から内陸へ折れるのだった。海岸沿いの県道からつづら折りの山道へ入つても道は悪くなかつた。アスファルトの舗装道路だった。標

高が高くなるにつれて側溝にところどころ雪が残っていた。こんな南の島でしかも三月に雪を見るとは——Y島はつくづく不思議な島だな、と思った。

宿を出てから小一時間でダムサイトに着いた。車道はそこで終わっていて、ここからは片道四、五時間歩いて山へ入らなければならぬのだ。僕はダムサイトの空き地にバイクをとめると、「行ってくるよ!」と言ってガソリンタンクをポン、とたたくと歩き出した。ダムのおん堤に沿って、森林鉄道の鉄橋が渡っていた。はじめはこの軌道をエンエンと歩いて行くのだった。森林鉄道はもう廃線になって使われていなかった。深い峡谷をぬうようにして、軌道は続いていた。下を見れば、数十メートルの谷底に川が流れていた。鉄橋には手すりなど何もないので、一歩まちがえて転落すれば即死だった。

時おり小雪が舞った。僕はレインウェアを取り出して着た。しばらく歩くと雪は止んだ。僕は上だけ脱いでしまった。また降ってきた。また取り出して着た。そんなことが何度か続いたので、しまいにはめんどろになって着たままにしていた。ムシで体が汗ばんできた。枕木を見つめて歩き続けた。山肌には見渡すかぎり杉が植林されていた。誰にも会わなかった。二、三度小休止をとった。

歩き始めてからどのくらい経つだろうか。森林鉄道の軌道敷から「聖なる樹」へ入る分岐点にきた。ここからは森の中の登山道を歩いて行くのだった。森に入ると、雪がくるぶ

しまで積もっていた。枕木の上にはそんなに雪は残っていなかったのだ。僕はY島へ来る前にツーリング・ブーツを買っておいでよかつたと思つた。先に歩いて行つた人の靴の踏み跡が雪の上に続いていたので、これなら道に迷うことはなさそうだった。森の中は静寂につつまれていた。時おり小鳥の鳴き声があった。風が吹いて木が揺れると、枝に積もっていた雪が、ザツ、ザツといつて落ちてきた。下を見つめて歩いていっているうちに、僕は不思議なことに気がついた。靴の踏み跡がどれも向こう側を向いていたのだ。森の中に入つてもやはり誰とも出会わなかつた。

そうやってどれくらい歩いただろうか。「『聖なる樹』まであと〇KM」という道標を過ぎた時に、いきなり『聖なる樹の守護霊』が現れた。『聖なる樹の守護霊』と言うのは、『聖なる樹』と同じくらい樹齢のある杉の老木ろうぼくのだが、だいぶ昔に切り倒されて、今ではその切り株しか残っていなかつた。『守護霊』と呼ばれるのは、この切り株がY島の中でも杉の古木こぼくが残っている原生林の入口に、城門のように立ちはだかっているところからその名がついていた。それほど大きな切り株だった。ヘタな家の一軒分くらいはありそうだった。切り株の中はホラになつていて、入口には小さな赤い鳥居が立っていた。中に入つてみると、ホラの中を清水が流れていた。手ですくつて飲むと、たとえようもなくウマかつた。ホラの中は明るかつた。切り株が腐つて穴があき、空が見えたのだ。清水のわきに、小さ

なホコラがまつつてあった。僕はその前にひざまずき、手を合わせた。

「K、やっとここまでやって来たよ」

僕はKの冥福を祈った。線香でも持つて来て上げてやればよかったのだが、まさかこんな山の中にお堂があるとは思ってもみなかったのだ。ホコラには、おさい銭なのだろうか、十円玉や百円硬貨がいくつか置いてあった。僕はそれを見て、デイバックからバイクのキーを取り出した。僕のバイクのキーではなく、死んだKのバイクのカギを。一月下旬、病院から退院して心の整理がついた僕がKの家へお焼香に行った時、Kのオフクロさんが僕にくれたものだった。

「あの子がたいせつにしていたものだから・・・友だちといつても、アンタしかいないようだったから・・・」

Kのお母さんは目がしらをpushさえながら、僕にそのカギを手渡した。僕はそれを「聖なる樹」の根元に埋めてこようと思っていたのだが、このホコラを見て、ここに置いていこうか迷ってしまった。しばらく考えて、やっぱり最初のとおり「聖なる樹」のところに置いてこようと決めて、ジャケットのポケットに入れた。

外へ出てみると、明るくなっていた。見上げると、灰色の雲がちぎれるように飛んで行って、時々青空も顔をのぞかせた。これはさいさきがいいな、と思つて僕が一步踏み出した

時、どこからともなく

ウオーン

ウオーン

という音が聞こえてきた。工作機械の出す音のように思えた。まさかこんな山の中で工場でもあるまい、と思つてあたりを見回すと

ウオーン

ウオーン

またその音がしてきた。僕は目をこらして音のした方を見て、思わずアツ、と飛びのいてしまった。行く手の十数メートル先の雪道の上に、ドス黒い動物が体を斜めにして遠吠えをしていたのだ。獣の毛は、水から出てきたばかりのように全身、体になでつけられていた。僕は一瞬、オオカミかな、と思つた。でもオオカミは日本では絶滅していたはずだ。そう思い直すと、山犬のように思えてきた。僕は相手の出方をうかがおうとして、一歩足を踏み出した。するとその山犬は同じ姿勢で後ずさりしながら

ウオーン

ウオーン

と吠え続けたのだ。鎖につながれてウナるだけの飼犬ならまだアイキョウがあった。

僕は山犬の反応に背筋がゾツとした。仲間を呼び集めている、そう思ったのだ。集団で襲ってくる山犬ほど恐いものはない。

僕は逃げ出していた。後も見ずに走り続けた。後ろを振り向くとあの山犬が、大コウモリのように僕の上にバツ、と覆いかぶさってくるような気がした。何回か木の根に足をとられてころんだ。それでも走りに走った。無我夢中でかけ続けながら僕は、けさナムさんの語っていた夢のことを思い出していた。

〈近づくな〉

“聖なる樹”はナムさんにそう言ったのだ。僕にはあの山犬が、“聖なる樹”の使者のよう
うに思えてきた。山犬は吠えながら語っていたのだ。汚けがれたオマエには、“聖なる樹”に
会う資格がない、と・・・。

ようやく森林鉄道の軌道敷まで出た。ここまで来ればだいじょうぶだろうと思つてそば
の大石に腰を下ろした。汗をかいていた。レインウェアを脱ぎ、ジャケツトも脱ごうとし
た時、Kのバイクのカギをディパックにしまつておこうと思つてポケットに手を入れた。
ない！カギがなくなつていたので。僕は何度もさぐつてみた。ほかのポケットも調べて
みた。もしや、と思つてディパックから持ち物を全部出して振つてみた。やはり出てこな
かった。“守護霊の樹”から逃げ帰る時に落としたとしか考えられなかった。実際何度も

ころんでいたのだ。僕はヘタヘタと座りこんでしまった。目の前が真っ暗になってしまった。僕の生命いのちの次にたいせつなもの、それを僕はなくしてしまったのだ。このY島への旅は、Kのバイクのキーを「聖なる樹」の根元に埋めに來たようなものだった。もう一度森の中に戻ってさがそうかと思つたが、できそうになかった。僕にはそんな体力は残っていなかった。これからダムサイトまで歩いて帰れるかどうかさえ不安だったのだ。それほど肉体的にも精神的にもグツタリしてしまった。気を落ち着かせようとして握りメシを食べた。メシ粒は味もそつけもなくのどを落ちていった。Kのカギの落ちた所が、Kにとつての墓なんだ——僕はそう思つて自分を納得させようとした。見上げると、空は晴れて青空が広がり日が射してきた。僕は立ち上がった。もう行く時だった。

重い足を引きずるようにして枕木の上を歩いて行つた。日に照らされて、降り積もつていた雪がとけ始めた。軌道敷におおいかぶさるようになつて生えている木々の枝先から、しずくがポタポタ落ちてきた。運悪くそれが髪の毛や首すじにあたると、僕は神経質なままで手でぬぐっていた。ヒヤツとして冷たかつたからではない。蝶の死骸に思えて気持ち悪かつたのだ。

ナントカ明るいうちにダムサイトまで帰り着いた。体がクタクタに疲れていたので正直言つてバイクには乗りたくなかつたが、こんな山の中でそんなことも言つてられなかつた。

エンジンをかけるとバイクが唸り始めた。股ではさんで発進しようとした時、股ぐらで唸りを上げているバイクが、僕の中のドス黒い力のように思えてきた。あの時——金属バットを持ってブルブル震えながらオフクロの前に立っていた時に感じたのと同じものだった。それは、誰に対して向けたらいいのか分からないヤリ場のない怒りだったのだ。僕はこのドス黒いものに突き動かされて、自分が何かトンデモナイことをしてしまうのではないかと不安になった。それこそ持てる力を振りしぼって、僕はバイクを運転していった。少しでも力を抜くと、そのままスーッと谷底へ転落していきそうだった。

何とか自分の中のドス黒いものを押さえ、て宿舎の手前までやって来た。フト見ると、県道沿いに写真屋の看板が出ていた。僕は瞬間的にウィンカーも出さずに左折していた。『聖なる樹』まで行けないのなら、せめて写真だけでも手に入れようと思ったのだ。

小さな写真屋だった。ガラス戸を開けると、奥から主人が出てきた。中年の男だった。

「あの一、『聖なる樹』の写真、置いてありますか？」

僕はオズオズときいてみた。

「『聖なる樹』の？あいにく、ウチにはないねえ」

僕はダメだと分かっている、主人に向かって説明していた。Y島へは『聖なる樹』に会うために来たのに、意外と奥深いところに生えてて行けなかったこと。宿舎で売っている

絵ハガキの写真がイマイナで、ぜひいい写真を手に入れて帰りたいこと……。

主人は困りはたようすで聞いていたが、僕が話し終わると

「これは売り物ではないですが、あげましょう」

と言って、横の壁に貼ってあった“聖なる樹”の写真をはがして僕にくれた。

「私が写したもんだけど、ネガがあるからいいです」

僕は思いもよらぬ好意にうれしくなって、コメツキバッタのように何度も頭を下げて札を言った。その日の惨たんたるツアーが、最後で一矢報われたようだった。

宿へ戻ると夕食の時間になっていた。部屋で着がえてひとフロ浴びてから食堂に行くと、いつもの席にK&Yさんがミドリちゃんを間にはさんで食べ始めていた。

「やあ、お帰り。どうだった？」

僕が席に着くと、とよりからKさんがミソ汁をすすりながらきいてきた。僕は雪が降り出して“守護霊の樹”までしか行けなかったとウソをついた。でも帰りに宿舎の近くの写真屋さんで、“聖なる樹”を撮った写真をもらったと付け加えた。

「あら、よかったじゃない。後で見せてね」

ミドリちゃんにスプーンでごはんをやりながら、Yさんが言った。ミドリちゃんはまったく僕には気もないようすだった。

「ボクラのワークショップではね、”聖なる樹” ツアーが中止になっちゃったんだよ」

Kさんがいかにも残念そうに言った。Kさんが話してくれたところによると、こういう事情らしかった。

当初、ワークショップでは今日かあすの予定で”聖なる樹” ツアーがスケジュールに組まれていたのだが、今日はもちろん午前中の警察回りが入って行けるはずもなかった。皆あすこそは、と期待していたのだが、海中温泉に行った帰りのバスの中で、主催者のNさんからツアーの中止が提案されたのだった。

一言で言えば、主催者のNさん・Sさんに自信が持てなくなったのだ。”聖なる樹”はモツチョムとはくらべものにならないほど山の奥深くにあつて、それだけ危険でもあった。ワークショップのメンバーの中には高齢の人もいて、万一のことを考えると、主催者として責任が持てないように感じてきたのだ。

宿のマネージャーという人のアドバイスも大きかった。この人にはきのう警察へ搜索願を出す時にイロイロ相談に乗ってもらっていたのだが、昼食後、温泉行きのマイクロバスの手配を頼みにNさんがフロントに行った時あしたの”聖なる樹” ツアーのことも口に出すと、マネージャーはNさんをロビーの隅に連れて行ってこう”説得”したそうだ。

「きのうの今日ですからねえ……。皆さん、遠くからいらして行かれない気持ちにはヤ

マヤマでしようが……。地元感情というものもありますからねえ……。ここはジシユクされた方がよろしいかと思いますが……」

Nさん・Sさんもそれ以上強くは言えなかった。Nさんの説明を聞いて、バスの中でも異議をとねえる人はいなかったそうだ。ツアーの中止が決まったあとYさんが立ち上がって

「皆さん、スイマセン。私たちの不注意な行動で皆さんに御迷惑をおかけして」と謝ると、「いいんだよ、気にするな」という声がかかって、K&Yさんはその一言に救われた、と言っていた。

そんな二人の話を聞きながら僕の方が早く食べ終えたので立ち上がろうとすると、Kさんが僕の肩に手を置いてイスに座らせて、僕の耳に口を近づけてきた。それからKさんが僕にささやいている間、僕は耳がムズガユくてしようがなかったのだが……。

「Oチャン、今日温泉でね、地元のオバアチャン達が後から入ってきたんだよ。あそこは混浴なんだ。イロイロ話をしてるうちに、ボクは前から気がかりになってたことをきいてみたんだ。『あの、モツチョムってどんな意味なんですか?』——オバチャン達はどうか答えたと思う?」

そこまで言うとKさんは、顔を離してイタズラっぽい目つきで僕を見た。僕は正直分からなかったので首を振った。するとKさんはまた耳もとに口を寄せて

「オバチャン達はゲラゲラ笑ってナカナカ教えてくれなかったけど、とうとう最後に『おめえ、モッチョムたあ、オメコのことだがあ』だつてさ」

Kさんは僕の顔を見てウインクした。僕はアイマイな笑いを浮かべて席を立った。正直言つてなぜそんなにKさんがうれしがっているのか理解できなかつたのだ。

部屋へ戻ると、僕はけさから敷きっぱなしにしてあるフトンの上にゴロリと横になった。体は疲れ切っていたが、頭は妙にサエてて眠れなかつた。今日いちにちのことが走馬灯のように浮かんできた。「守護霊の樹」で祈つたこと、山犬に吠えられて逃げる途中バイクのカギを落としたこと、最後に写真屋さんから写真をもらつたこと……。

結局、僕は「聖なる樹」から拒まれたのだつた。そう結論するよりほかなかつた。まだオマエは未熟なのだ。「聖なる樹」に会う資格などないのだ……。

そんな失意のドン底の僕にとつて、唯一の救いだつたのが写真屋さんくれた「聖なる樹」の写真だつた。僕は写真をディパックから取り出して、枕もとのスポーツバックに立てかけておいた。寝返りを打つて、写真をながめてみた。よく撮れた写真だつた。季節は春だろうか。「聖なる樹」から燃えるような緑の若葉が吹き出していた。「聖なる樹」はほんとうにみずみずしいな、と思つた。きつとその木肌も、あの「友の樹」のように、やさしくてあたたかいのだろう……。

ナムさんの夢を思い出した。ナムさんは二葉の“聖なる樹”から舞い上がったのだが、僕は山犬に吠えられてシツポを巻いて逃げてきた。その落差は激しかったが、僕は写真を見つめているうちに、何だか“聖なる樹”から励ましののようなものを受けてるような気がしてきた。どんな励ましか、その時はまだ言葉で表せなかったが、確かにそう感じていたのだ。ドアをノックする音が聞こえて、僕を体を起こした。

「アラ、ゴメンナサイ、寝てた？」

ドアを開けるとK&Yさんが立っていた。ミドリちゃんを寝かしつけたので、僕の部屋へ“聖なる樹”の写真を見に来たのだ。僕は疲れてるからと言って二人を部屋へ入れずに、入口に立たせたまま写真を見せた。

「いい写真だね」

「そうねえ」

「ボクラも “聖なる樹” に行きたかったねえ」

「そうねえ」

「ミドリにも会わせなかったなあ……。Oチャン、ボクラは実は “聖なる樹” にちなんでミドリの名前をつけたんだよ。男だったらミズキにしよう、とね」

Kさんから言われて、僕はミズキはどういう字をあてるのか頭の中でイロイロ思い浮か

べてみた。

「アリガトウ」

Yさんが写真を返すと、僕に言った。

「Oちゃん、疲れてるようだけど……。あしたは私たちのワークショップの最後の日なので、それで『聖なる樹』ツアーも中止になったので、仮面の祭りをやることになったのよ。朝からみんな仮面を作って、午後は踊りの練習。夜はみんなでパーッと仮面舞踏会、楽しくね。Oちゃんも、もしよかったら来て踊らない？みんなも歓迎すると思うわ」

僕はアイマイにうなずいておいた。それほど行きたいという気持ちは起きなかった。フトンに戻ると、『聖なる樹』の写真を枕もとに立てかけて寝た。

その夜僕は夢を見た。暗い海岸に立っていた。足もとは砂浜だった。遠くから海亀に乗ってKがやってきた。海亀はまっすぐ僕の方に向かって進んできた。振り向くと、背後の黒々とした山の頂上が灯台のようにチカチカ光っていた。亀は手足をゆっくり動かしているだけなのだが、水中翼船のように海面を疾走してきた。

やあ

というようにKが片手を上げた。Kはバイクに乗る時のような前傾姿勢をとっていた。

ザツ、ザツ

と音を立てて亀が砂浜に乗り上げた。そのとたんKは反動からもんどり打って亀の背からころげ落ちてしまった。砂浜に落ちたKは、僕の足もとにコロコロところがってきた。Kはピンポン玉のような白い亀の卵に変わっていたのだ……。

そこで目が覚めた。時計を見るともう十一時を回っていた。きのうの疲れからか、だいぶ寝過ぎしてしまったらしい。フトンの中で足を動かしてみた。ふくらはぎにチョット引つかかるものを感じたが、別にたいしたことはなく歩けるだろう。僕は亀の卵をさがしに行こうと決めていた。Y島には海亀が産卵に来る砂浜がいくつかあることは、観光パンフを見て知っていた。フトンの中でうつ伏せになって、枕もとにパンフを広げた。寝返る時に見た窓の外は、今日も薄日がさす花曇りの天気を示していた。

西海岸へ回るバスの終点が、宿舎から最も近い海亀の産卵場所だった。バスの時刻を調べてみると、昼過ぎまでなかった。僕は昼メシを食べてから出かけることにした。それまでは洗たくタイムだ。考えてみれば、僕はY島へ着いた日に洗たくしただけだった。そんなことに気が回らないほど、時があわただしく過ぎ去っていた。

昼食どき、ワークショップの人たちは食堂に姿を見せなかった。今日が最後ということ、仮面の踊りに熱が入ってるのだろう。近くの公民館へ弁当持ちで行ったのかもしれない。玄関を出る時とめてある僕の愛車を見たのだが、もう乗る気はまったくなくなっ

ていた。何か自分から離れて行く友人を見るような気がした。

西海岸を見るのは初めてだった。左手に海、右手には山が続いていた。途中「○○海中温泉入口」と書いてある看板が目に入った。Kさんたちはきのうここに来たのだろう。バスの乗客は数人しかいなかったが、終点まで乗ってきたのは僕とほかに中学生が一人だけだった。僕はまず道路を横切って反対側のバス停まで行き、帰りの時間を確認した。時計は持つてきてなかったが、宿舎を出た時の時間からおしはかって、一時間ほど帰りのバスまで時間があった。そのあとはもう終バスで、それでは帰りが遅くなってしまうのだった。

さて、海はどっちの方向かな、と頭を回してみた。バス停は海岸線から離れていたのだ。誰かにきこうと思ったが、道の両側には民家が十数軒並んでいるだけで商店はなかった。フト、数メートル先に、老婆が腰を下ろしているのに気づいた。畑のあぜ道に杖を手にしゃがみこんでいたので、お地藏さんに見えたのだ。僕はあのおばあちゃんにきいてみることにした。

「あの、スイマセン。海はどっちの方角ですか？」

僕は少しがみながらたずねた。おばあさんは杖の上に両手を置き、その上にのせた顔を僕の方に向けて言った。

「ア？」

耳が遠いらしかった。僕はもう一度こんどは大きな声で言ってみた。老婆は、日に焼け

た顔の中に沈みこんだような小さな目をジッと僕に向けていた。

「オメエ、こんなどこへ何しに来た？」

僕の質問にはすぐには答えてくれず、老婆は逆に僕にきいてきた。僕は、海亀の卵をさがしに来たのだと言った。老婆はそれを聞くと

「オメエ、亀が来るのは夏の夜だわあ」

と言つて、齒の欠けた口をモグモグさせながら笑った。僕もつられて笑ってしまった。もちろん僕はそのことは知っていた。観光パンフに書いてあるのを読んでいたのだ。でも僕には確信があつた。Kが初めて僕の夢の中に現れて示してくれたことなのだ。卵は必ず落ちていくだろう。いや、卵そのものではなくて、ピンポン玉のような白くて丸い石か貝殻を僕はここまでさがしに来たのだった。

老婆から教えられた道を歩き始めた。すぐに道が二股に分かれて、どっちへ行つたらいいかわからなくなつてしまった。振り返つておばあさんを見ると、杖を振りかざして海の方を示してくれた。僕は軽く頭を下げてそちらへ歩いて行つた。

川の河口に出た。小さな漁港になっていた。海に突き出た港の突堤を回ると、小さな砂浜が広がっていた。向こうの岬まで続く弓形の砂浜だった。砂の色は、僕が今まで見たこともない人肌色をしていた。僕は砂浜まで走つて行くと、ゴロンと横になった。目を閉じ

ると、まぶたの裏まで春の陽が明るくさしてきた。波が静かに打ち寄せていた。

子どものころ、一家で行った外房の海岸を思い出していた。小さな漁村で、そこにおばあちゃんの家があったのだ。もうだいぶ前のことでボンヤリとした記憶しかないが、それでも父と海岸の砂浜で遊んだことは鮮明に覚えている。大きなビニールのボールを波打ち際で父とつき合った。僕はまだ小さくて、海へ入れてもらえなかったのだ。生まれたばかりの弟を抱いた母が笑いながら見ている。そのとなりに、日傘をさしたおばあちゃんがしゃがみこんでいた。遠い日の記憶……。

僕は目を開けて顔を横に向けた。すると見たこともない貝殻がたくさん落ちてるのに気づいた。それは海岸線と平行に帯のようになっていた。きつと海が荒れた時に、ここまで打ち上げられたのだろう。僕は胸ポケットからビニール袋を取り出すと、体を起こして両手でサーツと貝殻をかき集めて袋に入れた。それから立ち上がって「亀の卵」をさがし始めた。

Y島の山にはカコウ岩が多いのだろうか。白くてゴマをふったような丸い石はいくつもあったが、僕の求めていたのは「純白」な丸石か貝殻だった。僕は目をサラのようにして足もとを見ながら砂浜を歩いて行った。ピツタリくるのがナカナカ落ちてなかった。僕は岬の付け根の岩場まで行ってまた戻ってきた。少しアセリ始めていた。バスの時刻が気になりだしたのだ。目が充血してくるような気がした。チラチラしてきた。アセる心を押さ

えながら、僕は心の中でくり返していた。Kが示してくれたことにマチガイなんかないんだ。求める者は必ず——と、僕は自分に言いきかせた——与えられるのだ。

海岸を二往復した。それでもピツタリくるのが落ちてなかった。もうバスの時間だろう。とうとう僕は走り出していた。小走りにかけながらそれらしいのを拾っては、またそれを投げ捨てた。そんなことのくり返しだった。もう時間だろう。行かなければ。後ろ髪を引かれる思いで僕は海岸をあとにした。足どりは重かった。またミジメな気持ちに襲われていた。きのう、「聖なる樹」から戻ってくる時に感じたのと同じ気分だった。

バス停まで行くところまでバスが来た。乗客はほかに母子連れがいるだけだった。僕は一番後ろの座席に腰を落とした。走り出したバスの窓から、何度も何度も振り返って海岸の方を見た。まだあきらめきれなかった。疲れてきたので、横になって休みたかった。フト、ビニール袋を手に行っているのに気づいて開けてみる気になった。片手を袋に入れてつかみ出すと、手のひらにイロイロ珍しい形をした貝殻ののっていた。僕はボンヤリとそれを見ていた。何回かそんなことをくり返した時、僕は手のひらに目をやってアツ、と叫んでしまった。いくつかの貝殻にまじって、亀の甲羅に似た貝殻が一つのついていたのだ。僕はそれを指でつまんで顔に近づけた。ほんとうに亀の甲羅そっくりだった。ラグビーボールを横に二つに割った形をしていた。一種の巻き貝なのだろう。ラグビーボールを割った

底面にあたる部分は、中にめくれこんでいた。甲羅は茶褐色で、ところどころに白い円いハン点がついていた。粘土で頭と足をつければ、ほんとうに子亀に見えた。

Kはウソをつかなかったのだ。僕は目がしらが熱くなってきた。中学の時に観た映画を思い出した。生徒会主催の「三年生を送る会」で上映した『卒業』というヤツだ。あの映画ではラストシーンで、主人公がウエディングドレス姿の花嫁を奪い返してバスに乗って逃げた。やっぱり一番後ろの席に座っていた。あの男は腕の中に恋人を抱きかかえていたのだが、僕は手の中に亀の甲羅に似た貝殻を握りしめていた。それが僕にとつての宝だった。『寶貝』は、はじめから僕の足もとにころがっていたのだ。手を伸ばせばすぐのところ……。宿舎入口のバス停で降りた時、ちょうどバスの後ろを横切ろうとしていたナムさんとバツタリ会った。ナムさんは首にタオルをかけ、手にはビニール袋をぶら下げていた。髪が濡れていたの、きつと近くの元湯に入つて帰つてくるところだったのだろう。僕を見ると

「やあ」

と言つて片手を上げた。湯上がりのせい、顔がほてつていて上機嫌だった。

「どこへ行つてたんだい？」

ときかれて、僕は、海亀の産卵場所のある西海岸まで散歩がてらに行つてきた、と手短かに答えた。亀の貝殻のことは話さなかった。ナムさんは僕の話に続けて

「実は今日、ボクは辞表を出してきたんだよ、速達で」

とニコニコ笑いながら言った。僕はアツ、と思った。ナムさんの顔が明るかったのは、何もフロ上がりのためばかりではなかったのだ。僕は何も言うことがないので黙っていた。ナムさんもそのまま口をつぐんで、二人で黙って歩いて行つた。僕は東京を出た日から一日、二日・・・と数えてみた。今日は三月三十一日だった。あすからはもう四月だ。ナムさんの辞表は間に合うのだろうか。そんなことをボンヤリ考えていた時、ナムさんが僕に向かつて口を開いた。

「Oちゃん、通信制高校って知ってるかい？」

僕は死んだKから一度聞いたことを話していた。何でも一週間に一度学校へ行くだけで、あとは家でレポートをやつてればいいトコでしょ？

「ウン、まあそんなもんだ」

とナムさんはうなずいた。

「もしもだよ、もしもOちゃんが通信へ行きたくなくなったら、ボクに電話してくれないか。相談に乗ってあげられると思うから。通信っていうのは、昼の全日ゼニテや定時制とくらべて比較的自由なトコだから、Oちゃんには合うんじゃないかな・・・。自由っていつても、あくまで、比較的、に、だけどね・・・」

僕はその場ではナムさんの話を聞きおくだけにした。

夕食どき、やはりワークシヨップの人たちは食堂にいなかった。最後の夜なので燃えているのだろう。僕はYさんから「招待」された仮面の祭りには、結局出ないことにした。僕がワークシヨップのメンバーでなかったからなのはもちろんだが（そして、僕のモツチョム遭難騒ぎでワークシヨップの人たちが「聖なる樹」へ行けなくなってしまったことも、あい変わらず心の隅に引っかかっていたのだが）、僕はもう自分で歩き始める時ではないかと感じていたのだ。ワークシヨップの人たちは、それぞれが求めるものを抱いてここまでやって来たのだろう。それは僕も同じだったが、その動機がどちらかと言えば弱かった。言ってみれば、僕自身の「意志」というよりは、死んだKの魂に導かれて来たようなものなのだ。僕はもう一度出直したかった。足もとをよく見つめて、一歩一歩あるいて行きたかったのだ。僕は拾ってきた宝貝を「聖なる樹」の写真のとなりに並べて寝た。

その夜また夢を見た。あの「事故」の時の夢だった。バイクから投げ出された僕が、冷たい道路の上に仰向けになって寝ていた。Kも向こうで倒れているようだった。それからKが立ち上がった。ヘルメットを脱いで足もとに置くと、僕の方へ向かって歩いてきた。僕は顔を横にしてそれを見ていた。

「K、おまえはブジだったのか?！」

僕は驚きの叫びを上げた。Kはいつものようににはかんだ笑いを浮かべただけで、答えなかった。僕を見下ろしてKが立っていた。膝をつき始めた。上体は立ったままで、Kの膝が僕の膝と触れ合った。それからKは

じゃあな

というように笑って片手を上げると、体を向こうに倒していった。僕の視界からKの姿が消えた。

「手術は成功しましたよ」

どこからか看護婦さんの声があった。ぼくはベトナムの二重体児を思い出した。あの子どもたちは分離手術を受けたのだが、僕の場合はKとの結合手術だったのだ……。

翌朝はまた寝坊してしまった。急いで食堂にかけつけると、食事を終えて出てくるK&Yさんと入口のところでハチ合わせになった。

「Oチャン、これからどうするの？Y島にはまだしばらくいるの？」

Yさんからきかれて僕は困ってしまった。もうY島にとどまる積極的な理由はなくなっ

ていたのだ。K&Yさんはその日の午後のフェリーで帰るということだった。僕もいっしょさせてもらうことにした。ロビーで別れる時、Yさんが

「ナムさんと若月さんが、Oちゃんによろしく、って言ってたわよ」

と言った。若月さんとナムさんは午前の飛行機で帰ることになっていたので、朝早く宿舍を出ていたのだ。僕は若月さんの顔を思い浮かべようとした。モツチョム登山以来、若月さんとはゼンゼン会っていないかった。彼女はその後、ワークショップにも出ないでいたい何をしてたのだろう……。

港までK&Yさんはバスで行った。僕はイヤだったが、仕方なくバイクに乗った。今日もいい天気だった。青空を背に、モツチョムがヌクツと立っていた。最後、モツチョムが見えなくなる左カーブを切る前、僕はモツチョムの方を振り向いた。頂上の人面岩が、ニヤツと笑ったように思えた。僕もヘルメットの中でニヤツとした。イヤな笑いではなかった。また来いよ、と言ってってくれるような、思わずこちらも顔がほころんでくる笑いだった。

港でフェリーを待つ間、K&Yさんはミドリちゃんを連れて待合所の売店に入って行った。ミヤゲを買ってるようだった。僕はミヤゲを買うつもりもなかったが、二人の後にくつついて行った。ミヤゲ物には、Y島特産の杉を使った木工品が多かった。そんな杉細工の一つを手にとってながめていた僕の耳に、店の売り子のおばちゃんが二人立ち話を

しているのが聞こえてきた。

「アンタ、きのうも『聖なる樹』で遭難があつたんだって」

僕はビクツとして聞き耳を立てた。

「東京から来た観光客が夜になつても帰つてこないっていうんで、けさ早く、となりの△△さんのダンナさんが捜索隊で出かけてつたわよ」

「えーえ、また？去年もあそこであつたわよねえ」

僕は二人の話を聞きながら、このおばちゃん達が僕らのモッチョム遭難騒ぎを話しているようすを想像してみた。

「あのモッチョムで?!」

「えーえ、あのモッチョムですよ!」

二人は口を開けて大笑いしたにちがいない。僕もおかしくなつて一人でニヤニヤしてしまつた。そうなんです。あのモッチョムで遭難しちゃつたんですよ。この僕がその中の一人です!—さすがにそこまでは口に出さなかつたが。

二人の笑い話にのせられたわけでもないが、僕はミヤゲを二つ買つてしまった。Y島特産の杉で作つた一輪ざしだつた……。

フェリーの中では三人ともほとんどしゃべらなかつた。特にKさんは、きのう飲み過ぎ

たと言つて、しきりに首を振っていた。僕はウトウトしたり、天井を見てボンヤリしていた。対岸のK市には、夕方近くに着いた。K & Yさんはそこから電車に乗って隣のH市まで行き、神戸行きのフェリーで帰るということだった。僕はその夜はK市で泊まることにしていたので、二人とは港で別れることにした。

「Oチャン、遊びにきてね」

Yさんが僕の手を握りながら言ってくれた。あたたかい手だった。僕はうれしかったが、二人の家はオイソレと行けるようなトコではなかった。二人は紀伊半島の山の中に住んでいたのだ。タクシーが走り出す前、Kさんが僕にウインクして手を振った。ミドリちゃんはフェリーの時から寝たままで、Yさんが抱きかかえていた。僕はタクシーが見えなくなるまで手を振り続けた。

タクシーが行ってしまったあと、僕は愛車を押して駐車場の中をグルグル歩き回った。どこか適当な場所はないかとさがしていたのだ。駐車場のスミがちょうど倉庫の陰になっていて、ドラム缶が横積みされていた。ここならイイだろう。僕は愛車をとめた。キーは差したままにした。バイクはここに置いていくことにしたのだ。ナンバープレートだけドライバーではずした（あとでこれは、駅のゴミ箱に新聞紙でくるんで捨ててしまった）。誰かイイ人に拾ってもらえよ。

Good-bye, My friend!

僕は愛車のガソリンタンクをポン、とたたくと背を向けて歩き始めた。カワサキGPX 250R。短いツキアイだった。僕はジーンズの尻ポケットに片手をつっこみ、片手でスポーツバックを肩にかけながら歩いて行った。ブルース・スプリングスティーンの歌を口ずさんでいた。

K市から東京までは青春18キップを買ってドン行で帰ることにした。お金が少なくなっていたこともあるが、今までバイクに乗ってスピードに酔ってきた反動だろうか、急にユックリと動きたくなつたのだ。東京までは来る時と同じ三泊四日で帰れた。博多、岡山、名古屋に泊まった。

乗客の少ないローカル列車のボックスシートに足を投げ出して、僕はボンヤリと窓の外を流れる景色を見ていた。頭の中は何も考えられない空白状態だった。その時の僕はそれで気持ちが悪かったのだ。時おり四月からどうしようかという考えも頭をかすめたが、すぐに消えて行った。ムリしてアレコレ考えるのはやめていた。ただボンヤリと外の景色を見ていた。そうやって家に着いた。

家に帰ってからもしばらくはボンヤリしている日々が続いた。一週聞くらいたったある日、僕は思い立ってナムさんに電話した。通信に行こうと決めたのだ。

「やあ、Oちゃん、元気かい」

電話口から聞き覚えのあるナムさんの陽気な声が聞こえてきた。僕が要件を話すと、ナムさんはすぐにA県の教育委員会に問い合わせしてくれた。さいわい出願期間はまだ終わっていないかった。僕はナムさんから指示されたとおりにK高校へ必要な書類を取りに行き、願書を出した。試験は面接だけで、続けていく意欲があるかどうかだけをきかれた。試験には受かり―思ってもみなかったことに―僕は二年に編入された。通信は四年制なので、あと三年行くだけでよかった。

Y島へ行く前は、四月からは働こうかなとボンヤリ思っていたのだが、Y島で僕はK&Yさんやナムさんから、自分がどんなに未熟かを思い知らされた。そして彼らから（若月さんも含めて）生きることの意味・重さのようなものを教えられたように思う。僕にはまだまだ知らないことが多すぎると思った。僕の知らない〈世界〉を、自分の目でのぞいて確かめてみたかった。

大検のこともチョット頭に浮かんだが、結局やめてしまった。大学に行くかどうかはまだ分からなかったし、予備校へ通ったり家で一人勉強するのがイヤになったのだ。僕はなにかが欲しかった。通信なら全日^{ゼンニチ}や定時から回されてきた僕のような“オチコボレ”に出会えるだろうという期待があった。それに、今のアルバイトも続けたかった。週いちど学

校へ行くだけでいい通信は、その点でも僕に好つごうだったのだ。

今のバイト先は去年の秋から勤めているスーパーだった。スーパーといっても大手の系列店ではなく、駅前の古い商店街にある食料品店がスーパーにころもがえしたものだ。そこで売り子ではなく、もっぱら店の奥や裏で商品の出し入れ・管理にあたっていた。一月のバイク事故の時にしばらく休み、Y島へ行つた前後も二週間ほど休んでしまった。Y島から戻ってくるバイト先へはすぐに顔を出したが、店のオヤジが僕の顔を見るなり「待つてたよ」と言った。

「Oチャン、確かテレビゲームやつてたつて言ったネ」

「ハイ」

「ウチでこんどコンピュータを入れることにしたんで、そっちの方をやってくんないかな」
ずいぶんランボナーな論理だった。僕はTVゲームとコンピュータはゼンゼン違うんだ、と言つたが、オヤジは笑つて、ウチにはそういうメカに明るいのがOチャンしかいないんだ、と言つた。言われてみればそうだった。小さな店で、従業員は五十過ぎの男の店長と、あとはパートのおばさんが七、八人いるだけだった。結局僕は何とかやつてみる、と答えた。オヤジから信頼されているのがうれしかったし、自分でもコンピュータに関心があつたのだ。時々家で、オヤジの書齋に置いてあるコンピュータをいじつていた。

僕がまかされたのは商品管理だった。オヤジは同じ商店街の電気屋のオヤジから『説得』されてコンピューターを入れることにしたのだが、電気屋のオヤジが商品管理のサンプルのソフトを貸してくれた。さらにイイことに、僕のオヤジが持つてるコンピューターとメーカーが同じで互換性があった。オヤジから頼まれてしばらくは、そのソフトを家に持ち帰って父のコンピューターに入れて研究した。どうにか自分なりにソフトを作ることができた。オヤジは次は、給料や人事管理の面でもコンピューターを使いたいと言っている。また僕がソフトを作ることになりそうなので、実は今から研究書を買ってきて準備しているのだ。

今はそのスーパ―へは一日おきに週三日行き、あとはほとんど図書館に通って勉強している。通信のレポートは、課題を与えられてそれを自分で調べてまとめるものがほとんどなので、図書館でやる方が作業がはかどるのだ。はじめは正直言ってみなクラった。何しろ今まで僕のしてきた勉強が、教師に言われたことや教科書に書いてあることをただムヤミに頭につめこむだけだったのだから。でもそのうちダンダンと楽しくなってきた。自分の中の創造的な力がふるえるように感じてきたのだ。一つ一つのテーマを本を読んだり事典で調べたりして、満足のいく『作品』に仕上がるように努力した。

僕の生活は自分でもビックリするくらい規則正しいものに変わっていた。それと並行して、僕も少しずつ明るくなつて家族の者とも口をきくようになった。Y島から戻った当初

はブスツとして言葉をかわすこともなかったのだが。家の者には僕のこの変化が不思議だったようだ。僕はただ、Y島まで足をのばしてそこで「聖なる樹」という樹齢数千年の生命せいめいの力に打たれたんだ、と言っておいた（Y島での僕の「遭難騒ぎ」は警察からは連絡が入ってなかった。もつともあれは「遭難」というほどのものでもなかったのかもしれないが）。僕の説明を聞いて、オヤジが珍しく

「そんなにレイケンあらたかなら、こんど家族みんなでY島に行つてその樹に会つてよいか。シゲオに案内してもらつて」

と冗談を言った。僕はアイマイに笑つておいた。僕が通信に行きたいと切り出した時は、オヤジもオフク口も黙つて聞いていて、最後に「おまえの好きなようにしなさい」と言つてくれた。僕はほんとうにありがたかった。オフク口は、「シゲオちゃん、人より二年や三年遠回りしたつて、あとでプラスになるものよ」とリキんで言つていた。

四月の末から学校は始まつて、スクーリングにも何回か行つてきた。僕の「期待」に反して、ここでもオバチャン達ばかりだった。中学を出て働いて、子育てが一段落した人たちがまた勉強しに来てるのだ。僕のような全日ゼンニチや定時からの「オチコボレ組」は少数派だった。一年生には多いのだが、ここでもやはり続かなくてやめてしまうのだ。まだ話せる友だちはできていない。ユツクリ時間をかけてつくるつもりだ。体育の時間、競争とか勝敗

とかマツタク関係なしに、オバチャン達とバレーボールに興じているのはほんとうに楽しい。オバチャン達から僕はあい変わらず子ども扱いされているのだが……。

実はおとといがそのスクーリングの日だった。学校の帰りに駅でバッテリーとK高校時代のクラスメートに会ってしまった。彼は一年目の時同じクラスで、僕が言葉をかかわした数少ない人間の一人だった。

「大久保！大久保じゃないか。おまえ今、何してんだ？」

以前の僕ならコソコソ逃げるようにしただろう。でもその時は、自分でも驚くくらい平然と、素直に答えていた。

「I市の通信高校に通ってたんだ」

元同級生とは手を振って別れた。彼は三年になっていた。進路を決める年だ。

そしてきのう、僕は図書館で英単語の意味を調べていた時、辞典を書棚に返しに行つて横の方に蝶の図鑑が置いてあるのに気がついた。僕はモッチョムの頂上で見た三匹の蝶の名前が知りたくなってパラパラめくってみた。どうやら一匹はルリタテハ、二匹はキタテハのようだった。それから僕は昆虫関係の本が置いてある書架の前へ行くと、目で背文字を追つて『蝶の生態』という本を引っ張り出した。その場にしゃがみこんでめくってみた。(蝶の海渡り) という項目に、こんな説明が書いてあった。

モンシロ蝶が集団で海を渡る例は、特に九州南部に於いて数多く報告されている。恐らく過密度による潜在的移動性が促進されたことだと思われるが、くわしいことは分かっている——

僕はY島の“聖なる樹”から無数の蝶が舞い上がる光景を想像してみた。何万という蝶は白い帯となって海を越えて行く……。立ち上がって本を書棚に戻した僕は、思わず頭がクラクラツときてしまった。それは何も立ちくらみのせいだけではなかった。ナムさんは跳んだのだ。そしていつの日か僕も……。僕はそう心に誓った。

Kの墓参りは、僕の通信編入が決まってから行ってきた。家に電話すると、オフクロさんが出て墓の場所を教えてくださいました。東京郊外の丘陵を切りひらいて作った霊園墓地だった。五月の連休前、抜けるような青空が広がった日、僕は線香と花を持って墓参りに行った。Kの墓はすぐ分かった。ひときわ大きくて目についたのだ。誰か僕の前に来たのだろうか。まだみずみずしい花が生けてあった。線香を上げると僕は手を合わせてKに報告した。四月から通信に行き始めたこと、もうバイクはやめたこと、そしてこれからもおまえといっしょに生きて行くよ、と。

そのあとY島から持ち帰った貝殻と砂を墓石の周りにまいた。あの海亀が産卵にくる砂浜ですくってきたものだ。貝殻や石をまいている時、Kの家へ電話した時のオフクロさん

の言葉が耳に響いてきた。

「あの子は、生命いのちと引き換えにワタシラの墓を立ててくれたようなもので……」

オフクロさんは涙声でそう言っていた。Kはあのトシで、生命保険に入っていたのだった……。Y島から戻って二ヶ月、僕はこのノートをカイコが糸をつむぐようにして少しずつ書いてきたが、そろそろそれも終わりに近づいたようだ。今僕は自分の部屋の机に座ってこれを書いている。顔を上げると「聖なる樹」が見える。Y島でもらってきた写真を、写真立てに入れて飾ってあるのだ。それから僕の机の中には宝貝がしまっている。Y島で拾った亀の甲羅に似た貝殻——あれだけはKの墓にまいてこないで引き出しの奥深く入れてあるのだ。Y島の海亀は眠っている。深い、深い海の底のようなやすらぎの中で……。

そしてそのとなりに、僕は腕時計を並べてある。あのモッチョムの頂上で二時四十分をさしたまま止まってしまった時計だ。僕は修理に出さずにそのままお蔵入りさせておくことにした。代わりに今は、ディスカウントショップで買ったニッキュッパ2980円のデジタル時計をはめている。

最後に一つ。Y島で「聖なる樹」から逃げ帰った日の夜、僕は部屋を訪ねてきたK&Yさんを、疲れてるから、と言って中へ入れなかった。本当のところは、部屋の中がオナラの臭いでいっぱい、とても人を入れられるような状態ではなかったのだ。

あの晩、夕食を食べ終えて部屋に戻った僕は、それこそ一時間近くもプースカプースカへをこいでいた。イモや豆を食べ過ぎた覚えはなかった。フトンの上でうつ伏せになりながら僕は、これはモツチヨムの靈気が僕の体に悪い影響を及ぼして、こんなにへが出続けるのだらうと思っていた。

でもそうではなかったのだ。あの日僕の体の中には、モツチヨムの靈の力で引き出された僕の邪よなものが満ち満ちていた。だからこそあの山犬イヌが（という確信はダンダン持てなくなつた。あれは、Y島に多い野生の鹿だつたかもしれない）僕の邪氣に気づいてあんなに吠え続けたのだ。その邪氣があとになつて臭いへとなつて僕の体から吐き出された——
今では僕はそう思っている。